

〔考證〕

この物語の種本は有名なる『土耳其物語』に含まれてゐるものである。(Contes turcs trad. en franc. p. Petis de la Croix. Paris. 1709.—Histoire d'un roi, d'un sofî et d'un chirurgien 参照)

東洋種は概ね教訓的寓意に満ちてゐるが、この物語の如きは最も著しき例の一である。形の整頓してゐるところから考へてみると印度あたりで成長したものともしられるのである。

104、報 恩

昔、或る所に狩獵のみに耽つてゐる武士があつた。或日彼れが例の如く遊獵に出掛けてゐると、偶然一頭の跛をひいてゐる獅子に遇つた。獅子は彼れを見るなり直ぐにその足を見せた。武士は馬から下りて獅子の足を見ると、その足の裏に鋭い刺がたつてゐた。彼れは直にその刺をぬいてやつて、その傷口に膏藥を貼つてやつた。傷は程なくなつた。

この事があつてから間もなく國王は同じ森に獵りをした。そして偶然にもこの同じ獅子を捕へた。

そして長い歳月の間檻に入れて置いた。この頃前記の武士は國王の感情を害したことがあつて、その怒に觸れるの怖れて、彼れが以前から獵り場と定めてゐたところの森の中へ逃げこんだ。彼れはこの森の中で強盜となつた。そして多くの旅人を惱してゐた。國王はこれを見て最早や黙許してゐることが出来なくなつたので、軍勢をかりたて、この森に攻め入り、終に彼れを捕へて仕舞つた。彼れは餓ゑてゐる獅子に食はせられるやうに宣告された。

武士は獅子の檻に投げこまれた。人々は今にもあれ彼れが獅子に食はれて仕舞ふこと、思つてゐた。然るに獅子は彼れをじつと見てゐた後、昔の恩人であつたことを思ひ出して急に尾を振つて彼れの側へ近寄つた。そして七日間食物を食べることなしにこの武士と一つの檻に居たのである。皇帝はこれを聽いて不思議のこと、し、直に武士を檻から出して次のやうなことを訊ねたのである。

「お前はどふ方法を用ひて獅子を手馴したのか」

武士は答へた。

「陛下よ、昔私が馬を森の中に乗り入れました時、一頭の跛の獅子に遇ひました。私はその獅子の足から大きな刺をぬき取つてやり、その後傷口をなほしてやりました。この獅子はその時のものと

同じものだと思ひます。それでこの獅子は私を食はないのでせう」

皇帝は言つた。

「よし、よし、善くわかつた。獅子がお前の一命を助けてゐるほどだから、私も今度だけはお前の一命を助けて置くことにしよう。これを機縁に罪滅ぼしをするが、い、ぞ」

武士は國王にお禮を陳べた。そしてこの後彼れは行ひを慎み、長命を保つて大往生を遂げた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は現在の世界である。跛の獅子は人類、刺は洗禮に依りて引出されるところの人間固有の罪である。檻は悔恨である。安全といふことはこの悔恨に依りて生み出されるものである。

〔解説〕

これは有名なるアンドロクラスの昔話と同じ種類の話である。アンドロクラスが獅子の爲に一命を捨てたといふ話は、皇帝テイベリアス治世當時の實際にあつた話として、オラム・ゲリアスなる者が書き残したことにその發端を持つてゐる。この傳説は果して眞なりや否や容易に判定することが出来ぬが、少くともこれがワルトン一派の學者が既に暗示してゐる如く、東洋傳來の物であるやうに見える。東洋の物語作者は一般に報恩の重んずべきことを高唱してゐる。この物語は畜類が人間に對して恩義を忘れなかつたことを説いたものであるが故に、その目的は明かに道徳的である。特に神に對してはなく、その恩人に對して恩義の情を致すといふ點に東洋式の道徳の特色が宿つてゐるやうである。

一〇五、蛇の恩返し

皇帝セオドシアスは不幸にして兩眼を失つた。彼れは彼れの宮殿に一つの鐘をつるし、何か事件が起る毎に自らその紐を引いて鐘を鳴らすことにしてゐた。鐘が鳴ると、豫てからこの役目を仰せつかつてゐた一人の判官は、その裁判の席に現はれて事件を判決するといふことになつてゐた。

偶々一匹の蛇がこの鐘の紐の下に巢を造つて、そして間もなく子を生んだ。子が成長するやうにな

つてから蛇は毎日或る一定の時刻になると、その子をつれて町外れの或る空地へ遊びにゆくのであつた。ところがその不在中に一匹の鼯が蛇の巢に入つてこれを占領して仕舞つた。そこで蛇が子をつれて巢に還つてみるとこの有様だから、こゝに蛇と鼯との間に喧嘩が起つた。しかし、鼯は蛇の攻撃をものともせず、頑固にも巢を引渡さなかつたのである。蛇は到底この横着者を巢から追出すことが出来ぬと思つたから、例の鐘の紐をぐるぐると己が體で巻いて仕舞つた。そして猛烈に鐘を鳴らしたのである。それは恰度「判官様直ぐ来て下さい。そして判決を與へて下さい。鼯が不届にも私の巢を奪つて仕舞つたんです」とでも言つたやうであつた。

判官は鐘の音を聞いて直に判事席に現はれた。しかし、誰れも其所に居らなかつたから直に去つて仕舞つた。蛇はこれは失敗だと思つたからもう一度警鐘を鳴らした。判事は再び現はれた。しかし、今度は鐘の紐に蛇が巻きついてゐるのを見たので、又それと同時に、鼯が蛇の巢に入つてゐるのを見たので、この事實を委しく皇帝に話した。皇帝は判事に次の如く言つた。

「降りて行つて鼯を追出してくれ、それからたゞ追出すばかりでなく殺してくれ。そして蛇に巢を返へしてやるんだ」

皇帝の命令がその如くに行はれた。翌日、皇帝が彼れの臥床に横はつてゐると、前記の蛇が口に一つの寶石をくはへて王の寢室に入つて來た。侍従の人々はこれを見て皇帝にこの事を告げた。皇帝は「この蛇は私に何の害も加へぬのだから決して害してはならぬ」と命じた。蛇はする／＼と入つて來て王の臥床の上に登つて來た。そして皇帝の目の近くへ寄つて前記の寶石をその目の上に落した。それからさつさと部屋を去つたのである。寶石が王の目に觸れるや否や皇帝は直に視力を恢復した。彼れは非常に悦んで蛇の行衛を尋ねた。しかし、何所へ去つて仕舞つたのか再びそれについて聞くことが出来なかつた。王はこの比類なき寶珠を大切に保存した。そして彼れは一生涯幸福に暮した。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は靈界の事に盲目であるところの俗人を指差したものである。鐘とは説教師の舌の謂である。紐とは聖書の義である。蛇とは賢明なる懺悔聽取僧のことである。この者から子供即ち善事業が生れて來る。しかし、僧侶も懺悔聽取僧も、屢々小膽にして且つ怠慢のことがあつて、天國の事よりは寧ろ俗界の事を悦ぶ者がある。是に於て惡魔なる鼯が僧侶の代りをなすことになる。蛇は寶石を持つてゐる……懺悔聽取僧……聖書のみは盲人に視力を與へ得るのである。

〔考證〕

これも東洋種であらうと思はれる。國民の訴へを聴く爲に國王が苦心したといふことや、蛇と蟻とが争つたことや、蛇が寶玉を持つてゐたといふこと等は皆東洋式である。特に蛇が寶玉を持つてゐたといふ傳説は東洋一般に普及されてゐるもので、アラビアに於ては最も普通に行はれた思想である。アルフォンサス (Alphonse) の 'Mericalis Disciplina' の中には蛇の目が寶石であると書いてある。

一〇六、悪魔の詐欺

昔三人の友人が旅行に出掛けたことがあつた。偶々彼等は食物に缺乏を生じて、僅にパン一塊を残すのみとなり、然かも三人ともに餓えて死なんとする有様になつたのである。彼等はお互に言つた。

「これだけしかないパンを三人で分配すれば一人前不足することになる。だから三人合議の末何か善い方法がないか考へてみようでは無いか」



彼等の中の一人は言うた。

「我々三人は路上に眠つて最も不思議な夢を見た者にこのパンを與へることに致さうではないか」

他の二人はこの意見に賛成した。そして三人が眠り初めた。然るにこの意見を提供した男は他の二人が眠つてゐる間に先づ起きた。そしてこのパンを皆食べて仕舞つた。彼れは他の二人の爲に一片の屑をすら残さなかつた。彼れは食べ終つてから彼れの友を呼び起した。彼れは言うた。

「さあ、速く起きた々々々、そして夢を話すのだよ」

第一の者は言うた。

「私の友よ、私は實に不思議な夢をみた。一つの黄金の梯子が天國にかゝつたかと思ふと、天使の群はそれを傳つて私の傍へやつて來て、私の肉體の中から魂だけを伴れ出して、あの三身一體の天國へ導いた。私は天國へ入つて非常に歡樂をつくした。その樂しみは私がこれまで見たこともなければ、聞いたこともない歡樂であつた。私の見た夢はこれだけ」

第二の者は言つた。

「私は悪魔の夢を見た。即ち悪魔の一團が鐵の道具を持つて來て私の肉體から私の魂を引出し、それを地獄の猛火の中に投込み、それはくお話にならぬやうな怖い目に會はせた。そして彼等は言つた……神が天國を治めてゐる間は汝は是所に居なくてはならぬぞと……」

パンを食べて仕舞つた第三の友は言つた。

「ではこれから私の見た夢を話さうよ……實は天使らしい者が私の側へ來て君は君の友人がどうしてゐるか知り度くないかと問うたやうであつた。そこで私はそれならば是非とも知り度くあります。私は私達三人の間に僅に一片のパンを持つてゐるに過ぎませんから、若し私の知らぬ間に他の二人がこれを持逃げなければよいかと心配してをりますと、かう答へた。さうすると天使は、それは少しも心配する必要はない。パンは我々天使の側に置いてあるのだから……といふやうな話であつた。そしてその天使は私を直ぐ天國の門へ導いて下さつたのである。私は天使の命令通りに私の頭を天國の門に突込んだ。ところが貴殿は私より先きに其所へ來てゐて、黄金の玉座に坐し、美酒美食を山の如くその側に持つてゐるのが見えた。その時天使は私に對つて、君の友人は今君の見てゐる如く美味な食事に飽き、凡ゆる歡樂に耽つてゐる。彼れは既に天國の人となつて、再び俗界に還ることは無いから、つまり是所は彼れの永住の地となつた譯だ。次に君の第二の友の居所を教へてやらう……かういふ話であつた。で私は今度は彼れの後を追うて地獄の門を訪づれた。地獄へ往つてみると今私が貴殿から聞かされたやうな事柄を其所で見たのである。實に氣の毒だと思つた。しかし、地獄の中にはパンも酒も澤山あつた。私は貴殿の不幸を見てお氣の毒だと言つたところが、貴殿は私に却つてかう答へたではないか……私はこゝに居るのが當然だから、苟も神様が天國を治めてゐられる限りは私は是所に居残らなくてはならぬのだ。だから君は速に現世へ戻つてパンを皆食べるがよい。我々兩人は娑婆で君と再び會ふことがなからうから……先づかういつたやうな次第さ。それ故私は諸君の御希望に従つてこの娑婆に還つてパンを皆食べて仕舞つた」

〔解説〕

可憐なる者よ、この三人の友は、回々教徒と猶太人、富んで且つ權力ある者、及び最後に人類中の完全な者を現はしたものである。パンは天國のことである。

〔考證〕

この寓話の材料は前述アルフォンサスの作中にあるもので、後世チョーサーの『カンタベリー物語』にも影響を與へてゐる(Alphonusus: Clericalis Disciplina 参照)。そしてその種本は東洋物であることは明かである。

107、無常觀

ローマ市中に眞直に立つて、右手をひろげてゐる一つの像があつた。その中指に「こゝを打て」と書いてあつた。この像は長い年月の間かういふ姿勢で立つてゐたが、誰れ一人としてこの文字の意味を解する者は無つた。人々はこの文字の意味をいろ／＼に解釋してみたが、結局その真相をつかむことが出来なかつたのである。ところが或る一人の賢い學徒はこの像のことを傳へ聞いて是非ともこれを一見しようと望んでゐた。彼れはこれを見た後、特に「こゝを打て」といふ文字に注意を拂つた。彼れは太陽がこの像を照らした時に、その大きくひろげた中指が、長い長い影を投じてゐるのに注意が向いた。彼れは少しく考へた後鋤を持つて來て、その影の消えてゐる場所を約三呎の深さ迄掘つて

みた。下には多くの段がついてゐて、それを降りてゆくと地下に一つの穴があつた。この發見に勇氣づけられて彼れは冒險をやりつづけた。彼れは段を降りて大きな御殿の大廣間に入つた。其所には多くの人が卓についてゐて廣間が人で一つぱいになつてゐた。是等の人々は皆美しい衣を纏うてゐて、一言もものいふものは無つた。部屋を一わたり檢べてみると室の一隅に磨きたてたばかりのやうな寶玉が置いてあつた。これは紅玉と呼ばれる石であつて、部屋の明るいのはこの石だ。一つの力に依つてあつた。ところがこの寶石と相對したところの一隅に弓と箭を携へた一人の男が立つてゐて、何時にてもあれ、この寶石を射ようとする態度を示してゐた。彼れの弓に次の句が刻んであつた。

「我は見る通りの人物である。我が箭は百發百中である。彼方の夜光石といへども我が箭を免る、ことは出來ぬ」

學徒はこれを見て大に驚いて寢室に入つた。紫色の衣を着けた美人が是所に澤山ゐた。しかし是等の美人は一言も物を言はなかつた。彼れはこゝから廐に進んだ。其所には多くの馬と驢がゐた。彼れは是等の動物に觸れてみたが皆石に過ぎなかつた。それから彼れはいろ／＼の建物を一つ一つ訪づれてみた。其所には彼れが欲する限りの物、想像し得る限りの物は皆あつた。彼れは廣間に還つて來てから無事に是を是所去することを考へた。彼れは獨語した。

「私は今日實に不思議な物を見物した。しかし私が如何にこの事柄を他人に話しても、何か明かな證據物を持ち還へらなくては誰れもこれを信じてくれぬであらう」

かう思ひながら眼を最も高い卓に向けた。さうすると幸か不幸かその卓上に澤山の黄金の盃や美しいナイフ等があつた。彼れはそれに近づいた。そして、それを持ち去らうとして彼れの手を觸れた。しかし、彼れが是等の品を彼れの懐中に入れるか否や、射手は前記の紅玉に箭を放つた。箭は命中した。紅玉は微塵に碎けた。忽にして建物の全部は深い闇に包まれて仕舞つた。學徒は全く周章してやにむにその逃げ口を搜した。しかし、出口が餘りに複雑であつたのと亦他にも原因があつた爲に、結局逃げ口を見出すことが出来なくなつて、見るも憐れな死を遂げた……然かもこの御殿の不思議な立像の間に挟まれて……。

〔解説〕

可憐なる者よ、中指を差出してゐた像は悪魔である。學徒は慾望の爲に自己を犠牲に供する貪慾者のことである。彼れが降りて行つた段は人間の慾情である。射手とは死である。紅玉は人生である。

盃とナイフは俗界の財寶である。

〔考證〕

この物語はアラビア傳説と舊教名僧逸事とを巧みに結びつけた所にその發生の歴史を持つてゐる。アラビア傳説の中、特に所謂中世期の科學的知識の驚異を骨子とした傳説は、スペインに於て最も多く行はれてゐた。これは回々教徒がアラビアから直接にスペインに輸入した物である。次に舊教名僧逸事とは、當時の僧侶が各種の學藝に通じ、就中、往々にして妖術に類したことをすら行ふ者として一般に考へられてゐた事柄を指差すものである。本章の物語の主人公たる學徒即ち僧侶は、かの西紀一〇〇三年に歿したところのローマ法王シルヴェスター二世のことであることは、彼れの傳記又は逸事の上から容易に推定し得られる事實である。シルヴェスターはローマ法王の位に即かぬ前に天文學や、數學や、或は廣汎な意味に於ての科學を回々教徒から學ばんが爲にスペインに赴き、終に百種の學に通曉し、就中、地中の財寶を見出し、禽獸の言葉を了解し、特に金石の像を造りてこれに魂を吹き入れることに熟達したと傳へられてゐる。そしてこの傳説を後世に傳へるやうにしたものは、かの英吉利文學史上有名なマームズベリーのウイリアムであつた。マームズベリーのウイリアムは西紀一一四二年頃歿した史家である。

一〇八、約束履行

或る皇帝の治下に二人の盜賊があつて互に堅い約束を結んだ。それに依ると彼等は如何なる危急の場合に於ても、假令それが爲に一命を棄てなくてはならぬ場合があつても、決して互に相棄てること無く、善く援助し合ふといふことであつた。その後彼等兩人は多くの罪を犯し、然かも或る事件では殺人罪をさへ犯してゐたのである。偶々彼等の一人は或る窃盜事件で捕縛されて獄に投ぜられ、既に死刑の宣告をさへ與へられてゐた。彼れの友はこの事を聞くや直に彼れを訪づれて言つた。

「友よ、私は豫ての約束に依つて君を助けに來た。何でも私の力で出來ることがあつたら教へてくれ」

彼れの友は答へた。

「今度こそはいよく犯した罪の報いで殺されなくてはならぬやうだ。實は最早やその宣告をさへ與へられてゐるといふ有様なのだ。しかし、君に一つお願がある。私は家に妻子もあることだから、死刑になる前には是非歸宅して來て死後のことについていろいろ處理して置き度いと思ふから、

その間だけ君から私の身代りになつて是所に居て貰ひ度いのだ。用事が終れば直ぐ私が是所へ戻つて來て君と入換りになるよ」

最初の盜人は言つた。

「友よ私は君の希望するやうになるよ」

そこでこの最初の友は判事を訪づれてこの事を陳べた。

「閣下、私の友人は入牢してをります。そして、最早や死刑の宣告さへ受けてをります。彼れには今後どんな機會も無いこと、思ひますから、何卒今の間に彼れを自宅に還して家庭の仕事を解決させて下さい。私はその間彼れの人質といふ意味で牢にとまつてをります」

判事は答へた。

「彼れは他の罪人と一緒にかくかくの日に死刑に處せられることになつてゐるのだ。だから彼れがその日の或る時刻に是所へ戻つて來ぬならば、お前がその代りに殺されることになるが、それでも

苦情は無いのだらうな」

彼れは言つた。

「閣下、さういふ場合に何の苦情を申し上げませうぞ。私は殺されるのを覺悟してゐるのですもの」

「では承知した。自宅へ還らせてやる。お前の願ひを許してやる」

判官はその男を身代りとして鐵の鎖で縛めた後、その同じ牢の同じ室に入れた。その間に死刑の宣告を受けてゐた男は彼れの家庭に還つた。家庭に戻つた後彼れの牢に還へる時刻は滞延した。死刑の日が來た。彼れの身代りになつた男は救はれる見込みが無かつた。そこで止むを得ずしてその身代りになつた男は、他の多くの罪人と共に裁判の席に引き出された。判事は言つた。

「お前の友人は何所へ行つたのか。約束を反古にするつもりと見えるな」

彼れは言つた。

「いや、いや、そのやうなことはありませんまい。私を欺くことは無いと信じます」

暫時待つてゐるたがそれでもその男は戻りさうに見えなかつた。そこで、もうこれ以上は待つてゐても駄目だといふので、その身替りの男は終に刑場に引出された。判事は言つた。

「お前はお前自身の希望で殺されることになつたのだから、私を恨んではならぬぞ。お前は餘りに輕々しくお前の友人を信じた。そして友人の爲に欺かれて仕舞つたのだ」

彼れは答へた。

「閣下、殺すのをほんの一寸御猶豫を願ひます。ほんの一寸の間でよろしいのであります。私はその時間を拜借して私の死ぬる前に十字架の上で三度だけふざけたまねをやつて見度いのですから」

判事は叫んだ。

「ふざけたまねをして見度いと？ それは又どんなことなのだ？」

「閣下、たゞ大きな聲を張り上げて叫ぶだけのことなのです」

「それ位のことなら許してやるぞ」

そこで彼れは叫び出した。第一回目と第二回目の叫びを上げた。後彼れは如何にも失望した様子であつた。然るに第三回目の叫びを上げた後、誰れとも知らず非常な速力で是所へ駆けて来る足音が遠方に聞えた。彼れはこの足音を聞くや否や叫んだ。

「閣下、閣下、或る人が来るやうですよ。死刑を一寸御猶豫を願ひます……多分私の友人が來たのでせう……私はまだ助かる見込があります」

判事は待つてゐた。彼等の期待してゐた男がいよく現はれて來た。

彼れは叫んだ。

「これは失禮致しました。私こそは皆様をお待たせ申したその男なんです。家庭の後始末が悉く終

りましたからいよく殺されに戻つて參りました」

判事は暫時彼れを凝視してゐた。そして彼れに訊ねた。

「友よ、お前は どうして そのやうに約束を守るのか、その譯を私に話してくれぬか」

彼れは答へた。

「閣下、私等兩人は若い時代の親友でありまして、お互に相助けるといふ約束を堅く結んだ間柄であります。さう言ふ譯から彼れは私が私の仕事を終つて還る迄、私の身替となつて是所にてくれたのです」

判事は言つた。

「成程感心な者だな。かういふやうに約束を堅く守る者は褒めて置く必要があるから今度はお前の一命を助けてやるぞ。今日以後は私の所にてよろしい。將來の事は何不足なく面倒を見てやるぞ」

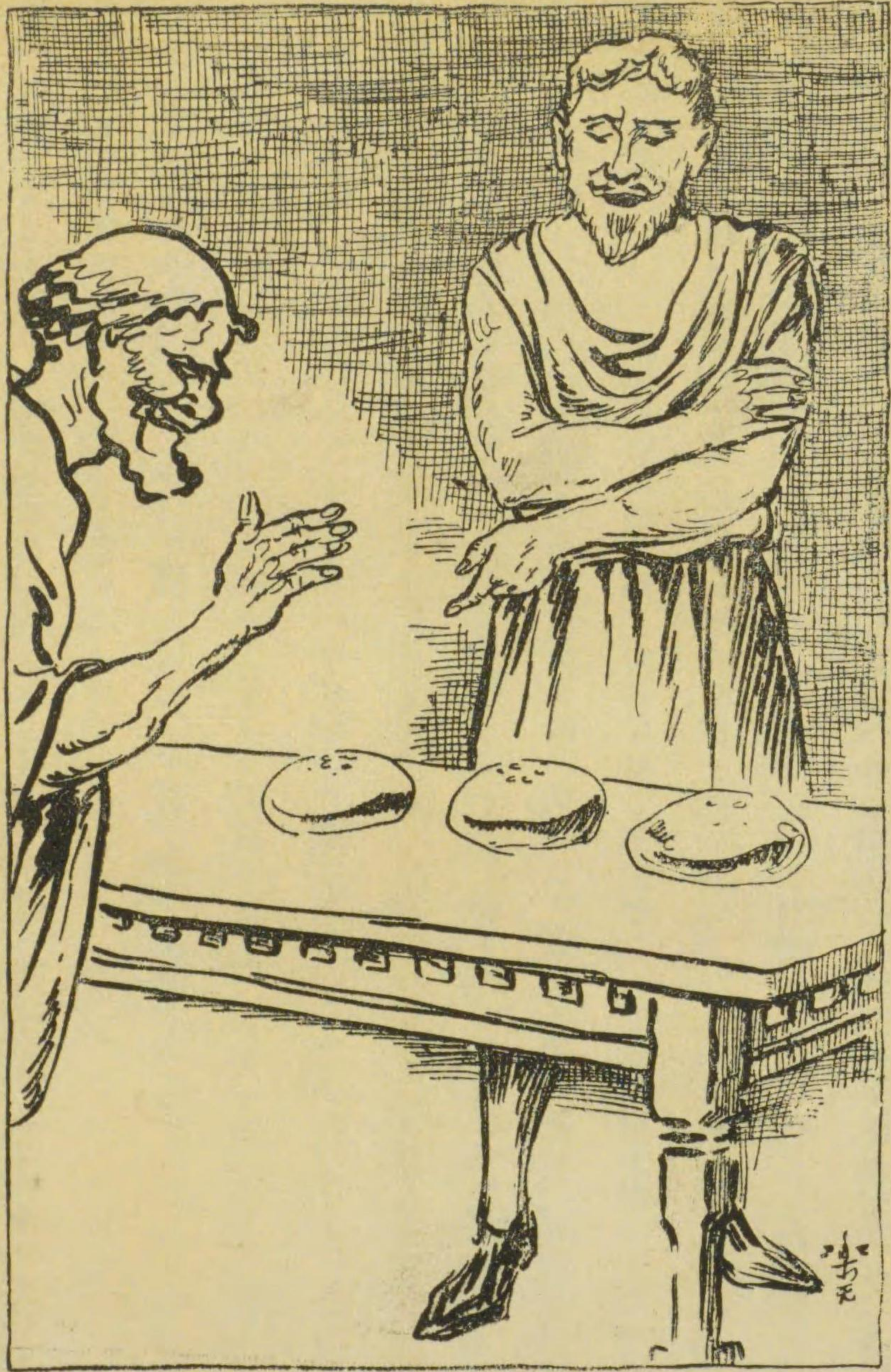
兩人は判事にお禮の言葉を陳べたのみならず、彼れに對して約束を守れることを誓つた。判事はこの慈悲に富んだ然かも道理に合つた裁判を罪人に下したと共に、その一面に於ては大に皆の人々から喝采を得たのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは神のことである。二人の盜賊とは魂と肉體が罪といふもので一體になつてゐることを指差したのである。捕縛された盜賊とは淫慾に捕へられた肉體のことである。第一回目の叫びは悔恨を、第二回目の叫びは懺悔を、第三回目の叫びは満足を現はしてゐる。

一〇九、貪慾者の末路

或る一人の大工が海岸に近き一都市に住んでゐるが、生來非常に貪慾の男であつて、且つその性質も正しくないところから巨額の富を蓄へ、これを一つの木製の箱に藏めて爐邊に持來り、常に目のと



どく所に置いたのである。彼れはかうした人目につく場所に置くことは却つて何人からも疑はれない所以だと考へてゐた。然るに或日のこと、彼れの家族の者が皆眠つてゐた間に大波が襲つて来て、この寶物箱の置いてあつた場所迄押寄せて来て、これを洗ひ去つて仕舞つたのである。箱はそのもとの場所から幾湮も幾湮も浪に流されて終に或一つの都市に流れ着いた。この都市に偶々一人の男があつて家の扉を開け放しにしてゐた。彼れは朝風く起きて見ると海中に一つの錢箱が漂つてゐた。何かの用にたつこと、思つたのでそれを拾ひ上げて自宅へ携へ還つた。彼れは寛大な且つ親切な心の持主であつた。特に彼れは貧乏人に對しては大なる恩惠者であつた。或日のところである。偶々彼れの家に一人の巡禮者が來たので、彼れは例の如くその巡禮者を優遇し、特にその日が非常に寒かつたので、彼れは前記の錢箱を薪としてくべようと思つた。斧を持つて來て二つ三つそれを打つと、ガラ／＼といふ音が中から聞えて來た。いよく／＼二つに破つて見ると金貨がごろ／＼とこぼれ出して來て、そのあたりは一面に黄金の山を造つた。彼れは非常に悦んで早速是等の金貨をかき集めて、一つの安全な場所に藏めて、その持主の現はれて來る迄待つことゝした。

一方大工の身になつてみれば、折角慾張つて貯蓄した黄金が一夜の間に流れて仕舞つたのだから非常に落膽して仕舞つたのである。彼れはこれを搜索する目的で場所から場所へと旅をつゞけた。偶偶

彼れは前記の親切な人……錢箱を拾つたその人の家に來た。彼れは何を搜索してゐるかを話し出す機會が無つた。しかし、この家の主人公は豫てから彼れが保管してゐた金が、この男の物であるといふことに思ひあたるところがあつたが、それにしても、この人物が果してこれだけの大金を受取るだけの資格があるかどうかを考へてみなくてはならなかつた。彼れは獨語した。

「神様がこのお金を彼れに戻すことについて如何にお考へになつてゐられるか試めしてみる必要がある」

そこで彼れは三つの菓子を作つた。第一の物はその中に土を入れ、第二の物は死人の骨を入れ、第三の物には彼れが錢箱の中で見出した黄金を澤山入れて置いた。

彼れは大工に話しかけた。

「友よ三つの菓子が出來ましたから食べませんか。私の家にある最上等の肉を入れて造つた菓子ですよ。貴殿のお好きなのをお取りなさい」

大工は言はれるまゝになした。彼れは先づその三つの菓子を取上げて一つ一つその重みを掌上で

測つてみた。そして土の入つてゐる菓子が一番重かつたので、これに致しませうと言つた。それから又附加へて「もう一つ頂戴することが出來ますならば、これを」と言つた。彼れのこれをついて手を觸れたのは骨の入つてゐる物であつた。大工は亦言つた……「第三の菓子だけは貴殿の分として置きませうかな」

この家の主人公はつぶやいた……「あ、善く分つた。神様はこのやうな悪漢にはこの金を返へすなといふ思召しなのだ……」

そこで彼れは貧乏人、病人、盲人、跛者等を俄に彼れの家に呼び集めた後、大工の面前で黄金の入つてゐる箱を開いた。そして大工に次の如く言つた。

「汝、淺間しき者よ、この黄金は固より汝の物である。しかし、汝は土と死人の骨の菓子を選びつた奴である。だから、私は神様が汝にこの黄金を返す思召が無いことを知つた」

さういふかと思ふと彼れは直に是等の黄金を悉く貧しき人々の間に撒布し、同様に大工を戸外に追出して仕舞つた。大工は散々の目にあはされたのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、大工とは俗人のことである。木製の錢箱とは現世の富を満たしてゐる人間の心である。親切な家の主人公とは賢明な懺悔聽取僧のことである。土の菓子とは現世のこと、死人の骨の菓子は肉體のこと、黄金の入つた菓子は天國のことである。

〔考證〕

この物語の種本は有名な佛陀本生譚(“Barlaam and Josaphat”)である。ボッカシヨの『十日物語』の中に亦がワリーの『コンフエシヨ・アマンテイス』の中にも大同小異の話が現はれてゐる。蓋しこの種の材料は既に西紀十世紀頃に相當に廣い範圍に於て用ひられてゐたものであらう。但しその頃は文學としてよりは寧ろ基督教僧侶の説教材料として用ひられたものであらうと思はれる。

110. 神の試鍊

トレージャン帝の時代にブラシダスと呼ぶ武士があつて、この人は皇帝の軍勢の總指令官であつた。性質の極めて慈悲深い人物であつたが偶像を崇拜する習慣があつた。彼れの妻も亦夫の氣分を受けてゐて同じ宗教の儀式を守つてゐた。夫婦の間に二人の男の子があつた。彼等のこの二子に對してその當時の、又その身分に相應した一切の立派な教育を與へた。彼等はその性質が善良で且つ親切であつたから、神の眞實の御道を授けられるに最も適當した者であつた。或日のこと、彼れが獵に出てゐると一頭の美しい鹿をその群の中に見出した。その鹿は他の鹿の中から離れて倭木林の茂つた中へ逃げて仕舞つた。ブラシダスは他の獵師等が他の鹿を追ひまはしてゐる間に、彼れのみは前記の美しい體の鹿のみを捕へようとして、その逃げ去つた後を全速力を出して追つたのである。牡鹿は一生懸命に逃げた後高い山の絶頂に飛び上つた。ブラシダスは出來得るだけそれに接近してから、さて如何にしたならばこれを捕へることが出来るだらうかと考へた。しかし、彼れがいよいよ、考へが頭に浮んで來たので、その牡鹿を見ると、こは不思議、鹿の額の眞中に十字架がぬつと現はれて來て、それが恰も正午の太陽の如く、否、それよりはもつと美しい光りを放つたのである。暫く見てゐるとこの十字架の上に基督の像が懸けられた。そして又暫くたつと昔バーラムの驢に起つたと同様に、鹿が人間の聲を出して獵人にかう言つた。

「ブラシダスよ、何故汝は私をそのやうに追ふのであるか。汝の爲に私は今この動物の姿を装うて来たのだ。實は私は基督である……汝から常に侮辱されてゐる基督である。汝から常に軽んじられてゐるから今日は私自身が是所へ出て来た譯である。今汝はこの牡鹿の後を追うてゐるから、私もこれから汝の後を追うてみようと思つてゐる」

鹿の叉角の間に懸つてゐた前記の基督の像が、是等の事柄を言つたと臆想してゐるもの、あるのは實際だ。しかし、それは事實であるにせよ、又は左様でないにせよ、ともかく、ブラシダスは非常に怖れをなして馬上から落ちた。そして約一時間の後再び我れに還つて地上から立上つた。彼れは言うた。

「私が爾基督を信じようとするにしても、爾の功德を一通り聽いてみなくてはならぬではないか」

「我は基督であるぞ、爾ブラシダスよ。我は天地を造り、日光を造り、闇と光明とを區別した。我は日と季節と年を定めた。我は人類を救はんが爲に人間の體となつて現はれて来た。我は十字架の上に殺され、且つ葬られた。そして死して後三日にして再び蘇生した。

ブラシダスは是等の莊嚴な事實を理解して再び地上に倒れた。そして叫んだ。

「神よ、私は御神が是等の事柄の全部を成就されたことを信じてをります。亦御神が私のやうな迷へる者を呼び戻して下さることをも信じてをります」

主は答へた。

「爾若しこれを信するならば速に爾の町に戻つて洗禮を受けよ」

「主よ、私は只今私に起つて来た事柄を、私の妻子に話して、私と同様の信仰を持たせようと思存しますが、主の思召しは如何に？」

「その如くなせよ、汝の妻子も亦是等の正しからぬ迷信を棄てるやうにならなければならぬ。明日再び是所に来れ。我れも亦こゝに来らん。そして汝に未來の事柄をもつと委しく教へん」

ブラシダスは彼れ自身の家に還つた。彼れは彼れの妻に事柄の凡てを語つた。しかし彼女も亦既に

神の道を授けられてゐたのである。是に於て彼女はその子供等と共に基督の教を信仰するやうになつた。かくの如くにしてプラシダスの家族は相携へて急ぎローマに赴き、其所でその地の人々から大に歓迎された。そして彼等は悦んで洗禮を受けたのである。プラシダスはその名をイウステーションと呼び、その妻はセオスピタと呼ばれた。二子はそれ／＼セオスピタス及びアガペタスと呼ばれた。イウステーションは翌朝例の如く獵に出掛けた。彼れは例の地點に着いた時その従者等を解散した。それは恰も餌物としてゐる物を發見する爲めの如くであつた。直に昨日と同様の神の姿が現はれて來た。イウステーションは平伏して言つた。

「主よ、主はその御言葉の如く現はれ給はんことを」

「イウステーションよ、汝は我が慈悲の洗盤を受け……（洗禮を受けしこと）……それに依りて惡魔を征服せし故に天の祝福を與へられた者である。汝は汝を誘惑した者を足の下に踏みつけて仕舞つた。今や汝の信仰の力が現はれて來る時である。何故ならば汝が棄て、仕舞つたところの惡魔はさまたまの方法で汝を害さうとするに相違ないから。汝は勝利の王冠を所有するに先ちて大に苦しみを嘗めなくてはならぬ。汝は俗界の豪らぶつた虚榮や、靈界の頑迷といふものから大に苦痛を受け

なくてはならぬ。故に汝は決して汝の過去の有様を振りかへつてみてはならぬ。汝は第二のジブたることを證明しなくてはならぬ。しかし、我は汝の屈辱のどん底から汝を引出して、地上の光榮の絶頂に戻してやらうと考へてゐる。故に汝は若し汝の生涯の終らんとする時、汝の試練を受けようと思ふならば、それを選べよ」

イウステーションは答へた。

「主よ、私が試練を受けるやうになつてをりますものならば、今速にその試練をお受け致し度くあります。しかし、願くは私を激勵して下さるやうにお祈り致します。冀くは忍耐の力を授け給はんことを」

「イウステーションよ、勇敢であれ。汝の魂を我が慈悲で援助してやらう」

かう言つて主は天上に昇つた。イウステーションはその後家に戻つてこの出來事を委しく妻に語り聞かせた。數日にして疫病がイウステーション一家の下男下女を倒し、亦久しからずして羊や馬や其外

の家蓄類を悉く倒して仕舞つた。盗人は彼等の住家を襲うて凡ゆる財寶を盗み去つた。イウステーションは妻子と共に裸體のまゝで淺間敷い有様をして逃げ出した。しかし、彼等は神を崇めることを忘れなかつた。彼等は埃及の赤病氣(一種の癩病)にかゝつたのではなからうかと心配して密かに遠國へ逃げ出した。彼等はかくの如くにして全然貧乏の境涯に陥つたのである。國王も元老院の貴族等も彼等の大將軍の不幸を傳へ聞いて大に心を悩ました。彼等はイウステーション一家の者の行衛を搜索した。しかし何等の手掛りもなかつた。

かゝる間にこの不運な一家は海岸に近く來た。折善くも船が出ようとしてゐたから直にそれに乗つた。船長はイウステーションの妻が非常に美人であるのを見て、これを捕虜にしようかと考へた。そこで彼等はいよゝゝ海を横切つて仕舞つてから、その船賃として多額の金をイウステーション一行に要求したのである。かゝる多額の金は船長が既に豫想してゐた如く、イウステーションの所有してゐるところでは無かつた。船賃が拂へないならばこの婦人を渡せといふことで船長は大にイウステーションを苦しめた。そして最後にいくらイウステーションが憤つて反對しても船長は聞かばこそ、終に彼れの妻を捕へた。そして水夫等に命じて彼女の夫を氣の毒にも海中に眞逆さに投げようとした。イウステーションは最早やかうなつては絶望だと思つたから、二人の子供を抱きながら悄然として船を降りた。彼れ

は母親を失つた子供を見て涙ながらに言つた。

「嗚呼氣の毒なことになつた。お前達の母はもう無くなつて仕舞つた。お前達の母親は見知らぬ土地で、見知らぬ男に抱かれて、その果敢ない運命を嘆くことであらう」

イウステーションは旅行をつゞけてゆきながら、とある川に着いた。川の水は非常に増してゐたので、二人の子供を同時に引連れてこゝを渡るのは頗る危険であつた。それ故彼れは先づ一人を用心深く岸に置いた。そして他の一人を腕に抱いて川を渡つた。彼れは都合善く對岸に渡りついて一兒を地上に置いた。そして直に引返して残れる子供を連れにもどつた。然るにに彼れが川の眞中に來た時、偶然に背後を見たところが一頭の狼が突然現はれて來て、今彼れが残して來たばかりの子供を奪つて近くの森の中へ逃げこんだのであつた。彼れはこれを見て殆んど氣が狂つて仕舞つて、今にも狼に食はれて仕舞はうとしてゐる子供を助けに行かうとした。然るにその瞬間、一頭の大きな獅子が現はれて來て、最初川岸に残して來たところの子供に近寄り、見てゐるうちに彼れを奪つて何所ともなく去つて仕舞つた。もうかうなつては追ふ事が無益であつた。何故といへば彼れは川の眞中にゐたのだから。彼れは自暴自棄になつて仕舞つた。彼れは大に泣いた。そして彼れの頭髪を掻きむしつた。彼れは

この時若し神の御意によつて救はれる事が無かつたならば、水中に身を投けたことは明かであつた。しかし僥倖にも或る牧羊者が丁度獅子がイウステーションの子を銜へて走るのを見たので、早速犬をつれて其後を追うた。天の配劑よろしきを得て獅子は子供を害することなしに棄て去つた。亦狼に取られた兒も僥倖にも農夫の目にとまつたので、彼等は大聲を張上げて狼を追うた爲に、これも狼の口に噛まれることなしに一命を拾つた。そして偶然にも是等の牧羊者と農夫等は同一の村に住んでこの二兒を彼等の間に養成したのである。しかし、イウステーションはこの事は全く知らなかつたから、彼れの悲しみは實にその極度に達してゐた。彼れは今彼れの愁訴を抑へることが出来なかつたのである。彼れは常にかう言つた。

「嗚呼、私はこれでも昔は美しい樹木の如く榮えた者である。然るに今は全く枯れて仕舞つたではないか。又私は嘗ては大軍の大將軍として賑かな生活を送つた者であるが、今は天地の間に孤獨の身となつてゐる。子供は皆失つて仕舞ひ、所有物は悉く奪はれて仕舞つた。主よ、主の御言葉に依れば私の受くべき試練はジョブの試練に似たものでなくてはならぬとのことであるが、私の今日迄受けた苦難はジョブの苦難以上であつた。ジョブは固より貧しい生活をしてゐたが、それにしても眠るべき臥床だけは持つてゐた……假令それが貧しい物であつたにせよ……。然るに私は横はるべき

如何なる臥床も持つてをらぬ。亦ジョブは彼れに同情を寄せてくれる友を持つてゐたが、私は私の子供を失つて仕舞つた上に、野獸の餌として棄てられてゐる。ジョブは妻を持つてゐた。然るに私の妻は無理無體に運び去られて仕舞つた。主よ、私の苦しみを和け、私の唇の上に馬銜はみを置いて下さい……若しこのまゝであつたならば私は如何なるつまらぬことを口走り、又如何なる悪口を主に對して申上げるか分りませんから……」

彼れは是等の言葉を放つて、彼れの張り裂けるやうな思ひをはらした。そして更に長い旅をつゞけた後或村に入つた。そして其所で住むこと、なつた。彼れは實にこの村で十五年間住んだのである。然かも村人の一人の家に下男として住みこんで……

二兒のことを話してみれば、彼等は殆んど相接した所で養育されてゐたが、然かも同じ血族であることを知らなかつたのである。イウステーションの妻は如何にと見れば、彼女はその貞操を守ることが出来た。又彼女は周圍の事情から考へてみて、不名譽な取扱へを受けること、のみ思つてゐたが、僥倖にしてさう言ふこともなくして濟んだ。それは彼女を苦しめた男が程なく死んだからであつた。かゝる間にローマ皇帝は彼れの敵の爲に大なる苦しみを與へられた。皇帝は昔プランドラスがこれと

同様の苦境に立つて勇敢に戦つてくれたことを思ひ出して、彼れの逆運に弄ばれたことを追憶する念が一層痛切なものがあつた。皇帝はブラシダス一家の者の行衛を搜索する爲に各國に兵士を送つた。そして若し幸にして彼れの一族を見出す者があるならば報酬は望みのまゝであると話した。偶是等の使者の中の數人は昔ブラシダスの身邊近く侍つてゐた者であるが、恰も好都合に彼等の昔の將軍が現在苦しい勞働に従事してゐるその國へ來たのである。そして是等の兵士の中の一人をブラシダスがその様子を見たゞけで昔の我が部下の一人であつたことを認めたのである。放浪の身となつた彼れブラシダスは是等の人々を見るや、昔彼れの持つてゐたところの富と名譽の境遇を追憶せざるを得なかつた。彼れはこの追憶の爲に新たな苦痛をもつて心を満たされた。彼れは叫んだ。

「主よ、私は只今豫期もしなかつた時に是等の人々に會つたのであります。何卒それと同じ様に私をして私の可愛き妻に會はして下さい。私は私の子供の事は申上げません……子供は野獸に食はれて仕舞つたことは十分承知してゐるのですから……」

その刹那である、或る聲がさゝいた。

「イウステーションよ、誠實の心を失うてはならぬ。聽て汝は汝の失つた名譽を恢復することにな

る。亦汝の妻にも子にも會ふ時が来る」

兵士等はブラシダスに會つた時、彼れが如何なる人であるか分らなかつたので、若しやブラシダスといふ外國人がその妻と二子を携へてこの地方へ來たことは無つたかと訊ねたのである。彼れはそのやうな人物に會つたこともなければ、そのやうな噂を耳に入れたことも無いと答へた。しかし、彼れは彼れの家に兵士等の逗留することを請うて止まなかつた。兵士等はその厚意に應じたので、彼れは彼等をその家に案内していろいろの親切をつくしたのである。彼れは彼れの昔の榮華の生活を追想して熱い涙を流した。彼れは悲しみを抑へることが出来なくなつて戸外に走り出た。そして彼れの顔を洗つて來て彼れの勤めをつゞけるといふ有様であつた。程なく兵士等はこの農夫の容貌が、何となく彼等の昔の主人に似てゐることを感知するやうになつた。彼等の中の一人は言つた……

「この男は私等の搜索してゐるお仁に非常に善く似てゐるやうだ」

彼れの友は答へた。

「實際貴殿の言はれる通りだ。將軍のお顔には戦場でお受けになつた刀疵がある譯だから、それを

氣をつけて調べようではないか」

彼等はそれを檢べた。そしてその同じ疵痕があつたので彼等は飛び上つた。そして彼れを抱いた。彼等は彼れの妻子のことを問ふた。プラシダスは凡てを物語つた。近隣の人々は皆こゝへ集つて來た。そしてプラシダスの軍功や光榮のある生活等について、兵士等の語るところを熱心に傾聴してゐた。それより兵士等は皇帝の命を受けて彼れに美しき衣を與へた。十五日目に彼等は皇居に達した。皇帝は彼れの到着するのを聽いて自ら出迎へて大に悦んだ。イウステーシスは、今日迄の出來事を悉く皇帝に語つた。彼れは直に大軍の將として任命され、且つ彼れが昔この國を去る時に與へられてゐた一切の役目を悉く再び仰せつけられたのである。是に於て彼れは大に勇氣を起して敵軍を攻撃することに意を固めた。彼れは國內の各地から若者を召集した。偶然にも彼れの二子が教育された村からも二人の青年を兵士として送り出すことになつた。そしてこの選に入るべき青年は、村人の中の最も善良にして又最も勇敢なる者であつた。二人の青年は將軍の前に現はれた。彼等の堂々たる態度は群を壓してゐた。彼等は直に將軍の目を惹いた。彼れはこの二人を彼れの軍隊の先頭に立たせた。そしていよく敵軍に對して進撃を試みた。彼れが天幕を設けた地點は彼れの妻の住んでゐる所の近くであつ

た。そして不思議な縁で、前記の二青年はその生みの母親の家に駐屯することを命ぜられたのである。但し彼等はそのことを全く知らなかつたのである。

正午頃二人の青年が彼等が幼少の折に出會つたいろくの運命について話しあつた。母親はその近くにあるので、彼等の話すことが耳に入り、我れともなしに熱心にその話を聽くやうになつた。兄は言つた。

「我は子供の折どんなことがあつたのか殆んど記憶してをらぬが、たゞ知つてゐる事柄は、私のこひしい父親が澤山の兵隊の大將であつたこと、私の母親が非常な美人であつて、私はその長男に生れてゐたといふこと、先づそれ位の事である。……さう、さうまたあつた……私等家族は夜の間に住みなれた土地を棄て、船で何所ともなく、海上に乗り出した。私等の母親は船の中に居残つてゐた……勿論私にはその譯は分らぬが、その間に父親は我等兄弟を抱いて船を去つた。それから何んでも河の岸へ來たやうである。私は弟が河を渡つて運ばれる迄岸に近い所に置かれた。然るに父親が彼れの企てを成就して、私の援助に來られる前に、一頭の狼が森の中から現はれて來て、彼れを口に銜へて逃げて仕舞つた。父親が彼れを救ひ出さうとして岸へ戻つて來る前に、一頭の巨大な獅子が突然現はれて來て私を襲つた。そして私を近くの森へ奪へ去つたのである。然るに僥倖にも

或る牧羊者は、私の非常に危険な有様に陥つてゐるのを見て、直に救ひ出してくれたのみならず、彼等の間で教育を授けてくれた」

弟はこゝまで聽いて涙にむせんだ。そして叫んだ。

「嗚呼やつとのことで私の兄さんが分りました。貴殿は私の實兄なのだ……何故と申せば私を養育してくれた人々の話では、私は狼の口から免れた者でありますから……」

最初この話をやつた軍人はこの答へを聽いて、それでは私達二人は兄弟に相違無いといふので、互に相抱き合つて悦んだ。今までこの物語を聽いてゐた母親は非常に感動して仕舞つて、この二青年が彼女の子であることを固く信じるやうになつたのは想像するに難く無い。しかし、彼女はこの日は一言も自分の口からものを言ふやうなことは無かつた。翌日彼女はこの軍隊の指揮官の許へ赴き、彼女を彼女自身の本國に還ることを許してくれと請うた。彼女は「私はローマ生れの女でありますから、是所では全くの外來人に過ぎません」と言つた。彼女はこのやうなことを言ひながら、彼女の話相手であるところのその總指揮官の顔を熱心に又意味ありげに凝視したのである。この將軍こそは彼女の

夫であつたのである。彼女は初めてこのことを思ひ出した。そして今は悦びを抑へることが出来なくなつて、彼れの足許に倒れ伏すのであつた。彼女は狂氣の如く悦んで叫んだ。

「あ、これは私の夫なのだ。さあ貴郎、これから貴郎の今迄の御物語を承り度くあります。私の考へてゐることが大きな誤りでなくば、貴郎はプラシダス様、軍勢の御大將……しかし、その後イウステーシアスと御改名になりました御仁……救世の御主に依りて基督教に御歸依、その後かくくの誘惑にて幾度も苦行された御仁であります。私はその妻であります。惡漢の爲に海上で奪はれた者であります。幸ひにもこの體を汚されなかつたのであります。私には二人の息子がいました……アガベタスとセオスビタスと申しました……」

是等の言葉の趣意はイウステーシアスをして自ら我れに還らせたのである。彼等兩人は歲月の長いのと、悲しい目に餘り多く會つたのとで、互にその容貌が著るしく變化してゐた。しかし、このやうにしてお互に夫であり妻であることが分つて來たので、その悦びは又格別であつた。彼等は相抱き合つて泣いた。そして只管神の御恵みを感謝するのであつた。妻は言つた。

「私達の子供はどうなつたでせう」

夫は答へた。

「嗚呼、氣の毒のことをしたよ、彼等は野獸に取られて仕舞つて……」

彼れは子供等の失はれた有様を委しく妻に語つた。妻は言つた。

「神様に御禮を申上げませうよ。神様は私達夫婦をこのやうに再び會はせて下さいましたのでありますから、私達のこひしい子供をも再び私達の掌中にお返へし下さること、思ひます」

夫は言つた。

「野獸に食はれて仕舞つた子供がどうして戻らうぞ」

妻は答へた。

「それは實にその通りであります。しかし、昨日私が庭にをりますと二人の青年が彼等の子供時代の出來事を互に物語つてをりましたが、それを側で聽いてをりました結果、私はこの二人の若者は私達の子供であると思つたのであります。二人の者にお訊ねになつてはどうです。必ず何かお答へ

すること、思はれますから……」

この目的の爲に使者が送られた。二人の若者は將軍の前に現はれた。二三の問ひをやつてみて直ぐ萬事が解決された。イウステーションは幸福なるもの、一切をこゝで集め得たのである。これは實に賀すべき事柄であつた。全軍は擧つて彼等の將軍の喜びに與つた。次で華々しい勝利が來た。彼等が凱旋するに先ちて皇帝トレージャンが歿した。トレージャンの後を嗣いだのはアドリアンであつたが、彼れは前者よりは悪人であつた。しかし、アドリアンは勝利者たるイウステーション及びその家族を花々しく迎へ、且つ皇帝の賓客として盛んに饗應した。しかし、その翌日、皇帝は彼れの偶像を祭つてあるところの殿堂に於て、犠牲の供物をさ、けて、最近の凱旋を祝賀しようとした。そして彼れの賓客にその殿堂に同行することを希望した。イウステーションは皇帝からのこの希望を受けて斷乎たる返答を與へた……」

「陛下よ、私は基督教徒の神を崇めてゐる者であります。私はその神のみを祭ります。そしてその神のみに犠牲をさ、けて御心を和けようとする者であります。偶像は誓つて崇めませぬ」

皇帝は思ひも寄らぬ反對を受けたので非常に憤つた。そして、かくの如くローマを外國の束縛から解放してくれたその恩人を、彼れの全家族と一緒に闘技場に立せて兇猛な獅子を彼等の上に放つたのである。然るに驚くべし、獅子は彼等の前に頭を下けて恰も敬意を表はすが如くであつた。これを見て亂暴な皇帝は倍々憤つて眞鍮で一つの牡牛を製造させ、これを火の如く熱せしめた後、イウステーション及びその妻子を生きながらその腹の中に投げ込んだ。彼等は一心不亂に神の御慈悲を祈念するのみであつた。三日を経た後皇帝の面前に彼等の遺骸が運ばれた。彼等は恰も臥床の上で靜に眠つてゐるが如くであつた。彼等の頭髮の一本でも焦けた痕は無かつた。亦少しの變化も現はれてをらなかつた。彼等は殆んど生きてゐる時と同じであつた。基督教徒はイウステーション及びその妻子の死骸を最も鄭重に葬つた上、その埋葬の場所に一字の寺院を建立した。彼等の殺されたのはアドリアン皇帝即位第一年、即ちローマ古曆の西紀百二十年の十一月朔日であつた。但し或る著書に依れば十月十二日とある。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは基督のこと、プラシダスとは俗人、牡鹿とは感覺、大にして美しき牡鹿と

は理性のことである。理性の牡鹿は絶壁に登る。絶壁とは正義又は正直のことである。鹿の角とは新古の掟を表はしたるものである。プラシダスの妻は魂、その二子は意志及び人間の事業を指差したものである。船長とは人間の魂を誤謬から引留めようとする僧侶のことである。船とは教會のことである。川は現世界、獅子は悪魔、狼は肉慾である。牧羊者は懺悔聽取僧、農夫は説教師である。プラシダスを搜索に出掛けた使者は教長及豫言者である。

一一一、仕事の用心

或る貴族は一頭の白い牝牛を所有してゐて極端なほどこれを大切に取扱つてゐた。彼れは二つの理由をこれにつけてゐた。先づ第一の理由はこの牝牛は純白であるといふこと、第二は乳の豊富であるといふこと、即ちこの二つであつた。彼れがこの白い牝牛を大切にすることがだん／＼その度が増して來て終に牛の爲に黄金の角を造つてやつた程であつた。そして彼れは朝夕この牛を他人から盗まれぬことに苦心するのであつた。彼れは永い間この事を考へてみた。そしてその結果アーガスと言ふ男

を、牛の番人として雇入れることにした。アーガスは主人の爲に忠實に働くのみならず、百の眼を持つてゐるといふことで豫てから評判者になつてゐた。そこでこの貴族は急使を遣はして、アーガスに是非我が家に來て牝牛の番人になつてくれぬかと頼みこんだ。アーガスは來てくれた。貴族はアーガスの到着するのを俟つて直ぐかう言つた。

「黄金の角を持つてゐるこの牝牛の監督は萬事お前に一任する。若しお前がこれを安全に保護してくれるならば、報酬はお前の希望通りに遣はす。但しお前がこの黄金の角を他人に盗まれるやうなことを仕出かすならば、お前の一命は無いのと思つてをらなければならぬぞ」

オーガスはその命令通りに牝牛を我が監督の下に引受けた。彼れは毎日この牛を牧場につれて行つて少しの油斷もなく、その監視をしてゐると共にいろいろの世話をやいてゐた。そして夜になると牝牛を再び伴つて、我が家に還るといふ有様であつた。

然るにその頃マーキュリーと呼ぶ貪慾な悪漢がオーガスの近くに住んでゐた。マーキュリーは音楽が上手であつた。彼れは前記の牝牛を非常にほしがつてゐた。彼れは常にこれを目につけてゐた。そして屢々その番人の許へ赴いた。彼れは如何にもしてこの牛を譲つて貰はうとして、或は辭をひく、し

て嘆願してみたり、或はいろいろの條件を持出してみたりしてオーガスを説きつけたのである。而しオーガスは氣轉の利く男であつたから、かういふ申込を受ると直ぐ彼れの握てゐる杖：：牧人杖を地中に強くつきたて、恰も彼れ自身の主人にでも話しかけるやうな態度で次の如く言つたのである。

「杖よ、貴殿は私の主人である。私は夜になると貴殿のお城へ戻ります。お城へ戻ると貴殿は直ぐ牝牛のこと、その黄金の角のことを私にお訊ねになります。さうすると私は貴殿にお返し致します。御主人牝牛の角は無くなりました。私が眠つてゐた間に盗人が來てその角を盗み取つて仕舞ひました。かう私は貴殿へお答へ致します。さうすると貴殿は非常にお怒りになります。そしてこの悪漢めが何を僞を申すか。汝は百の眼を持つてゐるではないか、それであつて盗人に黄金の角を盗まれるの知らぬといふ譯はどこにある。百の眼が皆眠つて仕舞ふやうな譯があると思ふか。そのやうな僞を言ふ者は殺して仕舞ふぞ：：かう貴殿は私に申されるでせう。それならばその角を私が賣りましたとお答へするならば如何でせう。それにしても御主人の怒を買ふことは前同様であります」

マーキュリーは答へた。

「もうい、よ、さつさと牛をつれて還るがい、よ。後日何もかも皆奪つてみせるから」

かういふ嚇し文句をならべてマーキュリーは去つて仕舞つた。そして翌日樂器を携へて再びオーガスの許を訪づれた。彼れはさまざまのふざけたことをしてみせたり、或は面白い歌を歌つたりしてオーガスを悦ばせた。オーガスの二つの眼は閉ぢた。それから二つ以上、それから頭が皆深い眠りに入つて仕舞つた。マーキュリーはこれを見てオーガスの首を斬り、牝牛もその黄金の角も一くるめにして奪へ取つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、貴族は基督、白牝牛は魂である。牛乳は祈禱と歎願を現はしたものである。そしてその祈願の功德に依りて貴族(基督)は牝牛(魂)に黄金の角即ち永遠の生命を與へたのである。オーガスは教長である。教長の職責は監督と警戒である。牧羊者の杖とは彼れに委ねられたところの教權である。歌とは歌ひ女のことである。教長がぐつすりねこんで仕舞へば、首が斬られて仕舞ふのは當然だ……首が斬られるといふことは永劫の生命を失ふといふことに外ならぬ。マーキュリーとは悪魔のことである。

ことである。

〔考證〕

この物語はギリシア神話のアーガスとマーキュリー物語を種本としたものであるが、これと殆んど同一の物語が『土耳其物語』の中にも現はれてゐる。

一一一、 繼母の病氣は魂の病氣

ゴルゴニアス帝の妃は絶世の美人であつた。夫婦の間に男の兒が生れた。この王子は成長するに従つて皆の人から寵愛されてゐた。然るに王子が十歳になつた時に母親が死亡した。立派なお葬ひがあつた。

皇帝は重臣等の忠言に依りて後妻を迎へた。彼女は前皇后の遺子を非常に憎んでゐる／＼の害を彼れに加へた。皇帝にこの事を密かに告げた者があつた。彼れは皇后を叱責することはしないで彼

女の歡心を得る爲に、王子を國外へ追放して仕舞つた。王子は彼れの家を追はれ、且つ嫡子としての一切の權利を剥ぎ取られて仕舞つて、如何ともすることが出来なくなつたから、止むを得ず醫學を修めることにした。そして相當の時を経た後、その方面に於て一流の大家となつた。

皇帝は不條理にも嫡子であるところの彼れを勘當したといふものゝ、彼れが今や天下の名醫となつたので、これを噂に聽く毎に非常に悦んでゐた。その後皇帝は病氣にかゝつたことがあつた。そこで手紙を送つて王子の來診を求めることにした。王子は父王の心が善く分つてゐたから、直ぐその招きに應じて宮殿へ戻つて來た。そして彼れの得意な術で直に父の病氣を癒やした。このことが全國內に非常な評判となつて、この王子の右に出るほどの名醫は天下に一人も無いといふことになつた。

偶々彼れの繼母も亦病床についた。彼女の病氣は非常に重かつた。各地から名醫といふ名醫が招かれた。しかし彼等は異口同音に皇后の病氣が到底全快の見込が無いと明言してゐた。皇帝はこれに聽いて大に悲しんだ。彼れは王子を召して彼女の病氣を治療せしめんとした。

王子はその請ひを容れなかつた。彼れは言つた。

「陛下、折角の御希望ではありますがお斷り申します」

父王は言つた。

「若しお前が私の言ふことを拒むならば、再び國外へ追放するぞ」

「それは道理に背くと申すものです。貴殿あなたは貴殿あなた御自身で私の父だとお考へになつてをりますが、それにしては少々合點のゆかぬことは、この婦人の入智慧で私を勘當なさいましたことでもあります。私が是所に居らなくなつたことが、貴殿の御病氣と又御嘆きの原因となつたのであります。それと恰度反對に私の繼母のあの不親切な繼母の病氣の原因は、私が是所へ戻つて來たといふことに存してをります。それ故私は彼女の病氣を癒さうとは思ひません。それよりは寧ろ私が直ぐ是所から去り度いと思ふのであります」

父は答へた。

「皇后は私と同じ病氣にかゝつたのだ。お前は私の病氣を根治してくれたのだから、彼女の病氣も根治することが出来るのだ」

王子はこれに答へて、

「父上よ、假令彼女の病氣が同一のものであるにしても、彼女の場合は異つてゐるのですよ。私が是所へ戻つて來た時、貴殿は私の顔を見て非常に喜びになりました。そしてそれが貴殿の御病氣が迅く全快した原因であります。然るに私の繼母の場合はこれと全く反對であります。若し私が物を言へば、彼女は非常に私を厭ひます。又私が彼女に觸れば狂人の如く憤ります。病人の爲になることは病人の感情にさからはぬことであります。彼女は私の顔を見るのを嫌つてゐるのです。然るに父上のみが私を是所に引留めようとなさるのはどういふ譯でありますか。これは病人の爲に善くないことでありませう」

王子はかういふやうな申譯を言うて終に診察することを斷つた、彼れの繼母は終に死亡した。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は我等の祖アダムのことである。彼れの最初の妻は魂である。その王子は基督である……我等の病氣を癒して下さる基督である、その繼母は惡魔である。

〔考證〕

中世時代から流行しだして來たところの繼母物語、一名繼子いぢめの文學とても名づけ得る一種の文學が、こゝにも見出され得るのである。西洋の繼子いぢめの文學はその古い種類のものほど東洋式である。是等の物の中には我が國の同種類の傳説や小説等に似通つたものが相當にその數が多いと思ふ。(先年「東亞の光」所載の予の論文はこのことを取扱つたものである。但しこの問題については改めて他に詳説することとする)

古代英吉利文學の一つとして異彩を放つてゐる『七賢物語』は、本章所掲の物語に、直接又は間接の影響を與へてゐることはほぼ推定することが出来る。

一一三、仕 合

皇帝アドニアスは非常に富んでゐた。彼れは武術仕合に多大の興味をもち、特に敵味方が槍を振つてその技術を闘はすのを見ることが何より好きであつた。嘗て彼れは闘技會を開いたことがあつた。そして廣く天下に宣傳して何人でもこの會に於て勝利を得る者があれば、立派な賞品を與へらるべし

と告げた。國內の諸大名や武士貴族等は我も我もといふ有様に澤山集つて來た。皇帝は是等の武士を適當に二つに分つた。しかし、最初にこの競技場に入つた軍は、先づ第一に彼等の楯と武器を或る一定の所に整頓して置くことになつてゐた。そして若しその反對軍の中の誰れか、彼れの槍をもつて他の者の楯に觸れるならば、その觸れられた方の者は挑戦されたのであるから、直に仕合場へ降りて行かなくてはならぬのであつた。但しその場合には前以つてこの目的の爲に選り出されてゐるところの一人の乙女から武器を着せて貰ふのである。仕合の結果、彼れが勝利を得るならば次の相手と更に勝を争ふことになる。

皇帝は機運熟して來て皇帝としての冠を僭取し、皇帝席に坐した。その時或る一人の武士は、彼れの反對者の楯を熱心に檢閲した後、三つの黄金の林檎を紋章としてゐる楯に大に心を引かれた。それで彼れはその楯に觸れた。直にその持主は武装をと、のへて彼れの敵に會うた。そして暫時の間戦つた後、彼れは相手の頭を斬つて約束の報酬を受取つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は我等の主基督である。仕合とは神と惡魔との争ひである。楯は神の或る屬性

である。仕合場は人類の性質である。三つの黄金の林檎を紋章としてゐる楯は、三位一體である。従つてこれに對して槍を突きつける者は大罪を犯す者である。勝利者の報酬は永劫の生命である。

一一四、地獄を出てしこと

或る王の治下、一人の貧乏人が毎日近くの森へ入つて薪を切つて來て、これを賣つて衣食の道を得てゐた。或る日のことであるが、彼れは驢をつれて例の如く倭森に入つて行くと、その茂みの真中で突然穴に落ちて仕舞つた。これは彼れが足場を失つて全く不用意の間に陥つた失敗であつた。彼れは如何に骨折つても再びこの穴から出ることは出来なかつた。穴の中には怖い龍がその鱗だらけの長い體をのたうつてゐた。又その上方には蛇が澤山ゐた。底又は中腹には一つの圓形の岩があつて、蛇が日毎にそれを登つて來ては舐めてゐた。蛇の舐めるのが終ると今度は龍がこれを舐めてゐた。この貧しき男はこれを見てその何故であるかを考へたのである。そして彼れは獨語した。

「私は是所へ落ちてから最早や多くの日數がたつてゐる。そしてこの間何物をも食へることが無か

つたのだ。若しこのまゝで一食もとらぬならば明かに私は死んで仕舞ふ。だから私も蛇と龍のやうに岩を舐つてみようと思ふ。彼等はそれをやつて生存してゐるのだから、私もそれをやつてみても悪いといふ筈は無からう」

彼れは岩に取りついた。そして岩を舐めたのである。不思議やこの岩の味ひは到底想像も出来ぬほど美味であつた。彼れはこれを舐めてから元氣が大について、それ以後更に數日間この穴に暮した。或る日のこと大雷雨があつた。蛇はこれに僻易して一つ又一つといつた風にご、から逃げ出して仕舞つた。そして蛇が悉く逃げて仕舞ふと今度はその底の所の泉の中に隠れてゐた龍が、頭をもたけて是所から逃げ去らうとした。これを見た貧しき男は直に龍の尾を固く捕へた。そしてその尾につかまつたまゝ、でやすくと穴から出ることが出来た。龍は彼れを可成り遠い所迄運んで行つた。そして彼れを同じ森の中へ落して去つた。彼れは今自分の落された所が分らなかつた爲に道を見出すことが出来なかつた。偶然にも旅行者の一團がこの森を通りかゝつたので、彼れは己が往くべき道を教へられた。そして不思議な運で芽出度く彼れ自身の町に戻る事が出来た。彼れは彼れの遭遇した事件を天下に公にした。しかし、その後直に彼れは死亡して仕舞つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、王とは我等の主天の御父である。又この貧しき男は自然のまゝの人間である……即ち森、換言すれば俗世界に入る者は皆この男と同一様である。穴とは大罪のことである。穴の中央に在る圓形の岩は基督である。雷雨は懺悔である。雷鳴を聞いて蛇が……即ち罪と悪魔が驚き恐れるのである。そして其所から逃げ出す。龍とは悪魔であり、商人とは説教師のことである。

〔考證〕

本章の物語はその構想が餘りに大膽で且つその譬喩が餘りに奇抜であるが故に、恐らくこれは東洋物であらうと思はれる。蛇や龍を巧みに譬喩に用ひてゐるあたりは印度式である。

一一五、象の心和らぐ

或る皇帝は一つの森林を持つてゐるが、その森の中に非常に兇猛な象が一頭ゐて、どんな人でもこ

れに近寄らうとする者が無かつた。皇帝はこれを知つて少からず驚いた。彼れは國內の賢人や貴族等を集めて、この象に何か特別な性質がないかと訊ねた。彼等は皆この象は清淨な又貞節な乙女を好んでゐるといふことを答へた。そこで皇帝は若し國內に於て見出し得ることであるならば、音樂の巧みな有徳な二人の美人を得て、これにその象の征伐の役目をさせようと欲した。使者は各地に派遣された。その結果注文通りの潔白な且つ美しい乙女が二名見出されて王の前に導かれた。國王はこの二人の乙女を裸體にしてその一人に盟を持たせ、他の一人に劍を持たせて象の居る森へ送つた。

二人の乙女は森に入つて歌ひだした。その美しい聲につりだされて象は直に乙女の近くへ歩み寄つて來た。その間乙女等はしつきり無しに歌つた。象は終に乙女等の美しい體に觸れて嬉しさうに遊んでゐた。そしてその一人の膝に寄りそうたまゝで熟睡して仕舞つた。他の一人はこれを見すまして豫て持つて來たところの劍を振つてその首を切り落した。それと同時に他の一人は盟を差出してその血をそれに満たした。かくて彼等は國王の許に戻つた。國王は彼等の成功を聽いて非常に満足した。そして彼等が持ち還つたところの象の血で美しい紫色や、その外さまぐの珍しい物を造らせた。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝は我等の天の御父である。象は基督、又二人の乙女はメーリーとイヴであつて二人共に潔白に生れた者である。特にメーリーは清淨であつた。彼女は劍を携へてゐる。劍とは罪である。基督がメーリーの腹から生れて、終に死といふものを免れることが出来なかつたのは、この罪といふ劍にかゝつたからである。

〔考證〕

この物語は象を中心として話をすゝめてゐる。全體の話の調子は印度物語式である。蓋し東洋物ならんか。

一一六、神の愛

ペピン王は一人の美人と結婚して一男兒をもうけた。然るにその赤兒の母親は産褥で死亡して仕舞つた。王は第二の妻を迎へた。彼女も亦一男兒を生んだ。王は是等の二子を外國へ送つて教育を受けさせた。二人の兄弟は餘りに善く似てゐるので、何れが兄で何れが弟であるか區別が出来なかつた。

母親は彼女自身の子に永年會はなかつたので、今は一日もその顔を見ないではをれなくなつて來た。そこでそのことが動機となつて二人の兄弟は歸國することになつた。彼女の生んだ子は前妻の子よりは一歳だけ年下であつたが、世間の兄弟によくあるが如く、身長は兄と殆んど同一であつた。又二人の兄弟は餘りに善く似てゐるので、母親は彼女自身の子を見分けることすら出来なかつた。そこで彼女は王に願つて、王から何れが彼女の生んだ子であるかを判定してもらはうとした。しかし、王は彼女の希望を許さなかつた。皇后は王の無情を恨んで大に泣いた。王はそれを見て非常に氣の毒に思つてかう言つた。

「もう泣かなくともよろしい。教へてあげよう。それあれがお前の生んだ子だよ」

さう言つて王は前妻の生んだ子を指差した。皇后は欺かれたことを知らないで非常に悦んだ。彼女は前妻の生んだ子を我が實子だと思つて、いろ／＼の必要物を彼れの爲に與へてやつた。そして彼女の實子のことは殆んど何一つとして親切をつくしてやらなかつた。王はこれを見て彼女に問うた。

「何故お前はお前自身を欺くのであるか。この二人の中の一人はお前の生んだ子だ。しかし、お前は未だそれを知らなくてはならぬのだ」

彼女は答へた。

「何故ですか。何れが私の實子であるか教へて下さい」

王は言つた。

「いや、教へない。どうあつても教へることは出来ぬ。但しそれには理由がある。若し私がお前に事實を語るならば、お前は一人を愛し、他を顧みないといふことになる。私はお前にこの二人の兄弟を平等に愛してもらふことを望み度いのだ。二人が大人になつたら私は何れが兄で何れが弟であるかを教へてやる。さうなればお前の幸福は完全なものだ」

皇后は彼女の夫の考へに従つた。彼女は二人の兄弟が成人して仕舞ふ迄、全然公平な態度で二人を取扱つてゐた。後年彼女は彼女自身の生んだ子が何れであつたかを知り、且つ彼女自身の生みの子が非凡の才能を持つてゐることを知つて、その胸中の悦びを誰れ憚るところなく發表した。彼女はこゝろやうにして、いつとはなしにその生涯を送つた。然かも平和の中に一生を過したのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、國王は基督、二子は神慮に合ひる選民と神意に背ける墮落者とである。後者の母は教會、前者の母は古い掟である。教會は選民と墮落者との間には區別を設けてをらぬ。しかし、この両者が成人すれば……即ち最後の裁判の日が來れば、その眞實なことが自ら明かになるのである。

〔考證〕

この物語は繼子物語の一形式である。固より、この物語は、*シャルマン大帝の部下の騎士、アミスとアマリオン*の容貌が善く似てゐたといふ話に材料を得たものではあらうが、しかし、その根本のところは繼子いぢめの一變形に外ならぬ。

一一七、不貞の妻

皇帝フレデリックは國法を以て國民に命じていふには、若し女子が強姦されようとした場合に或る

男がこれを救ひ出したとすれば、その男は當然その女を己が妻とすべき義務がある。但しそれは女の方にその希望がある場合にのみ限らる……かういふ命令であつた。

或日のこと、一人の悪漢が若い婦人をさらつて森の中へつれこみ、其所で散々に彼女をなぐさんだ。彼女は大聲を上げて救ひをもとめた。一人の立派な騎士は偶然にこの森を通りかゝつて、女の叫び聲をき、つけたので、馬をけたて、彼女の救助に赴いた。彼れは彼女にその叫んだ理由を訊ねた。乙女は答へた。

「貴郎、何卒私を助けて下さい。この悪漢は私を辱かしました。そして私を殺して仕舞ふと嚇してをります」

その悪漢は答へた。

「貴殿、何卒お聞き下さい。この女は實は私の妻であります。然るに不都合にも姦淫罪を犯してをりましたから、只今殺してやるぞと嚇してゐたところであります」

乙女は言つた。

「それは皆虚言でありますから信じて下さるな。私はこのやうな悪漢の妻でもなければ、決して姦淫罪を犯した覚えもなく、今この者の爲に淺間敷い目にあはされてゐるやうな有様であります。何卒私をお助け下さい」

武士は言うた。

「十分分りました。この悪漢が貴女を苦しめてゐるに相違ありませんから、只今貴女を救ひ出して上げます」

悪漢は武士に對つて凄い文句をならべた。

「この女を取れるなら取つてみよ。しかし、それは貴様の生命をかけなくてはならない仕事だぞ。俺は最後迄俺の權利を言ひ張るつもりだぞ」

さう言つて彼れは決闘の仕度をした。猛烈な争闘をつゞけた後武士はこの悪漢を征服した。しかし彼れ自身も亦重傷を身に受けた。武士はこの時乙女に言うた。

「貴女は私の妻となつてくれますか」

彼女は答へた。

「悦んでなりますとも。このやうにお誓ひを致します」

武士はそれを聞いた後、次のやうに言うた。

「貴女は數日間私の城に居つて下さい。その間に私は私の兩親を訪づれて、結婚の萬端の準備をなさうと思ひます。そしてそれが終つてから私は城へ戻つて來て盛大な結婚式を舉げます」

乙女は答へた。

「萬事御命令通りに致しませう」

そこで武士は前述の如く彼女を城中に留め置いて彼れの兩親の家へと出立した。然るに彼れの不在中に、其の國の暴君はこの乙女の居る城へ來てその門を叩いた。彼女は彼れを城門の中へ入れなかつ

た。そこで暴君はいろくの財寶をもつて彼女の心を誘惑した。そして自分はこの國の有力な大名であるから、今直ぐにも盛大な結婚式を舉げて、彼女を妻とすることが出来ると言つた。彼女は輕卒にもこの甘言に耳を傾けて終に城門を開けて仕舞つた。暴君は城内に入つた。そして彼女と一緒に夜を過すといふ有様であつた。

約一ヶ月の後武士は彼れの城へ戻つて來た。彼れは城門を叩いた。しかし、誰れ一人として應ずる者は無かつた。彼れは大に悲んで次の如く叫んだのである。

「戀しき乙女よ、私が貴女の一命を助けたことや、貴女が私に誠心こめてさ、げたところのあの誓ひの言葉は、よもやお忘れになつたことではありませんまい。さあ、何か一言もの言うて下さい。貴女の顔を一寸見せて下さい」

これを聽いて乙女は窓を開けて言つた。

「何といふ阿呆者だらう。何がほしいといふの？」

武士は呆れて仕舞つた。そして言つた。

「これは驚いた。お前の恩知らずには呆れて仕舞つた。私はお前を助ける爲に澤山の重傷を身に受けたのだ。若しそれを疑ふなら見せてやらうか」

さう言ひながら武士は着物を脱いでその疵痕を見せた。そして言つた。

「そのやうに冷たいことは言はぬものだよ、さあ、門をお開けよ、私はお前の罪を皆赦してやるぞ。そして可愛い妻として生涯愛してやるよ」

しかし、彼女は一言の返事もしないで背を向けた。武士はこれを法官に訴へた。そして彼れが彼女の爲にさ、げた仕事を委しく述べた。又彼れは彼女の爲に受けた疵痕を判事に見せた。そして彼女は當然自己の妻となる義務があると申立てた。判事は彼女の誘惑者たる前記の大名を呼び出した。そして次の如く訊問した。

「お前はこの武士が命がけで亂暴者の掌中から救ひ出したその婦人を、我がものとして手放さぬといふことだが、それは事實であるのか」

「事實であります。閣下」

「その婦人は國法の精神に従つて自分から好んでその武士の妻となつたのである。然るにお前はその婦人を誘惑して、その愛情を盗むとは、何といふ大膽者であるか。先づ第一にお前はその武士の不在中に彼れの城へ入つたことはよろしくない。第二に彼女の貞節を破らせたことがよろしくない。これに對してお前は何と辯解するか」

暴君は答辯の辭が無いので啞の如くなつて仕舞つた。そこを判事はその婦人の方に向き直つてから言つた。

「女よ、お前は國法の定むるところに依れば、この武士に對して二重に妻たる義務を負はせられてゐる譯だ。先づ第一にお前はこの武士の手に依りて姦淫者から救ひ出されてゐる。第二にお前はこの武士に對して結婚の誓約をなしてゐる。然るにお前はこの義務を忘れて、夫をその城に入れなかつたのは何んといふ不心得である。これに對するお前の答辯は如何？」

彼女も亦辯解することが出来なかつた。判事はこの兩人に磔刑を宣告した。彼等は直にその刑に處せられた。判事の下した宣告が實に正しいものであるといふので人々は大にその明を褒めた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は神である。この婦人は人間の魂のことである。又姦淫の罪を犯した者は悪魔である。武士は基督、城は人間の肉體である。

一一八、詐 欺

埃及に假寓してゐた一人の武士は、その國で所有してゐた金を貯蓄して置く方法が知りたかつた。そこで彼れはこの金を委任して差支ないやうな人物を搜した。幸ひかくくの人物が大丈夫だと教へてくれる人があつたから、彼れはその人を訪づれて十タレントの金を委ねた。そして直に彼れの旅行に出立した。然るに彼れがいよく用事が終つて埃及へ戻つて來て、前記の男を訪づれて豫て委ねて置いたところの金を返へしてくれと言つたところが、彼れは俄に悪人の本性を現はして、お前のやうな人には未だ會つて會つたこともなければ、況して金を預つたことは夢にも知らぬとはねつけたのである。武士はいろいろ事情を話して辭をひく、して、物靜かに話しかけたが到底金を渡す様子が見え

なかつた。彼れはこんな風で思ひも寄らぬ酷ひ目に遇はされて閉口してゐると、偶然にも尼僧の衣を着けた老婦人が杖に縋つてとぼく／＼来るのを見た。彼れは彼女の歩いて来る路に石が澤山ころがつてゐて、それが必ず彼女の足を傷つけるに相違ないと思つたから、それ等の石を一つ一つ路上から取去つてやつた。老婦人は武士の様子が何となく元氣が無いのと、又この土地の生れで無いことが察せられたので、彼れを自分の近くへ招いて、どんな心配事があるのかと親切にも問うたのである。武士は遠慮無しに事の次第を語つた。老婆は彼れに一つの策を授けた。彼女は言つた。

「貴殿の同國人で信用の出來さうな御仁があつたら、其の御仁のお宅へ私を案内して下さい」

武士は言はれるまゝになした。彼女はその案内された家へ行つて、その家の主人に十個の箱を造つてくれと依頼した。その箱といふのは外部にいろ／＼の珍しい意匠を施し、美しい色を塗り、鐵で周圍を固め、銀の錠前をかけ、内部には石を澤山つめこんだ物であつた。箱は全部出來上つた。老婆は武士に命じて是等の十個を十人の運搬夫に荷はせて前記の悪漢の倉庫に運ばせた。

老婆は萬事、準備が出來たのを見て武士に謀を授けた。彼女は言つた。

「十人の運搬夫は一人々々順序善く進まなくてはならぬ。そして最初の運搬夫が倉庫に入つた時を

見計つて、貴殿は直ぐ例の預けた金を大膽に御要求になるのですよ。思つたよりは迅くお金が戻りますよ。大丈夫ですとも、保證しますよ」

彼等は一同打つれて悪漢の家を訪づれた。老婆は先づ次のやうに彼れに話しかけた。

「もし、御主人、このお仁は……(彼女は是等の箱を造つた職人に指差しながら言つた)私と一緒に住んでをられますが、この度本國へお還りになるのです。それにつきまして先づこの十個の箱に入れてあるお金を確かな御仁にお預け致し度いと申してをられるのであります。私は豫てから貴殿の御人物を承知してをりますので、この大金をお預け申すに適當した御仁は、貴殿以外に一名も無いと思つてゐるのであります」

彼女がかう言うてゐる間に第一番目の金箱を荷うた人夫が入つて來た。それと同時に前記の武士が現はれて來て、豫て預けて置いた金を返へしてくれと申込んだ。悪漢はかゝる場合にこれを拒んで議論しては折角今自分の掌中に入らうとしてゐる十個の金箱を失つて仕舞ふことになると思つたので、武士の怒りを慰めるやうな口調で徐ろにその側へやつて來てかう言つた。

「友よ、貴殿は今迄何所へ往つてをられましたか。豫てお預り申してゐたお金はこゝにありますから、何卒お受取りになつて下さい」

武士は早速金を受取つた。そして心の底から神に感謝し、特にこの老婆に感謝したのである。迎も戻つて來ぬと思つてゐた金がこのやうに懐中に入つたのだから……

老婆は悪漢に言つた。

「御主人、さあこれで私とこのお仁とはお暇乞を致しますよ、これから他の金箱を捜して來ませうよ。直ぐ戻つて來ますから……一寸の間お待ちを願ふこと、致しませう。是所へ持つて來た金箱は十分御用心を願ひます」

武士はこのやうにして尼さんの助太刀を受けて彼れの財産を取り戻した。

〔解説〕

可憐なる者よ、武士とは基督教徒、十タレントとは十戒のことである。悪漢とは現世界のこと、老

尼は良心、石の入つた鐵で固めた箱とは徳で満ちてゐる心のことである。

〔考證〕

東洋種の物語であることは明かである。『アラビア夜話』や『十日物語』にもこれと同種類の物語がある。前掲アルフォンサスの作中や、Cento Novelle Antiche (Nov. IXXIV) 等にも同種類の物語がある。可成り廣い範圍に於て材料に用ひられたものと見える。

一一九、忘 恩

或る王の時代に驕慢で且つ壓迫的な執事があつた。王城の近くに御獵林があつた。執事はこの御獵林にいろ／＼の形の穴を掘らせて陷穽の用をなさせた。そしてこの穴の上部を木の枝で掩うて野獸を陥れようとしたのである。或日のことであるが執事自身が一人この森に入つた。そして頗る得意氣に叫んでいふには、

「私ほど権力のある者は今この國に一名も無いと思ふ」

彼れはかういふ驕慢な心を起したかと思ふ間もなく、豫て彼れ自身の命令で造らせた陥穽の一つに馬を乗り入れて、あつと思ふ隙もあらばこそ、直に深い深い底に落ちて仕舞つた。然るにこの同じ日に獅子と猿と蛇が同様にこの陥穽に落ちた。彼れはこの怖い有様に氣も狂つて仕舞ふばかりであつた。彼れは有らん限りの聲を絞つて助を求めた。ギドーと呼ぶ貧しい男が偶然にもこの聲を聞きつけた。ギドーは毎日のパンを得る爲にこの森へ驢をつれて來ては薪を集めて市に賣り歩いてゐる者であつた。彼れは陥穽の口に急いで駆けて來た。そして助けを叫んだ者の身許を明かにした。執事は若し自分をこの窮地から救つてくれるならば、お禮として莫大の富をギドーに贈ることを誓約した。ギドーはそれに對してかう答へた。

「私の友よ、私は薪を拾つて生活をたてゝゐる者で、これ以外に何の貯蓄も無い人間です。私は一日でもこの仕事を怠れば、それはく怖ろしいことになるのです。その日のパンを買ふことも出來ぬのですから……」



執事はギドーに重ねて約束した。彼れは必ずお金を與へると明言した。ギドーはそのやうに固い約束まで結んでもらつたのであるから、大急ぎで町へ戻つて一條の長い繩を持つて來た。彼れはこの繩を穴の中へ投げ入れて、これを執事の胴に結びつけて上方へ引かうといふのであつた。しかし、この企てが實行されぬ先きに獅子が穴の下から飛び出して來て、その繩につかまつたので、先づ第一番に穴の外へ引出されたのである。獅子は陥穽から脱出して如何にも嬉しさうな態度を現はして直ぐ森の奥へ駆けこんで仕舞つた。繩が再び穴に投げ入れられた。猿は獅子の成功したことを學んで執事の頭を飛んで繩に飛びつきまばたくうちに繩を渡つて獅子同様に穴から免れ出た。しかし猿はお禮を返へす爲に留まることもなく、一目散に彼れの巢の在る方へと逃げて仕舞つた。繩が三度穴に投げ入れられた。今度は蛇が繩を巻いて現はれて來た。そしてこれも首尾よく逃げて仕舞つた。執事は叫んだ。「私の親切な友よ、畜生類は皆逃げて仕舞つた。今度は私を速く引き出して下さい。何卒、何卒」

ギドーは承知した。執事は首尾よく助けられた。ギドーは更に彼れの乗馬をすら救上げてやつた。執事はその馬に跨つて無事に王城に還つた。

ギドーは家に戻ると、その妻は夫が薪を持つて來ないのを見て非常に落膽した。そして今日は何故

薪を持つて還らないのかと訊ねた。ギドーは出来事の全部を語り、且つ此お禮に澤山のお金を貰ふことになつてゐると告げた。これを聽いて妻の顔は俄に晴れやかになつた。翌朝夙く彼女は夫をせきたて、宮殿へ送つた。然るに執事はそのやうな男は全然自分の識らぬ者だというて面會もしなかつた。加之、ギドーが餘りやかましく面會を求めたといふ罪で酷刻にも甚く笞打たれたのである。彼れは門番の爲に餘り強く打たれたので半ば死人の如くなつて仕舞つた。ギドーの妻はこのことを知つて驢の背に夫を扶けのせて漸く家に戻つた。ギドーはこれが爲に重い病氣にかゝつて殆んど一命が危くなつた。彼れの貧しい生活は倍々貧しくなつて、今は食べる物も無いといふ有様であつた。しかし、僥倖にも其後健康を恢復したので、彼れは例の如く同じ森へ薪を拾ひに行つた。彼れが一生懸命に薪を集めてゐると、遠方に十頭の驢が荷物を背に載せて來るのが見えた。そして最後に一頭の獅子がギドーの方を指差して來るのであつた。ギドーはこの猛獸を善く見たところが、前記の陥穽から救つてやつた獅子であつた。獅子は彼れの足でギドーに「これから貴殿は、是等の荷物を運んでゆく驢を案内して家へ還つて下さい」といふ意味を傳へた。ギドーはその如くなした。獅子はギドーの後に従つて進んだ。彼れの家に到着するや否や、獅子はギドーに馴々しく寄りそうて媚を呈するもの、如くであつた。そして尾をふつて如何にも得意な色を見せてゐた。それから森を目がけて走り去つた。ギドーは

直に各教會に赴いて若し我寺領地内で驢を失つた者があるならば、至急私の許へ申出て下さいと言ひ歩いた。しかし誰れもそれを申出す者は無つたから、彼れはいよいよ安心して十箇の荷物を開くことにした。開けて見て非常に驚いたことには、其の十箇の荷物が皆紙幣であつた。翌日彼れは又例の如く森に入つた。しかし彼れは木を切る道具を忘れて來たので大に閉口してゐた。彼れは上を見た一頭の猿が其所にゐた。然かもこの猿は彼れが嘗て陥穽から救出したものであつた。猿はギドーの木を切る道具の無いのを見て早速齒と尾を巧みに用ひて木を切つてくれた。ギドーは薪を驢に載せて家に戻つた。翌日又彼れは森へ出掛けた。彼れは彼れの道具を用意してゐると一匹の蛇が現れた。この蛇は彼れが嘗て陥穽から救出してやつたその同じ蛇であつた。蛇は口に三つの色のついた寶石を銜へて來たのであつた。三つの色とは白と黒と紅であつた。蛇はギドーの側へ來てその寶石を彼れの膝の上に落して、さつさと其所から姿を隠して仕舞つた。ギドーはこの寶石を一人の寶石鑑定家に見せてその批評を請うた。寶石商はこれを手にとるや否やその貴重な品であることを識つた、そして百フロリン（フランスの古代の金貨）で賣つてくれるなら悦んで買ひますと言つた。しかし、ギドーはその希望を拒絶した。彼れはこの寶玉の功德に依つて大なる富を作つたのみならず、陸軍の大將軍にまで榮進した。皇帝はこの玉の不思議な性質を傳へ聞いて是非とも一見したいと申込んだ。ギドーはその命を奉

じて御殿へ行つた。皇帝はその常ならざる美に打たれて仕舞つて代價は何程でも出すから賣つてくれぬかと言ひ出した。そして若しギドーが之を拒むならば國外へ追放すると嚇した。ギドーは答へた。

「陛下、それではこの寶玉をお賣り致しませう。しかし一言申上げて置きますが、私のお願ひ致す代價が高過ぎるといふ思召しがあるならば、品物は直ぐ頂戴してお暇申上げますから」

彼れはかう斷つて置いてから三百フロリンを皇帝に要求した。皇帝は直に三百フロリンをギドーに拂つた。ギドーは小さな箱を取出して、その中から寶玉を出して、これを皇帝の掌中に置いた。皇帝は三嘆した。そして言うた。

「このやうな美しい石を何所から手に入れたのか」

ギドーは問はれるまゝに委しく語つた。執事を陥罪から助け出したことや、その後執事が約束に背いて恩を返へさなかつたことや、又彼れの命令の下で散々に笞打たれてそれが原因となつて重い病氣にかゝつたことや、又獅子、猿、蛇等から恩返へしを受けたこと等を一つ一つ委しく皇帝に話した。皇帝はこの物語を聽いて大に感動して仕舞つた。彼れは執事を呼び出して言うた。

「汝は何といふ不埒な男だ。これに對して何か辯解の言葉があるか」

彼れは一言も答へることが出来なかつた。皇帝は續けて言うた。

「惡漢めが汝の如き恩知らずの人でなしが我が國內に居らうとは……ギドーは汝の一命を助けてくれた大恩人ではないか。然るにその大恩人を殆んど殺さうとしたとは何といふ恩知らずの奴だ。汝は心無き畜生ですらギドーの恩に報いたのを知つて何と思ふか。畜類ですら恩を報いたのに、汝は人間でありながら善に報いるに惡を以てするとは實に呆れた奴だ。汝の位も役も皆取上げてこれをギドーに與へるから左様心得ろ。それから磔刑に處するからこれも難有受けよ」

國內の貴族等はこの宣告を聽いて皆満足した。ギドーは名譽と長壽を得てその一生涯を太平に暮した。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は神のことである。貧乏な男といふたのは人間のことである。森はこの世

界の陥穽の多いことを説いたもの、獅子は人道を悟つた神の子、猿は良心、蛇は教長又は懺悔聴取り僧、繩は基督の御意、荷物を負うた驢は神聖な考へである。

〔考 證〕

この物語の種本の最も古いのはアラビアの 'Calilah ve Dimnah' と呼べる古い物語である。(このアラビア原本を印度本から重譯したのはその有名な英語譯 Donie's Moral Philosophie である。これは一五七〇年に出版になつてゐる。) 譯者ドニーは伊太利人である。このアラビア物は古來歐洲の多くの國語に譯されてゐる。傳ふるところに依れば既に一一九五年にマヌー・パリスなる者がこの物語を歐洲に紹介したので、リチャード第一世は大にこれを愛誦し、當時十字軍に参加することを拒んでゐたところの諸侯を戒めるに最も都合のいいものとして利用したさうである。即ちこの物語を語り聞かせて神に對する報恩の念を鼓吹したのである。但しマヌー・パリスの紹介した物には猿の話が省略してある。後世英吉利文豪ガローも亦その名著『コンフエッショ・アマンテイス』の第五卷の中でこの物語を繰返してゐる。但しガローは獅子の話だけは省略してゐる。

蓋しこの物語はアラビア種と印度種が相混じて出來たものであらう。報恩の教を説いてゐるあたりは印度式である。

1110、女性の機巧

ダライアス王は用心深い人物であつた。彼れは三人の王子を持つてゐて皆何れも王の爲に愛されてゐた。王はその臨終の時三子を枕邊に呼んで遺産を分配した。長男には王國を、次男には王自身の私有財産を、三男には黄金の指環、頸飾、高價の織物の一片等を與へたのであつた。指環はこれをはめてさへをれば他人から愛されることになるといふ不思議な魔力のある品物であつた。加之、これさへあれば欲しいと思ふ物は何物でも手に入るといふ寶物、又織物の一片は、誰れでもその上に坐つてこれから自分は何々の場所へ往き度いと思ふと、直ぐに運んで貰ふことの出来る不思議な品であつた。王はこの三品を末子に與へたのは、彼れに學問をする便宜を與へ度いからであつた。然るに彼れの母親はこの品物は彼れの適當の年齢に達する迄私が代つて保管してやるというて、決して三男の手には渡さなかつた。老王はこの遺産分配をやつてから直ぐ死んで仕舞つた。彼れの遺骸は盛んな式をもつて葬られた。やがて長男と次男は各々の遺産を自分の所有物とした。その後三男も母親から指環を渡される年齢に達したので、母親は特に彼れに警告して、お前は婦人の奸智に欺されてはならぬ。若し欺されて仕舞へばこの指環を女に取られることになるからと注意した。そしてその忠告が終つてから

漸く指環を彼れに與へたのである。ジョナサンは……三男の名はジョナサンであつた……指環を受取つた。そして彼れの得意とするところの勉強をつけた。或る日彼れが街道を歩いてゐると一人の非常な美人が目についた。彼れは忽にしてその女に魅せられて仕舞つて、彼女を彼れの家に同伴した。彼れはなほ指環を利用することを止めなかつた。そして何人でも彼れの爲に引付けられて仕舞つた。彼れの欲する限りの物は悉く彼れの掌中に入つた。

この婦人は彼れが財産が無いのに贅澤な生活をしてゐるのを見て非常に不思議に感じた。彼女は彼れが非常に有頂天になつてゐるのを見て一度だけ愛情をこめて抱擁した。そして日光の照る世界で貴郎ほど可愛い者はありませんと公言した。彼女はかういふ風にすれば、どんな方法でこのやうな立派な生活をしてゐるのであるかを告げるに相違ないと思つたのである。そこで彼れは指環の功德を話した。彼女はさういふ貴重な品は大切になさなくてはなりませんと忠告した。彼女はこれに付け加へて言つた。

「でも、貴郎は毎日いろいろのお仁と御交際になるのですから、ひよつとした事からそれが紛失しないものとも限りません。却つて私にお預けになつては如何でせう……お願いですから……」

彼れはこの言葉に動かされて終に指環を彼女に與へて仕舞つた。その後彼れがいよく物事に缺乏を感じて來たので、その指環を還してくれと彼女に言つたが、彼女はどうしてもこれを戻さなかつた。そこで彼れは大に後悔した。彼れは今や生活の道が無くなつたので彼れの母親の許に往き、指環を失つて仕舞つた原因を話したのである。母親はこれを聽いてかう言つた。

「だから私はかういふことにならうかと思つてお前にあのやうに注意したのだ。それであるのにお前は私の忠告を少しも守らなかつた。是所に頸飾がある。さあこれを持つてゆくのですよ。しかし善く注意して置きますが、この品は前の物よりも大切にしなくてはなりませんぞ。若しお前がこの寶物を失ふやうになれば、名譽も利益も永久にお前から離れて仕舞ひますぞ」

ジョナサンは頸飾を母親から受取つて再び我が書齋へと還つた。然るに町の門の側で彼れの情婦が彼れに會つた。彼女は非常に嬉しさうな顔つきをして彼れを迎へた。彼れは再び彼女と同棲した。但し彼れはいつも頸飾だけは胸から取去らなかつたのである。そしてこの頸飾の功德で彼れの欲する限りの物は皆彼れの所有に歸した。彼れは以前の如く頗る贅澤な生活をやつた。彼女は彼れが金も銀も持たないで、どうしてこのやうに奢侈の生活が出来るのであるか不思議でたまらなかつた。そこで

彼女は彼れが再び何か護符のやうな物を持つて來たのだと考へた。そして彼女は終に言葉巧みに彼れを説きつけて、頸飾の魔力を具さに彼れに話させて仕舞つた。女は言つた。

「でも、貴郎は何故そのやうに頸飾をいつも體につけていらつしやるのですか。貴郎は一箇年か、つて爲すこと以上のものを、僅に一瞬間でお考へになることが出来るんではありませんか。私に預けて下さいね……」

彼れは答へた。

「いやこれだけはお前に渡さぬ。指環を失つたやうな不幸を又々見せられると困るから。さうなつたら私はどんな不幸な目に遇ふか分らぬよ」

彼女は答へた。

「とんでも無いことをおつしやること、私は指環をお預りした經驗がありますので、頸飾を大切に保存する方法を十分得意致してをります。誰れからも盗まれぬことを保證致しますよ」

若者は淺薄な考へから彼女の言を信じて仕舞つた。そして頸飾を彼女に渡したのである。

彼れは所有してゐる物を悉く費して仕舞つてから今更のやうに貧乏の苦しみを知つた。そこで彼れは彼女に豫て預けて置いた頸飾を返してくれと言つた。然るに彼女は指環を返却しなかつた時と同様に、盗人に盗まれて仕舞つたと言ひ張つた。ジョナサンは非常に當惑した。彼れは「嗚呼私はどうかしたのだ狂人になつたんだ。指環を失つた後亦頸飾をこの女に渡して失ふとは、我ながら愛想のつきた男だ」と叫ぶのであつた。彼れは直に母親を訪づれて事の次第を物語つた。母親は少からず呆れた。彼女は言つた。

「お前は二度迄もお前を欺いたやうな女を信用することが出来ると思ふのですか。世間の人はお前を馬鹿者だと言ひますよ。これからは少しく伶俐になつて下さいよ。父上の遺物といつても最早や織物があるだけなんですから……若しお前がこの織物を失ふならば、私の許へ戻つて來ても何の效果も無いことですよ」

ジョナサンは織物を受取つて再びその書齋に入つた。情婦は非常に嬉し氣に見えた。彼れは織物を廣げながら彼女にかう言つた。

「私の可愛き乙女よ、この綺麗な織物は實は私の父親の遺物だよ。こゝへ来て私の側で、この織物の上に坐つて御覽よ」

彼女は言ふがまゝにその織物の上に坐した。ジョナサンは二人で淋しい場所へ往つて、他人の顔を見ないでをれ、ばい、がと念じた。敷物は直にその效驗を現した。彼等は人間の足痕の見えない遠い遠い國境の森の中へ運ばれた。彼女は大に泣いた。しかし、ジョナサンは彼女の涙には何等の注意も拂はなかつた。彼女は彼女が彼れの指環と頸飾を彼れに戻さぬならば、彼女を野獸の餌に供して仕舞ふつもりだと神に誓言した。彼女は怖ろしさに耐へきれなくなつて、さういふ譯であるならばこの二品をお返し申しますと約束した。然るに彼れは元來愚人であつたから、彼女に問はれるまゝにこの織物の效驗を彼女に語つたのである。そして彼れは疲勞の結果彼女の膝に凭れてつうとくと睡つて仕舞つた。この隙に乗じて彼女はジョナサンの坐つてゐた部分だけを自分の方に引寄せて、彼れの代りに彼女だけがその部分に坐した。そして彼女は其の朝ゐるところの場所へ戻り度いと念じた。敷物は直にその效驗を現したものと見え、彼女の望みを實現してくれた。しかし、ジョナサンのみは森の中で眠つたまゝに棄て、置かれた。目をさまして見ると彼れの敷物も彼女自身も其所にゐなかつたか

ら彼れは苦しみの涙にむせんだ。彼れは何れへ足に向けて進むべきかを知らなかつた。しかし、彼れは起き上つて十字を切つて固く心に決するところがあつて或る路を辿つて進んだ。途中彼れは深い川に到着した。彼れはこの川を渡らなくてはならなかつた。彼れは是所でこの川の水が非常に熱く且つ苦いことを知つた。それが恰度彼れの肉と骨とが二つに分かれるやうな感じを與へたのである。彼れは殘念でたまらなかつたから、その水を少量だけ持つてゆくことにした。少し進むと今度は空腹を感じた。その時折よく近くに旨さうな果實の生つてゐる樹木があつた。彼れはそれを取つて食べた。彼れは直に癩病患者となつた。殘念でたまらぬので是所でもその果實を少量だけ集めてこれを持つてゆくことにした。暫く往くと再び小さな川があつた。この川の水は前者とは全く異つてゐる彼れの足に肉を恢復してくれた。又果實の樹木があつた。しかしこの果實は前者と異つて彼れの癩病を癒してくれた。彼れはこの果實の若干を前者と共に持つてゆくことにした。

かういふ風に一日又一日と歩いてゐる間に彼れは或る城へ到着した。彼れは二人の男に會つた。彼等は彼れに何者であるかと訊ねた。彼れは「私はお醫者です」と答へた。二人はこれを聽くや否や非常に悦んでかう言つたのである。

「これは僥倖である。實はこの國の王様は癩病にかゝつて苦しんでゐられるから、若し貴殿の力で

それが全快するならば、お禮は山ほど致しますが」

ジョナサンは然らば私の腕試しをやつてみませうと答へた。彼等は彼れを王の許に案内した。結果は好成績であつた。彼れは第二番目の樹木の果實を王に食べさせたところが、癩病は直に拭去つたやうに消え失せて仕舞つたのである。次に同じく第二番目の川の水で王の肉を洗つてやると、それも完全に舊の如くなつたのである。彼れは王様から澤山のお禮の品々を恵まれたので、彼れの故郷の町を指差してこの土地を出帆した。

天下の大名醫がこの國に到着したといふ評判が普く廣がつた。嘗て彼れを欺いた前記の婦人は、當時重患にかゝつてゐて、迎も一命が助かりさうでなかつた。彼女は直にこの名醫の診療を請う爲に使者を送つた。ジョナサンは巧みに容子を變裝してゐたから、女の方では彼れがその人であることに氣がつかなかつた。しかしジョナサンの方では萬事承知してゐたのである。彼れは彼女の室に入るや否やこの病氣はどんなに良藥を飲んでも全快する見込はない。だが、患者がその罪惡を先づ以て懺悔し然る後に若し或る人を欺いて何物かを盗んでゐたならば、それを取り出して謝罪するならば、この重病が必ずしも不治の病ひとも限らぬと話した。婦人は既に墓の入口迄來てゐたので、低い低い聲で、私はジョナサンと申す若い男を欺いて、指環と頸飾とそして織物を盗み取り、それから彼れを淋しい土

地に棄て、野獸の腹を肥やさせましたと懺悔した。お醫者の風を装うてゐたところのジョナサンは、これを聞き終つてからかう言つた……「では、その品物は何所に隠してありますか」。女は「あの箱の中に」と答へた。そしてその箱の鍵を彼れに渡した。彼れは直に箱を開けた。彼れの寶物は悉く彼れの所有に歸した。そこでジョナサンは前記の第一番目の果實を……彼れが最初癩病にかゝつた時のあの果實を彼女に與へた。そして彼女がその果實を食べ終はるのを俟つて、今度はあの肉と骨とを二つに分つた水を與へた。この水を飲むや彼女の苦痛は倍々甚しくなつた。ジョナサンは直に彼れの母親を訪づれた。全國民は彼れの歸國を心の底から悦んだ。彼れは神様が如何なる方法をもつて、彼れをさまざまの危険からお救ひ下さつたかを語つた。そしてこの後長壽を保つて大往生を遂げた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は基督、皇后は教會、三子は現世の人間である。第三子は善良なる基督教信者、指環は信仰、頸飾は恩恵又は希望、織物は慈善である。情婦は肉慾、苦き河水は後悔、第一の果實は悔恨、第三の河水は懺悔、第三の果實は祈禱、斷食、施物である。癩病の王とは罪深き人間のことである。最後にジョナサンの乗つた船は神命そのものである。

〔考證〕

ヘルシア大王ダライアスの遺言傳説はいろ／＼の文學的材料に用ひられてゐる。(拙著『マンガデル東洋旅行記』全譯中にも同型の物あり。)本章の物語も恐らく東洋物なるべし。不思議な數物の話は『アラビヤ夜話』にもあり(『The Story of Prince Ahmed, and the Fairy Pari Banou』参照)。

一一一、俗界の名譽と奢侈

昔、或る國王の下に二人の武士があつて、その二人は同じ町に住んでゐたことがあつた。彼等の一人は老人で、他は若かつた。老人の武士の方は金持ちであつたので、器量望みといふ譯で非常な美人……特に年の若い美人を妻として迎へた。然るに若い方の武士は貧乏であつたので、持參金望みといふ譯から老婆を妻として娶つた。偶々若い方の武士は老いた方の武士の城の傍を通過した。その時老いた方の武士の妻は窓のところで坐つてゐて面白さうに歌つてゐた。若い方の武士は彼女の美に打たれて仕舞つた。彼れは獨言した。

「あの美しい乙女が私の妻となり、その代りにあの女の老耄してゐる夫が、私の老婆と夫婦になつてくれるなら、どれほど幸福だか分らぬが……」

その時以來彼れは彼女に對して強烈の愛情を寄せた。そして彼女にさまざまの高價な贈物を送つた。彼女の方でも同じやうな感じを持つてゐた。それで出來得るだけ機會をつくりて彼れを城内へ呼び入れたのである。彼女は亦彼女の年老いた夫が萬一死んだならば、この若い武士を第二の夫としようといふ企をもつてゐた。

老いた方の武士が住んでゐた城の窓の近くに一本の無果實の樹が生長してゐた。一羽の夜鳴鳥が毎晩この樹を訪つて來て、非常に節面白く囀るのであつた。武士の妻は其の方へ引つけられた。そして窓の所に立つてゐて永い間この鳥の歌に聞きほれてゐるのであつた。好人物の夫は彼女がこのやうに何もかも忘れて毎夜目をさましてゐるのを見て不思議に感じた。彼れは彼女に訊ねた。

「お前は何故毎夜必ずきまつたやうに起きるのか」

妻は答へた。

「夜鳴鳥が私の窓の向ふの無果實の樹にとまつて歌ふからです。私はその面白い歌を聴くとどうにもならないのですもの」

老人の武士はこれを聴いたので翌朝夙く起きて、弓と箭を携へてその無果實の樹の近くへと急いだ。彼れは夜鳴鳥を射殺した。そしてその心臓を取出してこれを妻に見せた。妻は非常に泣いた。彼女は鳥に對つてかう言つた。

「嗚呼美しい鳥よ、お前はお前に相應ふさはしいことをやつたのだ。お前を殺したのは私だ。お前の罪ではない」

彼女は彼女の夫の殘酷なことを知らせる必要上、その愛人であるところの若い武士の所へ急使を送つた。若い武士はこれを聴いて悲しんだ。そして心の中で叫んだ。

「この殘酷な老人は私達が互に相愛してゐることを知つてゐても、こんなにしてだん／＼意地悪い方法で私を苦しめようとするんだ」

かう考へた結果、彼れは決するところがあつた。彼れは二重の鎧を身に着けて城内へ斬り入り、殺されたところの鳥の爲に復讐するところがあつた。老いたる武士は終に殺されて仕舞つた。その後直に若い武士の老妻が死亡した。彼れは老武士の寡婦と結婚した。彼等は其後長壽を保つて大往生を遂げた。

〔解説〕

可憐なる者よ、二人の武士とはモーゼスと基督のことである。基督は老いたる武士である。老いたる武士の妻となつた年若い婦人は新しい掟のことである。老いたる妻とは古い掟のことである。無果實は十字架、夜鳴鳥は基督の人性である。基督の人性を殺した者は猶太人である。夜鳴鳥の心臓とは我等の救世主の現はし給うた愛のことである。二重の鎧とは猶太人の儀式である。

二二三、盲目

或る武士は葡萄の實を收穫する爲に彼れの葡萄園に出掛けた。彼れの妻は常よりは夫が愚圖々々し

てゐるのだと思つて、早速彼れの情夫を呼びにやつた。姦夫姦婦が楽しんでゐる所へ夫が還つて来た。夫の歸へりの遅くなつたのは彼れが葡萄の房を取つてゐた時、目に杖があたつて眼球が飛び出たからであつた。それで彼れはやつとのことで歸り來つたのである。

妻は夫が門を叩くのを聽いて非常に狼狽した。そして大急ぎで彼女の情夫を隠した。武士は家に入つてから、その負傷した目が痛んでこまるというてゐた。そして一時も迅く横臥したいからベッドを造るやうにと命じた。しかし、妻は寢室に隠れてゐる情夫が見出されることを心配したのでかう言ひ出したのである。

「貴郎は何故ねようねようとお言ひになるのですか。どんなことが起つたのですか、聞かして下さい」

夫は今日起つたことを委しく彼女に語つた。妻は叫んだ。

「では、私は疵のつかなつた方の目を強くする爲に藥をつけて見ませう。若しさうしないで置きますと、疵のついた方の目の毒が丈夫な目に傳つて、結局兩方の目がつぶれて仕舞ひますから」

武士は何等の反對もしなかつた。妻は夫の視力を塞ぐに十分なほどの大きな膏藥をつぺたりと目の

上に貼つて仕舞つた。そして情夫にさあお逃げよと手眞似で教へた。情夫は首尾よく逃げた。彼女はこの策略がうまく成功したので、大に得意になつて夫に言つた……「それ大丈夫でせう。もう私は安心致しましたよ。丈夫な方の目はこれで大丈夫です。さあベッドにお入りよ、そしてお眠りなさいな」

〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は教會の教長のことである。姦婦は人間の魂である。教長の目は贈物の爲に盲目となることが多い。

〔考證〕

この種の所謂盲目譬喩物語は中世期の文學に非常に多い。チョーサーの『カンタベリア物語』中にも同型の物がある。アルフォンサス及び伊太利の小説等にもこの種の物が見られるのである。蓋しアラビア又はペルシアあたりの種本に依りしものなるべし。

一二三、娘に甘き母親

一人の武士は遠國に出立することになつたので彼れの妻を彼女の實母に委ねた。然るに彼れの妻は夫の出立後ほどもなく一人の若者と情交を結び、且その事を彼女の母親に話した。母親は娘のこの不品行をやつた事を却つて善いことのやうに考へて、いろいろと密會の機會をつくつてやつた。二人の男女はこのやうにして楽しんでゐた時、思ひも寄らず武士は戻つて來た。彼れは門を叩いた。妻は非常に愕いて彼女のベッドの下に情夫を隠した後門を開いた。夫は非常に旅疲れをしてゐたので、ベッドをつくつてくれと妻に命じた。妻は倍々閉口してどうしてよいか分らなくなつて仕舞つた。母親はこの有様を見て、「部屋に入る前に例の美しいシーツを……あの私達のつくつたシーツを見せようではありませんか」と教へてくれた。

さういうて母親は立ちあがつてシーツの一端を彼女の娘に持たせ、自分自身は他の一端を持つて夫の前にこれをひろげた。これは勿論情夫を逃す爲の方便であつた。情夫はこの意味をさとして早速シーツの裏からこそくと逃げて仕舞つた。情夫の首尾よく逃げた時を見計らつて母親は言つた。

「さあ、もうよろしいですよ。後はお前さん自身の手でベッドの上にお敷きよ……私はシーツを織る時に私の力添えをしたのだから、後のことは私の知つたことでない……」

〔解説〕

可憐なる者よ、この物語の中の武士とはこの世界を放浪してゐる人々のことである。妻とは肉慾母親とはこの世界、シーツとはこの世界の虚榮のことである。

〔考證〕

この物語は前述アルフォンサスの 'De Clericali Disciplina' の中に見えてゐる。按ふにその最古の種本はアラビア又はペルシア物であらうか。内容の如何にも淫逸的にして且つ洒落な點はアラビア又はペルシアあたりの物語に共通してゐる所がある。

一二四、婦人は信頼し得る者に非ず

一人の立派な武士はその君主たる國王の感情を大に害したことがあつた。武士は國王に使者を送つて己が罪を謝した。國王は條件づきで彼れを許してやつた。その条件とは先づ歩くと同時に乗つて元

老院に来ること……即ち半ば歩き半ば乗つて來ること、但しそれは同時に行ふのである。次に彼れの最も愛してゐる友を伴つて來ること。第三は最も上手な道化者を伴へ來たること。第四は彼れの最も恐れる敵を伴へ來たること。即ちこの四つの條件であつた。

武士はこのやうな變つた條件は果して自分の力で遂げることが出来るだらうかと心配した。

或夜のことであつた。彼れは旅人をその家に宿して大に歡待してゐたが、その折に彼れは彼れの妻にかう私語いた。

「諸國を旅行する者はお金を澤山持つてゐることが珍しくないよ。だから若しお前さへ承知してくれるなら、今夜のお客を殺害してその金を盗まうと思ふが」

「妻は賛成した。武士は妻にかう置いて一先づベッドに入つた。そして妻を始め家族の者が皆睡つて仕舞つた時に、彼れのみで私かに起き出して、その夜のお客である旅人を起した。そしてお客を早曉出立させて仕舞つた。その後武士は犢を殺してその死骸を寸斷した後それを悉く一つの袋に入れた。それから彼れは妻を起してその袋を家の一隅に隠すやうにと命じた。彼れはその折妻に私語いた。

「この袋の中に首と手足だけを入れて置いた。胴は麻に埋めた」

彼れはそれから少しばかりの金を彼女に見せて、恰も殺害された者から盗んだもの、やうに装うたのである。

聽て武士は約束の如く國王の面前に出なくてはならぬ日となつた。彼れは彼れの右側に一頭の犬、左側に彼れの妻と、乳離れのしない兒とを伴つた。一行の者がいよく王城の近くに來ると、武士は一方の脛を犬の背にのせて恰も乗つてゐるやうに見せた。又他の脛で彼れは歩いてゐたのである。彼れはこのやうにして徒歩者であると共に、一種の乗馬者であるといふ格式で城門に入つた。王は彼れの機智を見て大に驚いた。

判者は問うた。

「しかし、汝の最も愛してゐる友は何所にゐるか」

武士は直に彼れの偃月劍を抜いて前記の犬にひどい傷を與へた。犬は吠えながら逃げ出した。武士は犬に聲をかけた。犬は再び彼れの側に戻つて來た。武士は言つた。

「御覽の通りです。これは私の最も親しい友であります。これほど私に誠實の心をさ、けてゐる友はありません」

王は答へた。

「成程、その通りだ。しかし、汝の道化者は何所に居るか」

武士は彼れの幼兒を指差して言つた。

「是所に居りますのが道化者であります。この兒の遊戯ほど面白いものは外にありません」

王は答へた。

「成程、それもその通りだ。しかし汝の最惡の敵は何所にゐるか」

武士は妻の方を振り向いてした、か彼女を打つた。そして大に罵倒していふには、

「この不貞な女郎めが……何といふ大膽な奴だ、王様に秋波を送るとはもつての外だぞ」

妻は夫の爲に理由もなく打たれたのを大に憤つた。そして金切り聲を張上げて叫んだ。

「この人殺しめが、何故私を打つ。自分の家で、むごたらしい人殺しをやつてさ、僅かばかりの金が欲しい爲に旅人を殺害してさ……もうそれを忘れたのか」

武士は再び彼女を打つた。彼女は叫んだ。

「悪漢め！ さあ皆様私と何卒一緒に来て下さい。殺害された旅人の首と手の入れている袋の隠してある所へ御案内致しませう。胴は廐に埋めてあります」

直に搜索が始つた。妻の指揮に従つてその場所を掘つてみると、驚いたことにはその死骸は明かに犢の死肉に過ぎなかつた。席に侍つてゐた貴族等はこの武士の機智に感心して仕舞つた。彼等は大に彼れを褒めた。彼れは國王から其後末長く寵用された。

〔解説〕

可憐なる者よ、神の御意を和け、又或る条件の下で神の御怒りを解く罪人は皆この武士の如き人々

である。徒歩者であると共に乗馬者であるのは我々の性質である。即ち我々には人間と神の性質が半ばしてゐる。犬は人間の善良なる守護靈、即ち僧侶のことである。僧侶は魂に罪あるが如く傷を受けることがある。道化者即ち幼兒は良心のことである。妻は肉慾のこと。

〔考 證〕

最も古い種本は印度物なるべし。伊太利の 'Cento novelle' を始り Herber's Dolopathos 等にも同様の話が現はれてゐる。

一二五、 祕密を漏らし偽を言ふ女

俗人と僧侶の二人の兄弟があつた。兄の俗人は弟の僧侶から婦人といふものは祕密を守れるもので無いと屢々聽かされてゐた。そこで彼れは彼れ自身の妻にこのことを試めさうと考へた。或る夜彼れは彼女に話しかけた

「私のなつかしい妻よ、若しお前が祕密を守つてくれるならば、お前には是非話し度いことがあるが、

しかし、お前がそれを漏らすならば、私はそれが爲に非常に迷惑するよ」

妻は答へた。

「それは御心配になる必要はありません。私達夫婦は一つの體ではありませんか。貴郎の御利益は即ち私の利益と申すもの。同様に貴郎の御損は私の損であります」

彼れは言つた。

「ては話さう。實は私は前夜腹が痛みだしてどうすることも出来なかつたよ。お前はそれで私がどうしたと思ふの。それはね。大きな聲では言ひないが、實は吐瀉した譯さ……驚くなよ一きな大きな黒い鳥が一羽腹から出たのさ。そしてその鳥が見てゐる間に空中に翔んだのさ……私はこれ位愕いたことはないね」

正直な妻は驚いて問うた。

「さうでしたか。何といふ不思議な事でせう。それにしても貴郎は何故それしきの事でよくよ思

案にくれてゐるんですか。そのやうな厄介物がお腹の宿から出て仕舞へば、却つて都合がい、ではありませんか」

二人の間の會話はこれで終つた。翌朝妻は黒鳥の一件で何だか腹が一つばいになつてゐるやうな心地がしてたまらぬので、常よりは夙く起きて隣人の家に走つた。

彼女は言つた。

「私の無二のお友達よ、祕密の事を聽かせてあげませうか」

聽手の女は答へた。

「それは是非とも承り度いものです。祕密は守りますよ、御安心なさいな」

彼女は話し出した。

「私の夫の一身上にそれはそれは飛んでもない事が起きたんです。昨夜大變お腹が痛み出したと申してをりましたが、そのうちに大きな、大きな黒鳥を……然かも二羽迄吐瀉致しました。さう

するとその二羽の大鳥が見てゐるうちに翔出しましたの。私はこれが心配になつて困りますのよ。しかし、どんな事があらうと他人には言はないで下さいな。

隣家の婦人は必づ他言致しませぬと誓つた。然るにこの婦人はその又隣家の婦人にこの話を傳へた。そして二羽と聽いた筈の鳥が今度は三羽になつた。さうするとその又次の噂は四羽といふことになつた。この調子で次から次へと話が大きく傳へられて最後にこれを聽いた人は、一人の不運な男が四十羽の黒鳥を吐瀉したといふことを信じたのである。

この話を作り出した人は想像以外の噂を生み出したのを見て、今更のやうに當惑したので、早速彼れの世話好きな隣人どもを集めて、實はかういふ噂のたつやうになつた原因は、私が私の妻が祕密を守る事が出来るかどうかを試めさうとしたことに始つたのですと辯明した。この後ほどなく妻は死亡した。彼れは直に僧院に入つた。そして其所で大往生をとけた。

〔解説〕

可隣なる者よ、この物語の中の俗人とは平氣な顔で馬鹿けた事を行つて澤山の失敗を重ねる者のこ

とである。しかし、彼れは人々を集めて……但しそこに集まつた人々とは過去と現在の罪を指差したものであるが……懺悔して彼れの本心を淨める。

一二六、信用することの出来ぬ婦人

これはマクロビアスの話してゐることである。バビリアストと呼ぶローマの一青年がその父と共に元老院會議に出席したことがあつた。その席上で非常に重大な事件が討議された。そしてそれにして絶對の祕密を守ることが要求せられてゐて、若しこれをもらすならば死刑に處せられることになつてゐた。この青年が自宅へ還へるや否や、その母親はそれほど重い罪の下に絶對祕密を守るといふ事件は、どんな大事件であるのかと彼れに訊ねた。母親は我子が満足に答へてくれぬのを憤つて、どうにもしてこれを聞き出さうと思つて、或は言葉を和けて懇願してみたり、或は利益を以てこれを誘惑してみたり、或は嚇したり、或は答をもつてすら彼れを打ちこらしたのである。しかし、彼れは決して祕密をもらさなかつた。だが、彼れは母親を満足させて、然かも祕密を告げぬ方法を考へ出して、

次の如く話した。

「母上よ、實は會議にのぼつた事件はかういふ問題でありました……一人の夫が多くの妻を持つことが國家の爲に利益であるか、それとも又、一人の妻が多く夫を持つことが國家の爲に利益であるか、その利害如何……かういふ問題が議題となつたのであります」

母親はこの事を聴くより迅く他のローマの婦人連中の家へ走り、この祕密問題について議した。翌日、婦人の一大團體が躊躇無しに元老院へ押寄せて、一つの決議案を提出した。それはかうであつた。「我等ローマの婦人團體は次の決議案の實現を政府に要望す」

記

二人の女子が一人の男子と結婚するよりも、寧ろ、一人の女子が二人の男子と結婚することを正當と認む。

元來從順であるべき女子が臆面もなくこのやうな狂人振りを發揮して來たので、流石の元老院議員

連中も呆れて仕舞つた。彼等はこの風潮を如何にして善導すべきかを考へた。青年バピリアスはこの事を聴くや直に元老院に出頭して、この騒動の起つた原因を具さに説明した。元老院議員は皆彼れの機智に富めることを賞讃した後、今日以後若しこの青年が自發的に出席を承諾してくれるならば、彼等の會議に出席して貰ふことに決議した。

〔解説〕

可憐なる者よ、清淨な生活を送つてゐる者は皆この青年と同一の人物である。この青年の父は僧侶のことである。又その母は俗世界のことである。

一二七、公平無私

或る亂暴で且殘忍な武士が一人の正直な從僕を持つてゐた。或日彼れはその從僕と二人で市場に往つて歸途森の中を通過した。途中で彼れは銀貨三十マルクを失つた。武士はこの事に心付くや否や從

僕にやかましくその事を訊ねた。しかし、從僕は全く存じませんと言ひ通した。又それは眞實の答へであつたのだ。然るに武士は失つた金が見出されぬといふ理由の下で、從僕の足を切斷して森の中に置き去り、己れのみはさつさと馬に跨つて歸宅して仕舞つた。一人の隱遁僧は從僕の苦悶の叫びを聞きつけて直ぐに助けに來てくれた。從僕は事の顛末を僧侶に語つた。僧は從僕の無罪であることを知つて心中大に満足するところがあつた。そして彼れを自分の肩に負つてその庵に誘つた。

僧は禮拜堂に入るや否や神を罵倒した。神は正義を行ふべきものであるにも拘らず、かういふ正直者が罪無くして足を切斷されるのを見て何等の保護も與へぬとは、神に正義を見る明が無いことを説明する所以である……かう彼れは神を罵倒したのである。彼れは永い間泣いてみたり、祈つてみたり、罵倒してみたりした。終に我等の主の一天使が彼れに現はれて次の如く問うた。

「お前は讚美歌の中に神は正しき裁斷さいだんの人、強く又忍耐の云々とある句を讀んだことは無いか」

僧は溫和に答へた。

「何度も讀みました。諳記してをりますよ。しかし今日は此れが間違つてゐる事を知りませした。

あの足を切斷された憐れな男は事實此を裏切つたのであります。神には正義も公平もありませんよ」

天使は言つた。

「神様を不公平だと咎めだて、はならぬぞ。神様の道は眞實だ。又その判断は公平だ。お前は幾度も幾度も「神の命じ給ふことは測るべからず」といふ句を讀んだこと、思ふ。足を切られた男は舊罪に依つて切られたのだ。即ち彼れはその切られた足で不孝の罪を犯したのだ。彼れの母親を馬車から蹴り落したことがあつたので、その罪の報いが永劫に彼れの後を追うてゐるからである。又彼れの主人なる武士は多くの財寶を集めようと思つて、己が魂を殺して軍馬を購はんとしたのである。故に彼れがこれが爲に用意した金を失つたのは、これ全く神の正しき御裁断に依つたものである。特に今我が言ふことをよく聽けよ、この金を拾つた者は正しき貧乏人であるぞ。彼れはその妻子と共に朝夕神を拜し、神の御助けを記念してゐる者である。今彼れの掌中にこの金が入つてゐる。若しこの金が無かつたならば彼れは餓死するのであつた。彼れはこの金で彼れ自身と彼れの家族の爲に生活上に必要な物品を購つた。そしてその一部分はこれを彼れの懺悔聽取僧に委ねて貧乏人に分配してゐる。しかし、彼れはこの金を用ひる前に一生懸命になつてその正當の持主を搜索したのである。そして、それが無効になつたので今度はこれを正しい用途に充てたのである。故にお前も

この道理を辨へてつまらぬ考へは起さぬがよい。神様は何事も公平に處理して下さいるものであるから、決して今迄のやうな悪口を申し上げるものには無い。神様は眞實で、強くて、且つ何事に對しても辛棒強い御性質である。

〔解説〕

可憐なる者よ、この武士は僧侶のことである。下僕の足が切斷されたといふことは、教會からの反叛を切斷したことである。隱遁僧とは謹直な懺悔聽取僧のことである。天使とは清淨な心である。貧しき男とは基督のことである。

一二八、不正義

皇帝マキシミアンの時代に二人の武士があつた。その一人は神を畏敬し、正義を好愛してゐたが、他の一人は金持であつて然かも貪慾、その上、神の御意を満足させることよりも、俗人の歡心を買ふことにのみ腐心してゐた。正義を重んずる方の武士は、この悪人の地續きに少しばかりの地面を所有

してゐた。悪人の方の武士は貪慾にも機會があつたら、これを我が物にしようと思つてゐた。彼等は初め相應に大金を拂つてこれを買はうとしたのであるが拒絶されたので大に憤つてゐた。然るに偶然にも相手の正しい武士は死亡した。そこでこの悪漢は忽ち悪智恵をしぼり出して、その相續者からこの地面を購着して取上げようと企てた。そこで彼等は先づ故人の證文を贋造して、その問題の地面が故人の死亡する少し以前に、或る價格で賣却済みになつたといふことを言ひ出したのである。但し彼等はこれを證明する爲に三人の男を雇つたのである。彼等は或る手段を用ひて前記の武士の死骸に接近してから、三人の證人をその室に案内した。そして彼れの横つてゐた部屋の中で實印を見出したのでこれを取上げた。そしてその實印を死人の母指に持たせて、形式通りの證文に捺印させた。彼等は彼れの後について來た者に次の如く言つた。

「貴殿等はこの證文の證據人であると思ふが」

彼等は「確かに證人です」と答へた。

武士は彼等を首尾よく退けた後、終にその地所を横領して仕舞つた。故人の子息はこの不正な行爲

を目撃して大に慨歎した。彼等は問うた。

「何故貴殿は私の土地を占領したのですか」

「お前さんのお父さんが私に賣つたからさ」

「そんな譯はありません。私の父は幾度それを賣ることに反對したか知れませんが……賣つたなどとは逆も逆も信じられません」

彼等は相携へて裁判官の前に現はれた。貪慾な武士は故人の實印の押してある贋造證文を得意氣に持出した。そして前記の證人をすら引連れて行つたのである。證文を検査してから故人の子は言つた。

「成程これは父の實印に相違ありません。しかし、私はどうしても父がこの地所を賣つた筈は無いと信じてをります。この實印をどうして得たかは私には固より分りません。これは賢明なる判官閣下の御判断にお任せ致します」



判事は姑く考へた後三人の證人を一人一人引離して訊問することにした。彼れは先づ最初の者に對つて、お前は神様のお祈りを知つてゐるかと問うた。そして初めから終り迄そのお祈りを繰返へさせた。證人はこれを間違なしに繰返した。そこで彼れは引離して置かれた。次に第二の證人が現はれた。判事は彼れにかう言うた。

「お前の友は事實を陳べた。それ故お前が私の要求することを正直に陳べぬならば、磔刑に處せられるぞ」

彼れは彼れの共犯者が既に贋證文の一件を白狀して仕舞つたと想像したから、前記の實印を盗んで證文に押しした事實を悉く白狀した。判事は一通りこれを聴取つてから彼れを別席へ引離して入れた。次に第三の證人を呼び出して前者の場合と同様な訊問を試み、若し事實を白狀せぬならば死刑に處して仕舞ふぞと嚇した。この者も全部を白狀し且つ前者の陳べた事實を悉く是認した。彼れも亦別席へ入れられた。最後に老武士が呼び出された。判事は厳格な態度をもつて次の如く彼れに話した。

「惡漢よ、汝は貪慾の爲に盲目となつてゐる。死んだ武士の實印を盗み取つた顛末をつ、まず白狀せよ」

罪人は事實の發覺したことを想像もしてをらなかつから、彼れが既に陳べた事柄をどこ迄も大膽に固執した。判事は彼れの頑固な態度を見てかう言うた。

「馬鹿者よ、汝自身の證人すら汝の惡事を認めてゐるのだぞ。汝は死人の母指に實印をくつつけて證文にそれを押ししたに相違あるまい」

武士は贋造證文の事實が全く曝露して仕舞つたのを見出したので、地上に平伏して慈悲を願つた。判事は言うた。

「汝に相當した慈悲を與へてやるぞ」

判事は直に獄吏に次の如く命じた。

「是等の罪人を外へ出して直ぐ磔刑に處して仕舞へ」

國內の貴族等はこの宣告を感心した。それは事件の調査や訊問の巧妙なことを感心したのと劣り優りは無かつたのである。不正を行つた武士の財産は原告たる故人の子息に與へられた。若者は國王に

その恩を謝した。そして彼れの遺産を無事に所有した。

〔解説〕

可憐なる者よ、二人の武士とは悪魔と我等の最初の父アダムのことである。アダムの子たる前記の若者は凡ての人類を指差したものである。遺産とは天の樂園である。偽證文は人間の元來の罪である。實印とはアダムがイヴと共に禁斷の樹の果實を食べることに同意した事實を表はすものである。三人の證人とは生活の驕慢、肉の淫樂、目の淫樂等を指差す。

〔考證〕

東洋材料に多少變改を加へた物語であらうと思はれる。

一二九、眞實の友情

或る國王はたゞ一人だけしか王子を持つてをらなかつたので非常にこれを可愛がつてゐた。王子はかね／＼旅行を希望してゐたのでこのことを父王に話した。父王は直ぐその望みを許してくれた。王子は七箇年間旅行をした後無事に歸國した。父王は非常に悦んだ。そして王子に七箇年の間に如何なる友人が出来たかと問うた。王子を答へた。

「三人出来ました。その第一の友を私は私自身よりも愛してをります。第二の友を私自身と同一に愛してをります。第三の友を僅かばかり、或は全く愛してをりません」

父王は言うた。

「成程、それはよろしい。しかしお前は是等の友人の援助を受ける前に、その人物を試験することが必要である。私はその試験の方法をお前に教へてやらう。先づ豚を殺してその死骸を袋に入れ、それをお前の最も多く愛してゐる友人の家へ夜間運びこむのである。そしてその友人に私が或る人を偶然に殺害したから、萬一その死骸が見出されるならば、父王から死刑に處せられるに相違ないとかう話した後、若し貴殿が眞實に私を愛してゐるならば、何卒この窮境から私を救出してくれと相談をもちかけるのである」

王子はその通りにやつてみた。さうするとその最善の友はかう答へた。

「貴君は亂暴にも他人を殺害したのであるから、どうしても磔刑に處せられなくてはならぬのだ。貴君は私の友人であつたのだから、私はその緣故で、貴君の死骸を包む爲に、布を三エルか四エル寄贈教ませう」

王子はこれを聽いて大に憤つて第二の友を訪づれ、前と同様のことを話してその援助を請うた。彼は第一の友と同様に彼れを迎へた。そして言つた。

「貴君は私自身をさへそのやうな危険に導かうとするのか……私は狂人ではありませんよ。しかし、私は貴君を私の友人だと呼んだ緣故もあるのだから磔刑の場所までお見送りをして、その途中で出来るだけ慰めてあげませう」

こんな風に第二の友は寛大ぶつたところを王子に見せたが、王子は何等悦ぶところがなく、直に第三の友を訪づれて次の如く言つた。

「私は貴殿にお話することが恥しい次第だが、實はひよつとしたことから他人を殺害しましたの

で……

友は叫んだ。

「それは大變だ。よし、よし、私は引受けた。私は一命を棄て、君を保護しよう。だが、萬一君が磔刑に處せられることになつたら、私は君の身代りになつて殺されてやるぞ、若しそれが許されなければ君と一緒に殺されるつもりだ」

この第三者が王子の眞實の友人であることが明かになつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は神、その獨り子は基督教信者、第一番目の友人はこの俗世間のことである。布を二エルか、三エルを必要に應じて與へる位が第一の友の爲し得る最善のものである。次に第二の友は妻子のことである。妻子は汝の墓迄汝を追うて來て哀愁の涙にむせぶが、それもほんの束の間のこと、汝の死體がいよく土中に埋められて仕舞へば直ぐ汝のことを忘れる。第三の友は基督で

ある。十字架に掛けられてゐても我等を愛し、且つ彼れの一命を棄て、も我等を救助して満足されたその基督……これこそは第三番目の友人である。

〔考證〕

この物語は前述アルフォンサスの中にも見えてゐるほどであるから、可成り古い時代から歐洲各國に傳つてゐたものと見える。これも亦東洋的教訓の共通性を暗示してゐる。

III〇、智能く暴を制す

或る國王は一人の貧乏な男に澤山の金を與へ、且つその持城の一つを彼れの監督の下に委ねた。貧乏男がこのやうに一躍して富貴の身となつたので非常に心が驕り、終にその國王に對して謀叛を企て彼れの預つてゐた城を敵の掌中に渡して仕舞つた。國王は折角彼れを賤しい境遇からこれほどの身分に引上げたのに、それが却つて畜犬に手を嚙れた結果になつたので大に残念に思つた。そして彼れが

失つた物を再び掌中に取戻す最善の方法について考へた。しかし、彼れはこれを成就するには彼れの臣下の愛と、勇と、智慧、即ちこの三者を先づ我が有としなくては、何事も成就することが出来ぬと教へられた。當時國內に三人の武士があつて、その第一の者は人間の中の最も勇敢なる者であり、第二の者は最も賢なる者、第三の者は最も王に忠勤をさ、けでゐる武士であつた。

是等の武士は幾度も大軍を率ゐて前記の城を包圍した。その中でもかの最も勇敢なる武士は、敵軍が伏兵を隠してゐた森を通して彼れの軍を導いたのである。彼れは勇敢してゐた間に石弓から放たれた箭が不幸にして彼れの下腹部に命中した。彼れはその負傷の爲に陣歿した。かゝる間に前記の賢い武士は部下の兵士を率ゐて來て、平和の約に依りて城を降さうと企てた。然るに彼れが話してゐる間に一條の箭が飛んで來て彼れの肺と胃の間を貫いた。彼れは終に絶命した。第三の武士は彼れの二人の友が陣歿したのを目撃して森に入つた。そして非常に雄辯に且つ機智に富んだ辯を振るつて是等の謀叛者を感動させた。彼等は終に彼れをして城内に入らしめた。彼れは巧みに事件を處理した。それが爲に彼れに反對してゐた軍も終に彼れの軍と同盟し、且つ彼等の占領してゐた物を悉く彼れにさ、けて仕舞つた。國王はかくの如き問題の中心となつてゐた森が、首尾よく彼れの掌中に入つたのは、全く彼れの慎重な謀に依るものであると感じたので、彼れに與ふるに大なる名譽を以てした。

〔解説〕

可憐なる者よ、王とは基督のことである。貧乏の身分から一躍して富貴の身となつた男はアダムのことである。何故といへば彼れは一城の執政、即ち天國の樂園の監督者となつたからである。第一の武士即ち最も勇敢なる武士とは現世の富貴權力を有する者のことである。驕慢の箭はかくの如き武士を精神的に殺害する。次に第二の武士は現世の賢にして用意周到な者のことである。かくの如き人々は貪慾の箭に中つて死ぬるのである。第三の武士は衷心から神を愛する基督教徒のことである。かくの如き人物は、その正直な點に於てかの狡猾な人間の強敵として立つことが屢々あるものだ。

一三一、富 貴

或る國王は國內に令を發して何人でも我が許に來り請う者あらば、その欲する物を與へらるべしと教へた。貴族や富豪は王國とか、郡とか、或は爵位等を與へてくれと請うた。又或者は金銀財寶を欲した。彼等は皆欲するまゝに與へられた。次に來たのは貧乏人と正直者であつた。彼等も亦前者と同じ物を希望した。しかし、國王は是等の人々に「お前達は餘り愚圖々々してゐるから貴族や富豪等に私の所有してゐる物を悉くとられて仕舞つた」と告げた。彼等はこの話を聽いて大に失望した。國王は大に同情して次の如く慰めた。

「私は私の假りの所有物は悉く與へて仕舞つたが、未だ王權だけは保存してある。誰れもこれを求める者はなかつたのだ。それ故に私は今この王權を利用してお前達をかゝる貴族や富豪の裁判官となし、又その主人となしてやる」

貴族や富豪達はこの事を傳聞して大に心配しだした。彼等は國王に不平を申出した。

「陛下よ、私達は陛下が是等の貧乏人どもを私達の支配者として御任命になることを聞きまして大に不安を感じてゐる次第であります。私達はこのやうな屈辱を見る位ならば寧ろ死んだ方がましだと考へてをります」

國王は答へた。

「私はお前達に對して決して不公平な事をなした覺へはない。お前達の欲する物は皆與へてやつた

ではないか。それで今私の手許に残つてゐる物はたゞ王権のみである。しかし、それは先づいゝとして私はお前達に善い考へを授けてやらうと思つてゐる。若しお前達が一身の生活を支へてゆくに十分な財産があつたならば、それ以外の餘分の富はこれを是等の貧乏人達に與へてやるにかぎる。さうなれば是等の氣の毒な人達は面目も汚さず、面白く一生を送ることが出来るといふ譯だ。お前達は若しこの條件を認めるならば私は王權を是等の貧乏人達の掌中から取戻して、私の物としてもよろしい。さうなればお前達は屈辱を受ける心配も無くなるといふもの」

王の忠告はそのままに實行された。

〔解説〕

可憐なる者よ、國王とは神、その使者とは説教師、富者とは俗人、貧者とは心の貧しき者を指差したものである。

一三三、善者に對する羨望

昔同じ町に四人の醫者が住んでゐて何れも斯道の巧者であつた。しかし、四人の中でも年少者が最もその腕前が優れてゐた。隨て患者は皆その方にのみ走つた。他の三名はこれを見て嫉妬心を起した。そして三名相會つてこのやうなことを話しあつた。

「我々はどうしたならばあの目の上の瘤のやうな奴を取去ることが出来るだらうか。患者といふ患者は皆彼奴の許に逃げてゆくではないか。我々の収入は實にお話にならぬやうな始末さ……」

一人は言つた。

「まあお待ちよ。諸君も御承知だと思ふが、彼奴はこゝから三里隔つた大名のお屋敷へ毎週往診してゐる。そこで私は彼奴がいよく往診するその日にこの町から丁度一里目の所へ行つてゐる。そして其所で彼奴の來るのを俟つこと、する。君は二里目の所、又君は三里目の所に私と同じやうにして俟つてゐるのだ。一里目の所へ彼奴が來た時、私は彼奴に會てその面前で十字を切ることにする。君達二人も各々その持場で同様のことをするのだ。さうすると必ず彼奴はその譯を問ふに相違

ない。問はれたら我等は「君が癩病だといふことさ」と答へるんだ。さうなれば患者は最早や彼奴の診察を受けないよ」

その通りに萬事が進行した。

〔解説〕

可憐なる者よ、三人の醫者とは悪魔、俗世界、肉慾のこの三つの悪徳を指差したものである。第四人目の醫者は善良なる基督教信者のことである

一三三、心の交友

或る國王は二頭の獵犬を飼つてゐて時々鎖で結んで置いた。彼等は縛められてゐる間はお互に仲がよかつたが、一旦その鎖を解かれるとお互に噛み合ふのであつた。王はこれを見て非常に心配してゐる。

た。と言ふのは王が、折角彼等の縛めを解いて獵をしようと思ふ時いつも喧嘩をして獲物を追はないからである。

そこで王は或る博識家にこのことを話して、何とか善い方法はなからうかと相談した。その博識家は王に教へていふにはそれは何でもない事で、先づその一頭の犬を獐猛な狼と喧嘩をやらせ、若しその犬が形勢危しと見えたら、第二の犬をけしかけて助太刀をさせるのですと、かう彼れは教へてくれた。王は直ぐそれをやつてみた。第一の犬は終に狼に負けたので、第二の犬が助太刀をやつた。そしてその助太刀に出た犬は猛烈に狼と噛み合つて終に殺して仕舞つた。この時以後この二頭の獵犬は鎖で結んであると否とを問はず、常に仲睦じく生活するやうになつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、國王とは基督、二頭の犬とは魂と肉體のことである。若しこの二つのものが大罪といふもので自由に解放されるならば、お互に相争ふのである。狼とは悪魔のことである。悪魔が征服されて仕舞へば以上の二者は平和に生活する。

一三四、罪無くして死せし基督

セネカの話したところに依れば、昔或る町に一つの法令が發布されて、武士が死んだ時には必ず武装したまゝで葬ること、又この武士を墓の中から發掘して、その甲冑を盗み出す者があるならば、直に死刑に處せらるべしといふことになつてゐた。偶々この町が一人の暴君の爲に、包圍を受けた。彼等は周圍に伏兵や陷穽を設けて住民の多くを殺した。住民は今後到底敵に對して抵抗することが出来ぬものと思つてゐた。丁度その時一人の勇敢な武士がこの町に來た。彼等は住民の失望してゐる有様を見て大に同情した。彼等はこの武士の大なる武勳を承知してゐたので、彼等の爲にこの町を防ぎ、又彼等の爲にこの切迫してゐる危険を取去つてくれと嘆願した。武士は答へた。

「それは到底一通りのことでは出來る仕事で無い。特に私のやうに武器も持つてをらぬ者には出來ぬことだ。だから、私が戰場へ出るといふやうなことは逆も思ひもよらぬことだ」

市民の一人は言つた。

「貴殿、そのことなら御心配になる必要はありません。數日前一人の武士がこの墓に葬られました

が、その甲冑は實に立派な品でありました。何卒その甲冑を着て私達の町を救つて下さい」

武士は承諾した。故人の武具を受取つた。敵と闘つた。敵を追拂つた。その後彼れはその甲冑を舊の場所に戻した。

然るにこの破天荒な功を見て嫉妬する者があつた。前記の武士は國法を破つて死人の武具を盗んだといふ罪名の下で法廷に呼び出された。武士は判事に次の如く辯明した。

「閣下よ、二つの禍ひがあればその大きな方を先づ避けなくてはならぬと思ひます。私は武具無くしてはこの町を防ぐことが出來なつたのです。私は死者の甲冑を取出したことは事實であるますが危機經過の後、直に舊の如く戻したのであります。盗人であつたならば、このやうなことは決して致しません。必ずその甲冑を自分の物として保存するに相違ありません。然るに私はそのやうなことを致さなかつたのです。随つて私はこのやうな攻撃を受けるどころか、却つてその反對に報酬を受けるべきものだと思います。加之、町の中央で一つの家屋が火事を出したとするならば、その家だけを倒して、町全體を烏有に歸せしめないやうにするのが賢明なやり方だと思ひます。私の場合に於てもこれを適用して下さい。私が死者の武具を借用してこの町を救つたことは、武具を借用し

ないで町を全滅させたことに比較して、遙にその功が大きいと言はなくてはならぬでせう」

しかし、彼れの功勳を嫉妬してゐる者は叫んだ。

「彼奴を彼方へつまみ出せ。死刑だ。死刑だ。刑場へつれてゆけ」

判事は是等の亂暴な者どもの言葉に抵抗することが出来なくなつた。そして終に彼れを死刑に宣告をした。

宣告は直に實現された。全國民は衷心から彼れを氣の毒に思つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、包圍を受けた町とはこの俗世界のことである。武具を持たぬ武士とは基督のことである。武具は彼れの人道である。嫉妬深き者とは彼れを死刑に處した猶太人のことである。

一三五、良心

オーガステインはその昔「神の郷」の中でルクレシヤと呼ぶローマの高尙な一婦人が、カラティナスの妻であつたと書いてゐる。皇帝タルキニアスの王子セキスタスは、ルクレシヤに非常に戀ひしてゐたのでその王城へ招いたことがあつた。王子はカラティナスと父王がローマを出立した時に或る好機會を選んで前記の王城に還り、其所で眠ることにしたのである。夜間彼れはルクレシヤの寢室へ友としてゝは無く、却つて敵として忍びこんだのである。そして彼れは一方の手を彼女の胸に横へ、他方の手に抜いたまゝ、の劍をひらめかしてかう言つたのである。

「私の思ひを遂げさせてくれるか、それともこの劍で殺されるか、何れが……」

彼女は決然として彼れを拒絶した。セキスタスは大に憤つて、よしそれならば自分にも考へがある。奴隸を殺してその死體をお前のベッドの中に入れてやるぞ。さうすれば世間の人達は皆お前と淫亂な行ひを信じて、誰れ一人としてお前を辯護する者はなくなるから……かういふ惡口を言つたのである。そして彼れはその惡行振りを遺憾なく發揮して是所を去つた。ルクレシヤは最も苦しい悩みに満たさ

れた心をもつて、急使を彼女の父、夫、兄弟、皇帝、孫、總督等に送つた。彼等は驚いて還つて來た。彼女は是等の人々の面前で次の如く話した。

「セキスタスは私の家に参りましたのは友人としてゝは無く、却つて一人の敵としてゝありました。カラティナスよ、御身のベッドは他人の衣を識るやうになりました。しかし、私は辱しめを受けたと申すもの、罪無き身であります。何卒私を罪といふものから解放して下さい。私は私自身の罰を覺悟致してをります」

彼女はこの言葉と共に、豫てから衣の下に隠してゐた劍を取出して彼女の胸に深く突きたてた。是所に集つてゐた人々はその武器を取上げた。そして彼等はタルキン家の一族をローマから追放するこゝとをその負傷してゐるルクレシヤの鮮血に依りて誓つた。彼等はその誓約の如く行つた。この悲劇の張本人たるセキスタスは程なく憐れむべき死を遂げた……然かも慘殺されて。

〔解説〕

可憐なる者よ、ルクレシヤは人間の魂のことである。セキスタスは悪魔、城は心である。この心の城に悪魔は入る。劍とは悔恨のことである。

一三六、盗人の失敗

一人の盜賊が或夜富豪の家に入らうと思つて屋根に登つて小さな孔を明けて、其所から家人の誰れか未だ起きてゐるかどうかと様子を窺つてゐた。家の主人は多少この事を知つたと見えて彼れの妻に密かにかう話した。

「お前はこれから大きな聲で、今私の所有してゐる財産はどうして手に入つたのですかと問うてみよ。そして私がそれを制止する迄止めないで問ふのだよ」

妻は命の如く大きな聲を出して次の如く夫に問うた。

「もし貴郎、貴郎は商人でも無いのに、どうしてこのやうな財産をお集めになることが出來たのですか、私にその譯を教へて下さいな」

夫は答へた。

「そのやうな馬鹿々々しいことな問ふものではないよ」

しかし、彼れの妻は問ふことを止めなかつた。終に夫は妻の熱心に促されて次のやうに答へた。
 「では私が話してやらう。しかし、私の話したことは祕密にしてくれよ、さうすればお前の好奇心が満足されようから」

「それは誓つて祕密に致します」

「では話さう。實は私は昔盗人であつたんだよ。今私が所有してゐる財産は皆この夜の窃盜で貯へたものばかりさ」

妻は言つた。

「それにしても不思議なのは、どうして貴郎は捕縛されなかつたの」

夫は答へた。

「それには大に理由ありさ。私の先生といふのはなか／＼豪ら者であつたが、その仁が私に一つの呪文みたいな言葉を教へてくれたので、私は他人の家の屋根に登つた時その呪文を唱へて、いつも捕へられるのを免れたのだよ」

「妻は問うた。

「その呪文を教へて下さい。何卒、何卒……」

「ではお聽き。しかし一度だけだよ。二度繰返へせば私の財産が皆無くなつて仕舞ふから」

妻は保證した。

「御心配なさらずともよろしいですよ。二度繰返へなくともよろしいですよ」

「その呪文といふのはね……しかし誰れか近い所で聽いてゐるのではなからうか……その呪文はね……大變な言葉なんだよ……「虚偽の」といふ一語さ」

妻は全く満足して熟睡した。夫は熟睡を装うてゐた。彼れはわざと大きな剣をかいた。屋根に隠れてゐた盗賊は夫婦の問答を大なる興味をもつて聞いてゐた。彼れは盗人の呪文を七度繰返へして唱へた。しかし、彼れはこの呪文を餘り一生懸命に唱へてゐた爲に彼れの足場を失つて、窓を通ほして家の中へ大きなひびきをたて、落ちこんだ。そして、その落ちた折に腕と脛の關節を外して、床の上に半死半生の有様で倒れたのである。

家の主人公はこの音も聞きつけたし、亦その譯も十分承知してゐたが、しかし、全く何事も知らぬといふやうな様子でわざと大きな聲を出して「どうしたといふんだ」と盗人に問うた、盗賊は苦しい聲で呻吟した。

「虚偽の言葉は私を欺きましたので」

翌朝盗賊は判事の前に引立てられた。そしてその後磔刑に處せられた。

〔解説〕

可憐なる者よ、この盗人は悪魔のこと、家とは人間の心、家の主人公は善良なる僧、その妻は教會

のことである。

一三七、基督の慈悲

イウセピアスの年代記に書いてあることであるが、或る一人の皇帝はローマの人民を治むるに非常な公平無私な態度をもつてし、罪ある者は貧富の別なく悉くこれを法令の定むるところに依りて罰するといふ有様であつた。然るに叛亂を好むこの國の元老院議員等は、皇帝を廢することに決議した。そしてこの良君主を王位から下し、且つ憐れむべき多くの人々を國內から驅逐して仕舞つた。

皇帝は直にコンスタンティンの許に逃けた。そしてコンスタンティンと親交を結んで、凡ゆる機會にその勇氣とその智力とを現はしたので、終に再び王權を我が掌中に收めることが出來た。そこで彼れは大軍を起して彼れの舊の都であつたローマの町を包圍した。彼れはローマの人々の一舉一動を警戒の目をもつて凝視してゐた。それが爲にローマの人民は町の出入口をすら遮斷されて仕舞つたのである。かういふやうな譯でローマの都は窮境のどん底に落ちて仕舞つた。ローマ市民は彼等の元老院議

員や、市民の中の若い男女等を皇帝の許に送つた。是等の代表者は皆素足のまゝで皇帝の陣營に赴き、彼れの前に平身低頭して昔の罪を謝したのである。しかし皇帝は斷乎としてその罪を許さなかつた。そこでローマの市民はローマ市になほ住んでゐたところの皇帝の父母をその使者として送つた。彼れの母親は涙を流して彼れの心を和らけようとした。彼女は彼れに彼女の乳房を見せつけて、この乳でお前を養育したのだから、今私の言ふことを許してくれて、その生れ故郷の都を滅さぬやうにしてくれと愁訴するのであつた。流石の皇帝も親子の愛に動かされて、終にローマの人民の罪を許してやつた。彼れはその後ローマ市に入つた。そして盛んに歓迎された。

〔解説〕

可憐なる者よ、この皇帝は基督のことである。ローマ市とは人の心であつて、其所から彼れは追放されたのである。コンスタンティンとは神のことである。元老院議員其他の者は豫言者、教長、使徒等のことである。

一三八、親切なる者は利多し

或る國王はメドラスと呼べる獨り子を持つてゐた。彼れはこの王子を彼れの後繼者に指定した。然るにこの王子は彼れの父親に對して少しも恩義を感じなかつたから、父王は憤つて彼れを皇太子の位から引降して仕舞つた。王子はかうなつてはどうするとも出来なくなつたからペルシア王の許に走つて憐れみを請うた。ペルシア王はこの王子の父親とは多年の間の競争者であり又怨敵であつた。王子はペルシア王に生涯奉仕することを誓つた。そしてペルシア王を教唆して己が生みの親に對して戰爭を開かせたのである。宣戰布告の後互に暫時勝敗が無かつた。偶々この大戰の折、メドラスは彼れの父親と格闘して重傷を父に負はせた。父は瀑の如く血を流した。メドラスはこの有様を目撃するや否や我が親不孝の罪を考へて我れとはなしに戦慄した。そして俄に心が一轉してペルシア王の軍を攻撃するやうになつた。ペルシアの兵は彼れの爲に撃退された。この後メドラスとペルシア王との間の誓約が空文になつたのは勿論である。王子は父王の許に走つて前非を後悔した。父王は王子の罪を悉く許した。かくて王子は再び父と平和に生活することとなり、隨つて王位も自ら彼れの掌中に落ちた。

〔解説〕

可憐なる者よ、二人の王は神と悪魔のことである。王子は人間の魂である。人間の魂が償はれたのは基督即ち神が己が血を流し給うたからである。

〔考證〕

孝道を巧みに説いてゐるあたりは何となく東洋的である。或はその種本は東洋物であるかとも思はれる。

一三九、心の負傷

アレキサンダー大王は全世界の王者であつた。彼れは嘗て大軍を率ゐて或る都市を圍んだ。然るにその折、多くの武士や兵士が目に見えぬ傷で殺害されることが毎日のやうになつた。大王は大に愕いて賢者達を集めて、さて言ふやう、

「これはどうした譯だらう。味方の兵は死ぬ……しかし、目に見える傷は一つもないが……」

賢者達は答へた。

「それには不思議はありません。城壁の下に怪物バシリスクが居るからであります。バシリスクは味方の兵を睨むとその病毒で皆死にます」

大王は問うた。

「ではそれを如何にして免れることが出来るか」

「バシリスクが隠れてゐる城壁と味方の軍との間に、どこか高い所がありましたならば、其所へ一つの鏡を据付けます。バシリスクはその鏡に寫つた己が顔を見て、我れと我が顔に毒氣を吐きかけそして自身で自身を殺すことになります」

アレキサンダーはこの助言を採用した。彼れの將士は一命を救はれた。

〔解説〕

可憐なる者よ、反省の鏡を凝視せよ。そして人間の脆弱なことを思うて悪徳を殺せよ、悪徳を引出すものは時といふものである。

一四〇、公平

皇帝ヘラクリアスはいろ／＼の道德にすぐれてゐた人物であつたが、特に正義を固守する點に於て有名であつた。偶々或る一人の武士が他の武士を殺人罪を犯したといふ理由で告訴した。それはかういふ譯であつた。

「その告訴された武士が前記の殺害されたといはれる武士と一緒に戦ひに出て往つた。然るに戦ひは無かつた。それにも拘らずその武士はたゞ一人だけで歸つたのである。故にこの武士はその友を暗殺したに相違ない」

國王はこの推察を當然のことだと思つた。そしてその武士を死刑に處することを宣告した。然るにいよく／＼死刑場に人々が集つてみると、偶然にも暗殺された筈の武士が健康な顔をして是所へ歩いて來た。判事は折角宣告して仕舞つた事件がこのやうに途中で挫折されるやうになつたのを見て大に憤つて、その告訴された武士に次の如く放言した。

「お前は最早や死刑を宣告されたのだから、どうしても殺されなくてはならぬのだ」

次に原告に對つてかう言つた。

「お前はこの武士が死刑に處せられるやうになつたそのそも／＼の原因であるが故に、被告と同様に死刑を受けるべき筈だ」

最後に今現はれて來た武士に對つてかう言つた。

「お前は第一の武士を殺す爲に送られたのであるにも拘らず、その使命を果さなかつたから、前二者と同様に死刑に處せられるのだ」

〔解説〕

可憐なる者よ、この國王は神である。最初の二人の武士は肉體と魂である。第三の武士は僧侶のこ

とである。

一四一、有益な助言

皇帝フォルジエンティアスの時代にゼデカイアスと呼べる武士が絶世の美人と結婚した。この婦人は美しくはあつたが頗る不貞節であつた。夫婦の住んでゐる家の廣間に一つの蛇がゐた。この武士は武術闘技や馬上試合等に餘り熱心であつた爲に、生活不如意となり終に貧乏のどん底に落ちて仕舞つた。彼れは今や武士としての面目も考へずに貧乏の苦しみを他人に愁訴し、且つ恰も絶望の境遇に陥つた者の如く、彼方此方と歩きながら、自己の爲すべきことを知らないやうな有様であつた。蛇は彼れの憐れむべき有様を見て、恰もバーラームの驢の如くその場合に不思議にも人間の聲が授けられたので、次の如く武士に話しかけた。

「貴殿は何故くよくよと思案にかきくれてゐるのですか。私の忠告を御採用になれば、後悔の必要もなくなりませう。」私に毎日旨い牛乳を少量づゝ與へて下さるならば、私は貴殿を富貴にしてあげま

す。

武士はこの約束に勵まされてその言葉の如く行つた。不思議や彼れはこれより俄に大きな富限者になつた。然るに偶々彼れの妻は一日彼れにかう言つた。

「この廣間にゐる蛇がこのやうに殆んど限りなき黄金を持つてゐるのは何といふ譯でせう。蛇を殺して黄金を全部私達のものにしようではありませんか」

武士は妻の助言を理由のあること、思つた。そこで彼れは妻の要求を容れて一方の手には蛇を殺す爲の槌を握りしめ、他方の手には牛乳の器物を持つた。蛇は牛乳に誘へ出されて例の如く孔から首を出した。武士は槌を振りかざした。蛇は彼れの不實な態度を見て直に首を孔にひきこめて仕舞つた。槌は牛乳の器物を打つた。彼れはこれを爲すや否や彼れの子供は死亡し、又彼れが今迄所有してゐた一切の財寶は悉く消えて仕舞つた。妻はこのやうに夫婦間の財寶が消えて仕舞つたのを見て、今更の如く前非を後悔して夫にかう言つたのである。

「嗚呼、私はとんだ悪いことを申上げました。何卒、蛇の孔の前へ行つて叩頭して前非を後悔して

下さい。さうすれば再び恵みを與へてくれるでせう」

武士はその意見に賛成した。彼れは蛇の巢の面に立つて涙を流しながら、前非を後悔し、何卒もう一度富貴の身として下さいと願つた。蛇は答へた。

「お前さんの馬鹿なのに私は呆れてゐる。その馬鹿は今後も直ほることはないでせう。お前さんが私の首を打たうとして振り上げたあの槌は、私のどうしても忘れることの出来ぬものであります。亦お前さんの恩知らずの態度を見てはいくらお前さんから謝罪をされても、安心してそれを信じることは出来ませんよ。私とお前さんとの間に眞實の交りは結ばれる筈がありませんよ」

武士は悲しみに満ちて次の如く答へた。

「私は今後どうあつてもお前さんに對して不忠實なまねは致しません。若しお前さんが私にもう一度私の貧乏を助けて下さるならば、私は今後如何なる小さな害といへどもお前さんに加へません」

蛇は答へた。

「友よ、悪智慧と毒氣は蛇の生れながらの性質であります。私の言つたことは間違がありません。首を槌で打たれやうとしたことを思出しますと、我れながら怖いやうな感が致します。さあ是所を去るがよろしい。愚圖々々してゐる私の毒氣に觸れると却つてお損になりますぞ」

夫は大に失望して其所を去つた。そして彼れの妻に言つた。

「お前の忠告を用ひたのは私が馬鹿であつたからだ」

夫婦の者はそれより以後永久に貧困の生活をしなくてはならなかつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、國王は神、武士はかの妻の助言を用ひて、天國の樂園を失つたところのアダムである。部屋の中の蛇は人心に宿つた基督である。その徳の力に依りて……」

〔考證〕

この物語は拉典イソップの中にも現はれてゐるものであるが、その種本の最も古き物は疑ひもなく、かの印度の古い物語集『パンチャ・タントラ』(Pancha Tantra)である。『パンチャ・タントラ』は『アラビア夜話』と同様に古い時代から南歐一帯の地に流布されてゐたものである。

一四二、悪魔の罠

或る権力のある國王は森林に樹木を植付け、その周囲を壁を以て保護した。そしてその森の中へさまざまな獸類を放つて大に楽しみとしてゐた。當時或る一人の男が不正の事を企て、それが發覺した爲に全財産を没收され、且つ彼れ自身が國外へ追放されることになつた。そこでこの男はさまざまの獵犬や網を用意して密かにこの御料地に忍び、その林中の動物を殺さうとした。彼れの獵犬の名はリッチャー、エミユレーム、ハンギッフ、ボーディン、クリスマル、エゴーフイン、ビーミス、レネレン等であつた。彼れは是等の犬と網を用ひて森林の中の凡ゆる動物を殺した。國王はこれを聽いて大に憤つた。そして彼れの王子に言つた。

「私のなつかしい子よ。お前はこれより直ぐ武装して軍勢をかり集めて亂暴者を殺して來るのだ。

若し殺すことが出来なかつたらせめてもの國外へ追出してくれ」
王子は答へた。

「御希望を必ず實現して参りませう。しかし、私はこの敵は非常に腕力の強い者であるといふことを聞いてをりますから、暫時或る美しい乙女と一緒に私自身を隠さうと思ひます。但しその乙女と申すのは智恵の秀でてゐる點では凡ての他の婦人を遙に凌ぐ者でなくてははいけません。私はその乙女と相談をした上で戦争の準備を致します」

父は承諾した。そして彼れに言つた。

「お前はこれからヴァリオーク城に往けよ。其所へ行くならばお前は世に稀れな愼み深い賢女を見出すであらう。お前はその乙女の力を藉りて我々の敵に戦ひを挑むのだ。私はそれが終れば彼女に多くの名譽を與へようと思ふ」

これを聞いてから王子は密かにその城に入つた。乙女は大に悦んで彼れを迎へた。彼れは其所に暫時滞在した後、父王から送られた兵士を引きつれて、いよいよ御料地掠略者の征伐に向つた。結局

彼れは彼れの強敵を倒した。そしてその頭を刎ねて王宮へ凱旋したのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、皇帝とは神、森とはこの俗世界、その壁とは神意のことである。叛逆者とは悪徳の基督教徒、犬及網は悪徳そのものである。王子は基督、城は聖母である。

一四三、不安

或る國王は一つの法令を發布して、今後若し俄に死刑に處せられる者が現はれた場合には、日出前にその罪人の家の前で歌を歌ひ喇叭を吹かせるから、さうなつたら、その家の者は黒い喪服を着けて王の前に出で、死刑の宣告を受けなくてはならぬと教へた。

この國王は或日一大宴會を開いて國內の諸大名を招いた。彼等は悉く出席した。音樂の名人は皆集められた。宴會の席は是等の美しい樂の音で破れるばかりであつた。然るに國王のみは頗る不愉快な

顔をしてゐた。彼れの容貌には強い悲しみの氣分がたゞよつてゐた。嘆聲と唸聲がその腹から吐き出されてゐた。宮廷の官吏は皆愕いた。しかし、誰れ一人としてその理由を問ふ者は無かつた。終に國王の弟は進み出で、密かに王に言うには、諸大名は皆貴殿の御様子を見て心配してをりますから、何卒その悲しみの理由を聞かして下さいと願うのであつた。王は答へた。

「今日はお前が歸宅するがい、明日この譯が分るから」

弟は戻つた。翌朝夙く國王は喇叭手に命じて彼れの弟の家の前で喇叭を吹かせた。そしてそれと同時に近衛兵を遣して速に彼れを宮城へ召した。弟は不吉な喇叭の音に大に怖れを抱いて起き上つた。そして直に黒服を着た。かくして彼れが國王の面前に現はれると、國王は一つの深い穴を其所に掘らせて、腐つた四脚の椅子をその上方につらせた。そして、その椅子の上に彼れの弟を坐はらせたのである。彼れの頭上にはたゞ一條の細い絹絲でつるしたところの一口の刀がぶらさがつてゐた。又、彼れの側には四人の男が各々非常に鋭利な刀を持つて立つてゐた：一人は彼れの前に、一人は背後に、一人は右に、一人は左にといふ風に。國王は萬事の手配が準備したのを見すまして、この四人の男に言ふやう。

「私が命令したならば彼れを切るのだよ、心臓の奥までも……」

喇叭其他の凡ての樂器類が是所に運ばれた。又いろ／＼の珍珠住肴を盛つた御馳走の數々が食卓に飾られて彼れの前に置かれた。王は言つた。

「私のなつかしい弟よ、お前の悲しみの理由は何であるか。是所に山海の珍珠がある。亦最も面白い音樂もある。お前は何故これを樂しまぬのか。何故そのやうに悲しんでゐるのか」

弟は答へた。

「どうして私が樂しめますか、朝の喇叭は私の死刑を告げたではありませんか。然るに今私は又弱しい椅子に坐はらせられてをります。少しでも動くならば眞逆さまに落ちて、下なる鋭い劍で刺されます。若し頭を上げるならば、上なる劍は私の腦につき通ります。加之、四人の獄卒は私を圍んでゐて貴殿の命令一つで私を殺さうとしてをります。是等の事を考へてみると、假令私が世界の國王にされても樂しむことは出来ません」

國王は答へた。

「そこだ、そこだ。今にして始めて私はお前に昨日の質問に答へようと思ふ。私が今王位に在ることとは恰もお前がその弱々しい椅子に坐つてゐるのと同様である。私の肉體は四つの要素で支へられてゐるのだ。私の下の穴は地獄である。私の頭上には神の正義の劍がかゝつてゐて、何時でも私の肉體から生命を取去らうとしてゐる。私の前には死の劍が在る。私の背後には罪の劍が在つて、神罰を私に加へようとしてゐる。右方の武器は惡魔、左方の武器は死後私の肉體を嚙まんとする蟲である。是等の事を考へてみるならば、どうして私は樂しむことが出来ようぞ。假令お前が今日私を怖れてゐるにしても、私は元來いつかは死ぬる者である。故にお前の怖はそれほど大きなものではない。然るに私はお前よりもつと大きな心配事を持つてゐる。萬物の創造者、救濟者、我等の主基督、これこそは私の最も怖れを抱いてゐる者であるのだ。なつかしき弟よ、もう二度とこのやうなことを問はぬやうに注意なさい」

弟は彼れの不愉快な椅子から立ち上つた。そして國王から教へられた事柄に對して深くお禮を陳べた。彼れは彼れの罪を後悔して一生を清く送ることを決心した。是所に出席してゐた人々は皆國王の

叱責法の巧みなのに感心した。

〔考 證〕

この物語の一部分はガワラの『コンフェシヨ・アマンティス』の中にも現はれてゐる。しかし、大體の骨組はガワラに依りて模倣されたものとは思はれぬ。

古い種本は『佛陀本生譚』(Barlaam et Josaphat)であらうと思はれる。

一四四、現世の實狀

或る國王の時代に餘りに著しい變化が然かも餘りに突然に起つて、萬事は善より惡に、眞實より虚偽に、強より弱に、正より邪にと移つて行つた。國王はこの世情の移りゆく有様を見て大に驚き、四人の賢者にいろいろ相談するところがあつた。賢者達はさまざま考へた末、町の四つの門に出掛けて行つて、その門の上に國家の變動する三つの原因を揭示することにした。

第一はかうであつた。

「力は正義となつてゐる。故に國に法律なし。晝は夜となつてゐる。故に國に公道なし。武士は戰場より逃ぐ。故に國民は面目を重んぜず」

第二は、

「一は二として通用す。故に國家に眞實なし。友は敵なり。故に國民に誠なし。惡は善として通用す。故に誠心をもつて奉仕するといふ美風なし」

第三は、

「道理と氣儘とが合體す。故に國民は名譽を輕んず。盜賊は榮達す。故に國に富なし。鳩は鷲となる。故に國家に謹直の美風なし」

第四は、

「随意に事が行はれる。故に國家に秩序無し。金錢は萬事を支配す。故に國事は治まらず。神は死

す。故に國家は悉く罪ある者のみである」

一四五、救世

アルバータスの語るところに依ると、フィリップの時代にアルメニアの人類未棲の二つの深山に通ずる路が一つあつた。その國の空氣が非常に有害であつた爲に、苟もこれを吸うほどの者は皆死亡したのである。故に國王はこの原因を明かにしようと望んでゐたが、誰れ一人としてこれを發見し得る者は無かつたのである。結局ソクラテイスが、呼び出されることになつた。ソクラテイスは國王に對つてそれは先づ、その山と同じ高さの高樓を建ててはいけませんと言つた。建物は直に作られた。次にソクラテイスは一點の曇つた所の無い明鏡を造つて貰つた。この鏡は山の姿を悉く寫すのであつた。ソクラテイスは先づこの高樓に登つてこの明鏡の中を凝視した。忽ち二つの惡龍が鏡に映じた。一は山の上に他は谷の底にゐた。そしてこの二つの龍は互に口を開けて空氣を吸うてゐた。彼れがなほ鏡の中を見つめてゐると、一人の青年がこの危險のあることを識らないで、馬に跨つたまゝ、でその

路を通過しようとしてゐた。そして彼れは見てゐる間に馬から落ちて死んで仕舞つたのである。ソクラテイスは直ぐ國王の許に走つて、彼れの目撃した事實を奏聞した。其の後巧妙な手段を用ひて惡龍は捕へられて直に殺された。

このやうにして是等の山に通じてゐる道路は、馬上の人にも、徒歩の人にも、等しく安全にして且つ平易な路となつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、是等の山とは現世の高尙にして且つ權力あるもの、ことである。龍とは驕慢にして然かも奢侈なる者をいうたのである。鏡とは救世主基督、高樓とは善良なる生活、馬より落ちて死亡した青年とは虚榮で滅びた人、ソクラテイスとは善良なる教長のことである。

一四六、王者に對する非難の聲

オーガステインは彼れの著『神の都』の中で書いてゐることであるが、ダイオメデスは海賊船に乗つて長い年月の間海上を荒らし、多くの船を掠奪し、或は沈没させたといふことである。彼れはアレキサンダーの命に依りて捕へられ、その面前に引立てられた時に、王は何故に汝はそのやうに海上を荒らしたのであるかと問うた。さうするとダイオメデスは王に却つて反問して言ふには、

「何故汝は地上を荒すのであるか、俺はたゞ僅に小さな船一つの持主であるといふ理由で、盗人の汚名を與へられてゐる。然るに汝は實に無数の兵を率ゐて世界を壓迫し、然かもやれ國王であれ、やれ勝利者であると褒められてゐる。俺の運命が變つてくれれば俺はもつと豪くなるかも知れぬ。しかし、汝はこれ以上豪くなれぬのだから、結局は今よりもつと悪くなる位が關の山だ」

アレキサンダーは言うた。

「私は汝の運命を變じてみよう。汝の悪意に依りて運命が非難されることを虞れるから……」

かういふ譯で彼れは富貴となつた。その上、彼れは盜賊から一躍して一國の王となり且つ正義を行ふ人となつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、己が船に乗つて海賊を働いてゐる者とは、現世の罪ある者のことである。アレキサンダーとは教長のことである。

一四七、罪の有毒性

或る國王の敵は非常に劇しい毒を用ひて國王を殺害しようと思つた。そこでその中の數名は賤しい者の衣を裝うて國王の住んでゐる町に來た。其所には國王が屢々飲用してゐる清泉があつた。前記の數名の敵はこの清泉に毒を入れた。國王は彼等の奸計を識らずに例の如くこの清水を飲んだ。そして終に毒の中つて死亡した。

〔解説〕

國王とはアダムのこと、國王の敵とは惡魔のこと、泉とは人の心のことである。

一四八、罪の刑罰

オーラス・ゲリアスがかの非常に富貴であつたと言はれるアーモンのことを記して言ふには、アーモンが甲の國からこの國へ行かうと思つた時に船を造つたさうである。ところがその水夫等は彼れの富を盗まうと思つて彼れの殺害を企てた。いよく彼れが殺害されようとする時になつて、彼れは水夫等に對つて、何卒あの人間の歌を好むと言はれてゐる海豚の爲に、私に一つ歌をうたはせてくれと願つた。そしてその願ひが許された。歌が終つてから彼れは海中に投げられた。海豚が彼れを救つた。そして無事に海岸へ運んだ。水夫等はアーモンが既に溺死したものとのみ想像してゐた。然るにアーモンはこの時既に彼等の罪を國王に訴へてゐたので、彼等は直に捕へられて悉く死刑に處せられた。

〔解説〕

可憐なる者よ。富貴の者とは有徳の人のことである。水夫とは悪魔、國王とは神のことである。

一四九、虚榮

ヴァレリアスの記録に依れば、或る一人の貴族はどうしたならば己が名を永久に残すことが出来るかと一人の哲人に問うたことがあつたさうだ。さうするとその哲人は或る有名な人物を殺害するならば、己が名を後世に傳へることが出来るかと答へた。そこでその貴族はかのアレキサンダー大王の父フィリップを殺害した。然るに彼れはその後憐れむべき末路を見るやうになつた。

〔解説〕

可憐なる者よ、邪道を踏んで俗界の名譽を求めんとする徒は皆この貴族と同様である。

一五〇、天來の甘露

ブリニーの語るところに依ると露も雨も降らぬ國があるさうだ。随つてさういふ國は一般に乾燥してゐる。しかし、たゞ一つだけ泉がある。人々はこの泉の水を汲まうとする時は、さまざまの樂器を携へて其所へ赴き、可成り長い間泉の周圍を歌つてめぐるのである。かういふ風にして樂器をかき鳴してゐると、水が自然に少しづつ湧いてくる。そしてだん／＼水量が増してきて終に溢れて出る。それを人々は思ふだけ汲取つて還へるのである。

〔解説〕

可憐なる者よ、乾燥した國とは人間のことである。又泉とは神のことである。樂器とはお祈りである。

一五一、罪深く且癩病にかゝれる心

或る國王の領地内に二人の武士があつて、その一人は貪慾、他は嫉妬深い者であつた。貪慾者の妻といふのは美人であつて、何人からも感嘆の的となり且つ愛されてゐた。然るに嫉妬深い武士の妻は

これとは全く反對に、その容貌が醜く且つ不愉快な感を與へる女であつた。嫉妬者は貪慾者の地所に接して少しばかりの地面を所有してゐた。この地所は貪慾武士が豫てから非常に欲しがつてゐたものであつた。そこで彼れはこの地面を賣つてくれぬかと再三願つてみたが、いくら代價を高く拂つてみても嫉妬者は決してこれを賣らなかつた。ところが最後にこの嫉妬武士は貪慾家の妻の美貌に打たれて仕舞つて、彼女とその地面とを交換することを考へた。ところが相手の貪慾家は直にこの條件に同意して彼れの妻にその意を言ひふくめて承知させて仕舞つた。さて、この極惡な約束が成立すると間もなく、嫉妬深い武士は癩病を彼女に感染させた。彼れはそのことを女に告げた。そしてその理由を次の如く説明したのである。即ち彼れは己が妻が醜婦であつて、その上、憎くらしくあるのに反して、隣人の妻は餘りに美人であるからつい嫉妬心が起きて、この不釣合な點を取去うと欲したのであるとかう言つた。癩病を傳染させられた女は非常に泣いた。そしてこの事柄を悉く彼女の夫に話した。夫も大に心配した。彼れはその治療方法を考へた。彼れは彼女に言つた。

「お前は癩病にかゝつたとはいふもの、未だそれが他人の目につくほどでもないのだから、是所から程近き或る大きな大學町へ往つて、大道に立つてゐて、其所を往來する者を一人々々誘惑してみるのが。さうすればお前は其の惡性の病氣を免れることが出来る」

この婦人は元來從順であつたから夫の言葉の如く行つた。偶々皇帝の一子がその大道を通過した際に彼女を見て、非常な熱心さで戀ひを求めるやうになつた。しかし、彼女は最早や遠からずして王位に登らうとしてゐる王子に、かういふ天刑病を傳染することを欲しなかつたから、その接近してくるのを拒み、且正直に自分が癩病患者であることを告白したのである。然るに王子の愛情はこれが爲に變るものでは無つた。却つてこれが原因となつて王子の愛は強烈のものとなつたのである。彼れはこのやうになつたことを恥しく思ふと同時に、これが世間に知られることを心配したので、今や自ら彼女の家に入りこんで日夜其所を離れぬといふ有様であつた。彼女は夫にこの事情を告げた。夫は大に心配して彼れの寢室を美しく整頓した後、王子を其所に嚴重に封じこめ、たゞ彼女のみを彼れに侍べらしめた。王子は其所に七箇年間引籠つてゐた。

偶々それから七年目に非常な大暑があつた。癩病王子は豫てから彼れの側に酒瓶を置いて、疲勞した時に元氣を新たにする考へであつた。然るにこの時庭園の中から蛇が現はれて來てその酒瓶の中につかつてゐた後、底に沈んで仕舞つた。王子はこの時眠つてゐたのであるが、餘りに渴したので目がさめた。そして傍の酒瓶を取上げて一息に飲んだ。勿論蛇までも飲んで仕舞つたのである。蛇は思ひも寄らぬ間に人間の腹中に飲み下されたので、無茶苦茶に王子の腹の中でのたうちめぐつて、王子の

腸を嚙んだ。癩病王子は氣も狂はんばかりに苦しみ出した。側に侍べつてゐた前記の婦人はこの有様を見て非常に氣の毒に思つたがどうすることも出来なかつた。王子は三日間苦しみつゞけた。しかし四日目に吐藥が與へられたので早速嘔氣を催した。彼れは吐いた：：腹中の病毒は固よりのこと、彼れを苦しめてゐた蛇をすら吐き出した。直に苦痛が去つた。そして程なく癩病も全快した。七日目に彼れの肉は幼兒の肉の如く美しくなつた。側に侍べつてゐた婦人は非常に悦んだ。彼女は彼れに美しい衣を着せ、美しい軍馬を與へて皇帝の許に送り還した。彼れは盛んに歓迎された。そして彼れの父王の死後王位に登つた。彼れは晩年を楽しく送つた。

〔解説〕

可憐なる者よ、二人の武士とは惡魔と人間の祖先のことである。第一の武士は人間の幸福を羨望する者で、その妻は醜婦即ち驕慢である。第二の武士は美人の妻即ち魂といふものを持つてゐる。癩病とは我等を天の樂園から俗界の大學へ驅逐したところの罪過そのもの、ことである。王子は基督のことである。基督は我等人間の爲に全責任を帯び、特に自ら苦しみを受けて、我等の罪の報いを我等自身から取去つて下さつた者である。癩病王子が渴した如く、基督は十字架上に渴し給うた。しかし、

酒に渴し給うたのでは無い。それは我等の魂を救はんが爲の渴であつた。蛇は基督の磔刑である。軍馬は神と人の性質である。基督はこの性質を持つて昇天されたのである。

一五二、永久の破滅

クレオニタスと呼ぶ王は彼れの臣下が敵の爲に包圍されてゐるのを見て、諭告を與へようと思つて其の地へ一人の武士を使者として送つた。王はこの使者に命じてその包圍してゐる敵の軍勢を罵倒する爲に、或る皮肉な句を巧妙に箭に書いて、それを敵軍の間に射込ませた。その句はかうであつた。

「神に望をかけ、神に誠心をさ、けよ、クレオニタスは包圍を解かんが爲に自ら出陣す」

〔解説〕

可憐なる者よ、この王は基督のことである。包圍を受けた人々とは罪を犯した者のことである。包圍した人々とは悪魔のことである。使者とは説教師のことである。

一五三、現世の苦惱

アンティオークの國王アンティオーカスは一人の王女を持つてゐた。この王女は絶世の美人であつたから、その結婚年齢に達するや、各方面から熱心に結婚を申込まれた。しかし、何人にこの女を與へるかといふ問題は父王にとりては大なる心配の原因であつた。彼れは彼女の容貌の比類なき美を持つてゐることを思ふ毎に、又彼女の姿の美しいことや、或は彼女の性質の如何にも美しいことを考へる毎に、彼女を愛する念が次第に強くなつて、終には父親としての愛情以上に或る熱烈な愛をもつて彼女を見るやうになつて來た。彼れは清淨ならざる、或る不純の愛火をもつて心を焦がした。彼れは彼女に同一の情火を起すことすら望んでゐた。しかし、彼女は父子の道を嚴として失はなかつた。終に暴力が現はれた。強要に依つて遂行することの出来なかつた父は、最後に暴をもつてその目的を果したのである。彼女はとどめもなく泣いて泣いて泣き暮らした。この時彼女の乳母は部屋に入つて來た。そして何故そのやうに不安の様子を見せてゐるのであるかと問うた。王女は答へた。

「乳母よ、貴い二つの名は今日限り無くなつて仕舞つた」

乳母は言葉を返へした。

「それは又どういふことで？」

王女は乳母に告げた。乳母は又問うた。

「どういふ忌々しい悪魔がそのやうに悪戯をしたのでせう」

王女は答へた。

「何所に私の父上が？ 私には最早や父親といふ者は無いのだ。父といふ貴い名は私の心の中から消えて仕舞つたのだ。死んで仕舞へば皆もとどほりになる。私は死なうと思つてゐる。どうしても死なゝくてはならぬのだ」

乳母はこの事を聞いて非常に驚いた。そして彼女を慰めてその自暴自棄の考を和らけ、且つ自殺するといふやうな間違つた考へを起してはならぬとくれぐれも忠告した。

かゝる間に彼女の邪惡な父親は巧に偽善の衣を着けて、國民に正しき生活の美しき範を示した。そ

してその裏面に於て私かに彼れの不正の行爲の成功を誇り、且つ正當の道を踏んで彼女に結婚を申込んで來るところの多くの結婚希望者から、彼女を免れしめやうとする最善の方法を考へたのである。彼れはこの企を首尾よく遂げる爲に、非常に惡徳な手段を考へ出したのである。即ち或る謎を是等の求婚者に提出して、それを満足に答へ得る者があれば彼女をその人物に與へるが、若し答へ得ざれば直に頸を切つて仕舞ふといふ條件を出したのである。王冠を戴いてゐる多くの貴人は各地から我も我もこの比類なき美人を妻として迎へ度い爲に集つて來た。しかし、彼等は悉く首を刎ねられたのである。亦若しその祕密の謎を巧妙に解き得る者があつたにしても、さういふ人々はこれを解き得なかつた人人と同様に殺されたのである。これはその謎の解かれることを邪魔立てするが爲めであつた。そこで犠牲者の頭は城門の上で黒くなつた。随つて求婚者の數は次第に少數になつたのは止むを得ぬことであつた。何故なれば澤山の怖い死人の頭が門の上から彼等の上を見下してゐるのを目撃しては、何人でも勇氣が無くなつて、さつさとそれらの故郷に戻つたからである。

かういふ惡事を演じた王はなほ永久に不倫の行爲をつゞけようと思つて、このやうな事柄をいろいろ行つてみたのである。程なくタイアの若き王アポロニアスと呼べる勇士が現はれた。彼れは文字のある然かも亦富貴の人であつた。この國の海岸を船行してアンティオークに入つたのである。彼れ

はアンティオーカスの面前に出て、「陛下萬歳、私は陛下の御女を私の妻として迎へんが爲に参りました」と陳べた。アンティオーカスはこれを聽いて不快に思つた。そして若者の顔を熱心に凝視して、「お前はその結婚申込の條件を承知してゐるのか」と訊ねた。若者は臆する氣色もなく、「固より承知の上であります。城門に曝してある澤山の頸で十分承知してをります」と答へた。

國王はこの若者の自信ある態度を見て心中に大に憤るところがあつた。彼れは次の如く若者に言ひ放つた。

「では、問題を出す。かういふ問題だ。よく聞かれよ。

- 一、我は惡事をなして悦ぶ、
 - 二、我は我が母の肉を食して生活す、
 - 三、我は我が兄弟を搜索し、然かも我が母の生みたる子の中にこれを見出さず、
- さあ、この三つの謎を解いてみよ」

若者はこの問題を受取つて王の前を去つた。彼れはこれに就いていろ／＼と考へてみた結果、僥倖にも神意に依りて一つの解答を得た。彼れは再び直に不倫の行爲を敢てしてゐる王の前に現はれた。

彼れは次の如く答へた。

「王よ、御提出の問題は解けました。お聴き下さい。御問題の「我は惡事をなして悦ぶ」とあるは、陛下御自身のこととあります。陛下は實際のことを申されたのです。御自身の心を見られよ。又「我は我が母の肉を食して生活す」とあるは、それは陛下御自身でその王女のことをお考へになれば分ります」

王は謎の意味をこのやうに解かれて仕舞つたので、いよく己が罪惡が曝露したと思つたので、怖い目でアポローニウスを見た。そして言つた。

「若者よ、汝の答へは事實から遙に遠さかつてゐる。汝は死刑に處せられる者だ。しかし、今後なほ三十日の猶豫を與へてやるから、もう一度考へ直してみよ。汝はその間に汝の本國に還つて來るがよい。もしその間にこの謎が解かれるならば、私の女を汝に與へてやる。しかし、若しその答へが出来なければ死刑に處するぞ」

若者は大に心が迷つた。しかし、ともかく彼れの伴侶を呼び集めて彼れ自身の船に乗り込み、急ぎ

この國を出帆した。

若者が去るや否や、國王は彼れの執事タリアーカスと呼べる者に使者を送つた。タリアーカスは直ぐ國王の面前に現はれた。國王は言つた。

「タリアーカスよ、お前は私の祕密事を何くれとなく正直に聞いてくれる者である。お前は例の事も承知してゐると思ふが、あのアポロニアスと言ふ小僧は私の謎を解いて仕舞つた。だから、お前は時を移さずタイアー迄彼れの後を追うて行つてくれぬか、そして劍で彼れを刺し殺すか、又は毒殺してくれよ。その代りお前がこの使命を果して戻つて來れば、お禮は望み通りだ」

タリアーカスは武装した。そして金を澤山準備した後、この若者の本國へと船出した。

アポロニアスはその家に還るや先づ彼れの寶物櫃を開いた。そしてその中に藏めてあるいろいろの種類の書物を出して、例の問題を研究してみた。その結果何れも同一の結論にしか達することが出來なかつたのである。そこで彼れは獨語した。

「私の考へが大過なきものとすれば、アンティオーカス王は彼れ自身の女に對して道ならぬ愛情を寄せてゐるに相違ない」

アポロニアスはなほ考へつゞけて言つた。

「然らば汝アポロニアスは如何。汝は既に彼れの問題を解いたのではないか。然るに彼れは依然としてその女を汝に與へなかつた。故に神は汝を死なさうとはお考へになつてをられぬのだ」

彼れは彼れの船を用意させた。無數に米俵を積み込み、又金錢衣類等も十分に用意した後、僅に數人の忠實な従者を伴つたのみで、その夜の間に急いで船出した。翌日驚いたのは市民であつた。それほど彼れは市民から人望があつたのである。随つて彼等はこれが爲に非常に悲しんだ。例へば理髮師は永い間業を休み、興業物は一切禁止せられ、風呂屋は閉ざされ、寺も社も參詣人が無くなつて、市中は火の消えたやうに淋しくなつたほどであつた。

かゝる事柄の起つてゐる間に、アポロニアス殺害の命を帯びてこの國へ派遣させられたところのタリアーカスは、是所へ來てみると、家といふ家は皆閉ぢられてゐて、國民は悉く喪に服してゐるのので、驚いてその譯を一人の少年に問うた。その少年は答へた。

「では貴殿は未だ御存知が無いと見えます。實はこの國の王様アポロニアスはアンティオーカス王を訪づれて御歸國になりましたが、それから直ぐお姿が見えなくなつたのであります」

タリアーカスはこれを聽いて大に満足した。そして彼れの船に戻つて来て再び本國へと還つた。彼は國王に謁して次の如く使命を返した。

「陛下、御心配は御無用になりました。アポロニーアスは居らなくなりました。」

國王は言うた。

「それは何所かへ逃げたのであらうから、私は永い間そのまゝに逃がして置くことはしないぞ」

彼れは直に次の如き命令を國民に傳へた。

「反逆者アポロニーアスを捕へて我が面前に伴へ來たる者あらば、黄金五十タレントを與へらるべし。又若しその頭を持來たる者あらば、百タレントの報酬を得べし」

この誘惑的な命令は、たゞに彼れの敵をそゝのかしたのみならず、彼れの虚偽の友をもそゝのかしてその後を追はせるやうにしむけた。又多くの人々は彼れを追ふことの爲に彼等の時と力を捧げた。彼等は海を渡り陸を横切つた。遠近の國々を搜索した。邪惡な王はこの目的の爲に海軍の力をすら用

ひて一日も迅くアポロニーアスの行衛を確かめんとした。

然るにアポロニーアスは無事にタルサスに到着した。彼れはその地の海岸を歩いてゐた時、豫てから彼れの家に事へてゐたところのエリネータスと呼ぶ奴隸から見つかつた。エリネータスは丁度その時刻にこゝへ到着してゐたのである。彼れはアポロニーアスに近寄つて來て會釋した。アポロニーアスは貴人の常としてその奴隸をその人とは認めたものゝ、たゞ軽く答禮したに過ぎなかつた。その譯は彼れはこの奴隸をいやしんでゐたからである。然るに老人はこの冷遇を大に不満として再び彼れに會釋して次のやうな言葉をかけた。

「もし、もし、アポロニーアス陛下よ、お珍しや。おや何故私に禮をお返へしにならぬのですか。

いくら貧乏人でも、正しい事を行つてゐる者であつたら、御輕蔑になる必要はありませんまい。私が承知してゐるやうな事柄を、未だ御存知ありませんか……御用心が大切です」

「どんな事なのか教へてくれぬか」

「處罰命令のことです」

「王者とも呼ばれる者を處罰しようとする者のあるのは變だ。誰れがそのやうな亂暴なことをしようとするのだ」

「アンテイオーカスです」

「アンテイオーカスだと？ それは又どういふ理由で？」

「陛下がアンテイオーカスの子にならうと思召した譯で」

「私を處罰するといふ命令が出たとあるが、どれ位の金がこの頸にかけてあるのだか」

「捕へて來れば黄金五十タレント、頭を持つて來れば百タレントといふことであります。御用心が大事ですぞ」

かう言うてエリネータスは去つた。アポロニアスは彼れを呼び戻した。そして我が頭にかけてあ

るといふその黄金百タレントを速に受取るやうに勧めた。

「彼れは言つた。さあ、貧乏の私からそれだけのお褒美の金を貰ふなら貰つてくれ、お前はそれを貰ふだけの資格があるのだから。私の頭を刎ねて一刻も早く悪心の國王を悦ばせるがよろしい。お前はそのお褒美の金を頂戴したからといつて何の罪も無い譯だ。私は心からお前に約束するが、私はこの私の一命を欲してゐる者に對しては何時でもその望を遂げさせてやり度いと思つてゐるのだ」

老人は答へた。

「陛下、私は金が欲しくて陛下の御一命を取るといふやうな考へはつゆほどもありません。善人の友情は金よりも貴いものであつて、金で買ふことが出来ません」

彼れはアポロニアスの寛大な態度に對して深く感謝して其所を去つた。然るにアポロニアスがなほ海岸に愚圖々々してゐると、ストラングリヨと呼ぶ男が悲しげな顔をして、深い嘆息をつきながら彼れの方へ歩いて來た。アポロニアスは「おい、おい」と聲をかけた。ストラングリヨの方からも「これはこれは」といふ返禮の言葉があつた。そしてかう問ふのであつた。

「陛下は何故そのやうに心配さうにしていらつしやいますか」

アポローニアスは答へた。

「實際の事を言へば自分は或る國王の女を妻にと希望してゐるので……お前の國に私が隠れてゐることが出来るだらうか」

ストランギリヨが答へた。

「陛下、私達の町は非常に困窮してをりますから、到底陛下の御從者を隠くまつて食物を與へる餘裕はありません。市民は皆食物に缺乏し且つ自暴自棄になつてをります。死の神は一切の怖ろしいものを引具して私達の目前に立つてゐるといふ有様です」

アポローニアスは言つた。

「私を一人の避難者としてお前の國の海岸に流して下さつたその神様に對して、難有御禮を申さなければならぬ。若しお前が私の窺地を見て私を救つてくれるならば、私はお前に米を澤山お禮に送つてやる」

ストランギリヨは大に悦んでアポローニアスの足下に平伏して叫んだ。

「陛下若し餓死しようとしてゐる都市にお入りのことがあるならば、私達は陛下の御逃げになるのを隠すばかりでなく、必要に應じては私達の劍の鞘を拂つて、生命にかけてもお衛り致します」

アポローニアスはこの保證を得たので心を安んじて政廳通りに急いだ。そして判事席について次の如く群衆に話した。

「タルサスの人々よ、私はアポローニアスと言ふ者でありますが、諸君が今食物に缺乏して困難してゐるといふことを見ましたので、微力を振つてお救ひ申さうと思つてゐるところであります。私は諸君が私の恩を忘れぬことを信じてをります。私は今不正の敵から追はれて是所へ逃げて來た者であります。諸君は必ず私を隠して下さること、信じてをります。諸君はかのアンテイオーカスの邪惡の目的が何れにあるかを御承知でせう。亦私がどういふ天の配劑に依りてこの危機に諸君を救助するやうになつたかを御存知でせう。私は今諸君に澤山の米を分配しようと思つてをります……私の本國で賣つてゐる安い代價で諸君にお分ち致します」

市民はこれを聽いて非常に悦んだ。彼等は皆神に對して感謝の意をさ、けた。彼等は直ぐその米を受取つて貪り食べた。

アポローニアスはこのやうにして澤山の米を安價で彼等に賣つたばかりでは無かつた。彼れはこの機會を利用してその賣上高の全部をこの國の政廳に寄贈したのである。人民はかくの如き豫期せざる寛大の贈物を得たので、今にはじめぬこの王の慈悲深き心に感動されて、その恩を記念する爲に政廳通りに一つの戦車を造つた。その戦車は駛走してゐる四頭の軍馬が曳いてゐるものであつた。戦車の中に一つの肖像があつた。それはアポローニアスの姿をかたどつたものであつた。右手で穀物の穂から實を摩り落してゐる像であつた。又彼れの左足はそれを踏んでゐた。そして搏風に次の句が銘として刻んであつた。

「タイアーの國アポローニアスよりタルタス市に贈寄物あり。これに依りて市民は殘酷なる死より救濟されたり」

この後數日にしてアポローニアスはストラングリヨ及其の妻ダイオニシアスの助言によりてこの國を出帆してペンタポリリスに赴くことにした。ペンタポリリスはテイレニの一都會、アポローニアス

が安全に且つ富裕に生活し得る所であつた。彼れは多くの人々から盛んに見送りを受けてその海岸から船出した。三日三夜彼れは順風に帆を上げて進んだ。然るにいよ／＼タルサスの沿岸が見えなくなると彼等は針路を變じた。風はこの時猛烈に北から吹いて來た。雨は霰を交へて瀑の如く降り出して來た。船は暴風の狂ふがま、に吹き流された。黒雲が彼等の頭上を掩うた。風はいよ／＼その力を増して來て今にも彼等を殺さうとした。水夫等は萬事終れりと觀念して船板にとりつき、怒濤のなすがま、に一命を委ねることにした。つゞいて來たところの眞黒の闇のたゞ中に、一切の物は皆消え失せて仕舞つた。しかし、アポローニアスのみは一枚の船板に乗つたま、で、ペンタポリリスの海岸に流された。彼れは水を去つて海岸に泳ぎついた。そして其所で物思ひに沈みながら立つてゐた。彼れはなほ湧きたつてゐる大海に眼を放つて次の如く叫んだ。

「お、汝不實な波よ、私はあの兇惡な王者の手に墮れたかつたのに……私は今何人の所に行くのであるか。私の求むる國は何所。見も知らぬ、又助けなきこの異國人に誰れが救助を與へるだらうか」

このやうなことを獨言してゐると、恰度彼れと相對した所に一人の若者が彼れをじつと見て立つてゐた。その男は粗服を纏うてゐる頑丈な體格の、そして擻猛な顔した漁夫であつた。アポローニアス

は今や全く窮地に落ちて仕舞つたので、頭を下けてこの男の救助を嘆願したのである。彼れは涙をさへ流して漁夫の前に叩頭したのである。彼れは言った。

「お前さんはどういふお仁か分らぬが、ともかく、私を憐れんで下さい。難破して凡てを失つた私であります。私はこれまで幸福な日ばかりを見て来た者であります。家柄も決して貧しいものではありません。しかし、お前さんは私を助けるにしても、「その身分が分らなくてはといふお考へであるならば、私はこゝで私の身許を明かにして置きますが、實は私はタイアーの一王者、その名をアポローニウスと申す者であります。何卒私の命を助けて下さい」

漁夫は大に同情して彼れをその家に案内して、何くれとなく親切をつくしてくれた。彼れはアポローニウスに對して不行届のことが無いやうにと思ふ心から、彼れの上衣を二つに破つて彼れにその半分を與へた。そして言ふやう。

「さあ、これを着るんですよ。そして町へ往つて御覽。私よりもつと貴殿の御力になり得る人があらうと思ひます。しかし、さういふ人が見當らなかつたら是所へ又遠慮なく戻つて下さい。貧乏暮しで苦しからずばいつでも來て下さい。しかし、今後貴殿が王位に再びお即きになつたならば

この貧しい漁夫の絲のちぎれた粗末な衣を忘れたり、嘲つたりすることの無いやうに、今から固くお断り申して置きますぞ」

アポローニウスは言った。

「御心配は御無用です。若しその場合になつて私が恩を忘れるやうなことを行ふならば再び難破の憂目に會つて、今度はお前さんのやうな親切なお仁に救つて貰ふことが出来ぬと思つてをります」
漁夫はこの時都市の門にゆく道を指差したので、アポローニウスは直にその方へと足を向けた。彼れは進むべき路を考へてゐた。その時一人の少年が裸體のまま、で街道を走つてゐた。見れば少年の頭上に油が塗られ布片が巻いてあつた。少年は大きな聲で叫んだ。

「さあ、さあ、皆さん聴いたり聴いたり。巡禮者でも奴隷でも誰れでもかれでも、體を淨めたかつたら競技館へゆくんだ、ゆくんだ」

アポローニウスはこのお觸れの言葉に従つて直ぐ浴場に入つた。そして彼れの上衣を脱いで油を體に塗つた。彼れは油を塗りながらも眼を四方に配つて、誰れか彼れ自身と同列の人物がそのあたりに

來ぬかと注意してゐた。さうしてゐる間にやつと一人の人物が現れた。それはその國一帯の君主アルティストラテスであつた。アルティストラテスは従者の一隊を引連れてこの競技館に入つて來たのであつた。そして、彼れは是等の人々と球投げの競技をした。アポローニウスは走り出てその球を取つた。そして、實に巧妙な又實に迅速な態度をもつて、その球をアルティストラテスに投げかへした。アルティストラテスは従者等に合圖をして言つた。

「さあ止めた、止めた。この若者は私位の腕前があると思ふから……」

アポローニウスはこのやうにほめられたので、大に満足して得意氣に王の傍に近寄つた。そして油膏を取り上げて實に上手な手さばきで、王の體にこれを塗つてやつた。その後彼れは感謝の意をさ、けながら王者の體を淨めて、それが終るとさつさと是所を去つた。彼れの姿が見えなくなつてから王はその側に侍つてゐた人々にかう言つた。

「私は皆の者に誓つて言つが、今日私が見知らぬ若者の好意から、體を洗つてもらつたか、あのやうな心地のよい事は未だ曾て無かつた」

王はその従者の一人につけ加へて言つた。

「お前はこれから直ぐあの若者の後を追つてゆけ、そしてその人の身分を確かめて來るんだ」

従者は直にアポローニウスの後を追つた。彼れはこの若者が漁夫から貰つた粗末な衣を着てゐるのを見て來た。そこで彼れは王の許へ還つて言つた。

「その若者と申すのは難破して是所へ來た者であります」

「どうしてそのやうな事がお前に分るか」

「その若者はさう申した譯ではありませんが、彼れの衣はその事を物語つてをりました」

「それならばもう一度其者の所へ往つてくれ。そして私が食事を一緒にしたいと言つてゐたと傳へてくれ」

アポロニアスは王の請ひを悦んで受けた。彼れは使者と共に宮城へ來た。然るに使者は宮殿に入つてから王に接近して言うには、只今その難破した若者が是所へ參りましたが、服裝が餘りに汚いで王様の前に出るのが恥しいと申してをりますと答へた。王は直ぐ命じて美しい衣を彼れに與へた。そして夕食の席に彼れを案内した。

アポロニアスは國王と相面したところの最上席に坐した。山海の珍味が運ばれた。宴會が酣になつて來た。しかし、アポロニアスのみはそれ等の御馳走を食べようともせず、たゞ金銀の食器類ばかりを見てゐて、終には泣き出したのである。客の一人はこれを見て密かに國王に囁いた。

「これは私の想像が間違つてをらぬならば、陛下の御威光の盛なのを見て羨んでゐるのです」

國王は答へた。

「氣の毒にお前はとんでもない間違つた想像をしてゐる。彼れは羨んでゐるのではなくて、失つた物を思ひ起して悲んでゐるのである」

國王は微笑をた、へた顔をアポロニアスに向けてかう言つた。

「若い御仁よ、今日はどうぞ皆で楽しく食事を食べたがよからうではありませんか。幸福な事が將來必ず貴殿に起きて來ませうから」

國王は意氣鎮沈してゐるところの若者をこのやうに慰めてゐると、其所へ現れて來たのは彼れの美しい娘であつた。彼女は先づ父王に接吻し、次に來客に接吻した。彼女は一通りこの禮儀を終つてから再び父王の側に戻つて囁いた。

「父上、今父上の反對の席にあの主賓席に坐つて、非常に悲しさうな様子をしてゐられる若いお客様はどういふ御仁？」

父王は答へた。

「あの御仁は難破にお遇ひになつた不幸な御仁だ。今日競技館で私に親切をつくして下さつたから、このやうにお招きした譯なんだ。しかし、何んといふ御仁なのか私は未だ知らぬよ。若しお前がそれを知りたかつたら直接問うてみるがよい。お前は萬事を知つてゐる方が都合がい、いろいろ氣の毒な事情もあるやうだから、それを聞いたならばお前は必ず同情もし、慰めもし得ようといふ心になるであらう」

王女は父親の許可を得たので大に悦んで直ぐアポロニアスに近寄つて次のやうに言葉をかけた。
 「もし貴郎、貴人は何事にも御親切なものと承つてをります。若し御迷惑でなかつたらお名前やら御來歴やらをお聴き致し度うございます」

アポロニアスは答へた。

「私の名前をお訊ねになるのですか。私は海の中でその名前を失つて仕舞つたのです。貴人の身分……これもタイアーへ置去りにして來ました」

王女は又言つた。

「もつと分るやうに教へて下さいませんか」

アポロニアスは己が名前と今迄の冒険とを物語つた。そして語り終つてから彼れは大に泣いた。國王はこれを見て王女に言つた。

「お前はそんな事を問うたのは善くなかつた。古い悲しみを思ひ出させるといふものだ。しかしあの御仁が既に事實をお前に話されたのであるから、お前も今日以後は何事によらず自由に振舞つてよろしい譯だ」

王女は父親の希望通りに行ふこと、した。彼女は若者に叫んだ。

「アポロニアス殿よ、貴郎は私達の武士でありますぞ。悲しい事はこれでさつぱりと忘れて下さい。私の父親は貴郎を富貴にしてあげますよ」

アポロニアスは言葉を卑うしてお禮を述べ、又悲しみを訴へた。王はその後王女に對してかう言ひ出した。

「お前の立琴を是所へ持つて來てこの宴會に興を添へたがよからう」

彼女は侍臣に立琴を持つて來させて巧に彈奏した。賞讃又賞讃といった風で一曲の終る毎に拍手の音が盛んであつた。宮臣等は何れも感激して言つた。

「これほどの面白い又上手な歌は今日迄聞いたことも無かつた」

アポローニアスのみは沈黙してゐた。王はこの無禮な態度を見て不快に感じてゐたので終にかう言ひ出した。

「貴殿は面白からぬ事を私に見せつけてゐられる。貴殿以外の者は皆私の女の音楽の上手なのを褒めて下さるのに、貴殿だけが何とも申して下さらぬのは不思議である。それにはどういふ譯があるのですか承り度いです」

アポローニアスは答へた。

「慈悲深き王よ、何卒私の考へてゐることをお聴き下さい。お姫様の御腕前は先づ上の方ではあります、未だ奥儀に達してをりません。私にその楽器を與へて下さい。貴殿の未だお分りにならない事が自然明かになりますから」

王は言つた。

「貴殿は何事も御存知の様子、恐縮致しました」

立琴はアポローニアスの手に渡された。アポローニアスは暫時この席を去つた。そして頭を飾つた後再び前記の上席に即いた。彼れは楽器を取上げた。美しく且つ面白く奏でた。人々は異口同音に感嘆した。これは明かにアポローニアスの奏であるものではなく、日の神アポロー自身奏であるものであつた。

來賓は皆このやうな音楽は前代未聞であると言つてゐた。王女は熱心にアポローニアスを見てゐたが、それはやがて熱烈な愛情と變じた。彼女は父王に言つた。

「父上よ、何卒私に私の考へてゐる通りに、あの御仁にお禮を言はせて下さいませんか」

父王はその希望を許した。彼女は若者をなつかしげに見上げて言つた。

「アポローニアス様よ、私の父の贈物として貴郎に黄金二百タレント、銀四百パウンド、美服一揃従者三十名、侍女十名をお贈り致します」

それから彼女は其所にゐた従者に向つて言つた。

「さあ私が只今お約束申上げた物を持つて來て」

彼女の命令は直ぐ實行された。贈物の數々は運ばれた。それが終ると來客は皆席を立つてお暇乞をした。

彼等が去つてからアポロニアスも席を立つた、そして言つた。

「名君主よ、憐れむべき者の同情者よ、さらばお別れ致します。又學術の愛好者、哲學の同情者たる皇后よ、さらば御無事で……」

次に彼れは今彼れに與へられたところの從者等に命じて、彼れの拜領した物品を悉く宿所へ運ばせた。王女はこの若者を失つて仕舞ふのが如何にも遺憾であつたと見え、父王を恨めしげに見上げて言つた。

「父上よ、私達が只今贈物を呈したばかりのアポロニアス殿が、もう私達とお別れになるといふのは、何といふことでございませう。父王はこれをどうお思ひになるのですか。折角お贈り致した品が悪漢どもに盗み去られるのではないでせうか」

父王はこの言葉を聽いて理由のあることだと思つたから、直に宮殿の一部を彼れの爲に割いてその住所とした。アポロニアスは其所で立派な生活を送ること、なつた。

然るにその一方では王女のアポロニアスに對する愛情は非常に強烈のものとなり、夜間は一睡もしないといふ有様であつた。彼女は早曉俄に父親のベットの側に近寄つた。餘りに朝が早かつたので父親は驚いてその譯を訊ねた。姫は答へた。

「私はどうしても眠れません。父上お願ひですからあの若い御仁から音樂を教へて頂き度うござります」

父は娘がこれほど迄に音樂に熱心であらうとは思つてをらなかつたので、今この願ひを聽いて大に悦んだ。彼れは直ぐアポロニアスを呼び出して言つた。

「姫は音樂を教へてくれと熱心に希望してゐるから、是非教へてやつて貰ひ度い。お禮は澤山致すつもりだ」

アポロニアスは答へた。

「畏りました」

そこで姫は直にアポロニアスの弟子となつた。しかし、彼女の熱烈な戀は終に彼女の健康を害した。彼女の衰弱は他人の目にもつくやうになつて來た。醫者は招かれた。彼等は普通の病氣だと思つて、醫療を試みたが何等の効果も無かつた。彼等は彼女の病氣には殆んど手のつけやうが無かつた。彼等は口では豪らさうなことを言うてゐたが、實際は手にあましてゐた。

數日の中に三名の貴族が國王に謁した。彼等は皆永い以前から王女と結婚することを熱望してゐた者であつた。彼等は國王の御機嫌を伺つた後次の如く申出した。

「貴下は私達の何れかの者に王女を賜はるといふ御言葉でありました。私達は皆富貴の生れであります。何卒私達の何れなりと王女の婿として御選擇を願ひ度いもので」

國王は答へた。

「皆様は折の悪い時節にお入來になりました。娘は目下病氣中で閉口してをります。しかし、私は皆様の御希望に對して必要も無いのに返答を長びかせてゐるものとのみ思はれるのも不愉快であり

ますから、皆様から別々にそのお名前やら、その結婚の條件やらを書いて貰ふことに致しませう。そしてそれを彼女に見せた上で、選擇をやらせませう」

求婚者は贊意を表した。彼等は別々に書面を書いて王に渡した。王はこれを一通り讀んだ後、封印をした。そしてアポロニアスに是等を托して姫の許へ遣つた。姫は己が戀ひしてゐる男がたゞ一人で部屋に入つて來たのを見て、かつ悦びかつ驚いて叫んだ。

「貴郎はどうしてたつたお獨りで私の部屋にお出で下さつたのですか、まあ……」

アポロニアスは彼女の父親から委ねられた書狀を姫に渡した。姫はそれを開封して前記の三人の求婚者の名前やら條件やらを讀んだ。彼女は是等の書面を投げ出してアポロニアスに言つた。

「貴郎は私が結婚しなければならぬことを氣の毒だと思つて下さいませぬの」

彼れは答へた。

「別に何とも思つてをりません。貴女の御名譽になることがあるならば、何事も私はお祝ひ申します」